評伝 石川啄木

渡辺順三著

新興出版社

昭和32年

評伝石川啄木

渡辺順三著

新興出版社刊

石川啄木の肖像（五味清吉筆）

自分の言葉に
嘘はなけれど——

○

何となく
今年はよい事あるごとし。
元日の朝晴れて風無し。

○

友も、妻も、かなしと思ふらし——
病みても猶、
革命のこと口に絶たねば。

—悲しき玩具—のノートより

筑摩書房版日本文学アルバム（石川啄木）大竹新助撮影より採る

（北上川畔歌碑附近より岩手山遠望）

学童と遊んだ田圃道から宝徳寺の森を望む

歿後の病める節子未亡人

明治29年春(11才)盛岡の高等小学1年時代

盛岡帷子小路八の新婚の家(現存)

はしがき

この本は、石川啄木の生涯と、彼の思想・文学の発展を、青年諸君に、わかりやすく説くことを目的にして書いた。そして啄木の日記や手紙をタテ糸にし、彼の文学作品をヨコ糸にして、それによって啄木という人間の生涯を浮き出させようとして書いた。

啄木がはっきりした自覚をもって文学活動をはじめたのは、明治四十年以後からだといっていいだろう。すなわち北海道一年間の生活をうち切って最後の上京をした四十一（一九〇八）年春から、四十四（一九一一）年の秋頃までで、このわずか三年あまりの間に、彼の代表的な小説、詩、短歌、評論などが書かれているのである。

この期間は、日露戦争後の日本資本主義の躍進によって、ようやく帝国主義的な段階に入り、満州、朝鮮への侵略の手をのばしはじめた時期である。そして国内的には、天皇制絶対主義と軍国主義が強化され、それにともなって、国民大衆の自由と権利がつぎつぎとうばわれていった時期である。そのような時代の圧迫のなかで、啄木は「我々青年を囲繞する空気は今やもう少しも流動しなくなった。強権の勢力は普く国内に行亘ってゐる。」（「時代閉塞の現状」）といい、この強権を人民の「敵」として認識したのである。啄木が一時期の虚無や絶望からたちあがり、人民の

評伝・石川啄木　目次

装幀 永井 潔

評伝石川啄木

一、少年時代とふるさと

明治四十（一九〇七）年三月、盛岡中学校の校友会雑誌に「林中書」という文章を啄木が書いている。そのなかにつぎのようなことが書いてある。

「日清戦争が済んだ時、人は皆盃をあげて狗コロの如く躍り上った。そして叫んだ。『帝国の存在は今世界の等しく認むる所となれり！』、当時十歳であった予は、之を聞いて稚心にも情なく思った。」（中略）「爾後、所謂『臥薪嘗胆の十年間』が過ぎて、日露戦争が始って、済んで、遂に今日とはなった。人は、『日本は一躍して世界の一等国になった。』といふ。誠にお芽出度い話である。」（中略）「日本に一躍一等国になった！　一等国になるとは、国が成人して大人並に交際が出来る様になるといふことである。すると、明治廿八年に僅か十歳の小児であった予も、今二十一歳で、大抵の世の中の人と先づ話だけは対等に出来る様になって居る。」

石川啄木は明治十九（一八八六）年二月二十日、岩手県南岩手郡玉山村大字日戸の、曹洞宗日照山常光寺に生れた。父はこの寺の住職であった一禎という坊さんであり、母は一禎の師、盛

岡竜谷寺の住職葛原対月の末娘カツである。

（註）これまで啄木の実際の生年は明治十八年十月二十八日であるが、出生届出が翌年二月二十日になっているといわれていたが、最近北海道の岩城之徳氏の綿密な調査で、実際に生れたのも戸籍面の通り十九年二月だと報告（雑誌『短歌研究』昭和廿九年十二月号）されている。

ここで考えられることは、啄木は十歳で日清戦争をむかい、二十歳で日露戦争をむかえたということである。二十歳といえば、人生や社会について、ようやく真剣に考えはじめる時期である。啄木がそういう時期に達したころが、ちょうど日露戦争が終ったときで、日本の資本主義が飛躍的に発展し、そして帝国主義の段階に入った時期である。それにともなって資本主義の内部にあるいろいろな矛盾もだんだんはっきりあらわれてきて、深刻な社会問題、労働問題などがおこり、社会主義の運動もまたさかんになり、それらのことが文学にも影響して、文学の上にも大きな変化があらわれるようになった。当時の知識階級の人々にとって、「いかに生くべきか」「何をなすべきか」ということが日常にさしせまった問題として解決しなくてはならない時期であったのである。

このような時期に、啄木は二十歳という年齢に達し、日露戦争以後の日本の複雑な社会のなかで、啄木は成長してゆくのである。なおあとでくわしく述べるつもりであるが、日露戦争のあ

と、社会的矛盾がいよいよろこつになるとともに、天皇制絶対主義の力が強化され、国民の自由と権利がつぎつぎにうばわれてゆき、明治末年は暗黒時代といわれるような暗い谷間の時代であったのであるが、このような時代に、「いかに生くべきか」という問題を誠実に追求し、つねにヒューマニズムの精神をつらぬき、あくまで民衆の自由と幸福をもとめる方向に彼自身の思想と文学を統一していったのである。とにかく啄木の思想と文学を考えるばあい、彼が生れそだった時代、日露戦争が終ったとき「予は二十歳であった。」という、その時代とむすびつけて考えることが重要だと思うのである。

啄木には二人の姉（長女さだ、次女とら）があり、一人の妹（光子）があって、そのなかの一人の男の子として、両親のふかいいつくしみのなかにそだった。啄木のほんとうの名は一（はじめ）といった。啄木が生れた翌年の早春（旧暦三月上旬ともいい、二月ともいう。）北岩手郡渋民村の宝徳寺に父が転住したので一家をあげて渋民村に移った。啄木はこの渋民村で幼少年時代をすごし、自分のふるさととして生涯なつかしんだ。啄木の文学とこの渋民村とはきりはなせない深い関係があって、われわれにとっても、啄木といえばすぐ渋民村を思い出すのであるが、昭和二十九年四月、渋民村は玉山村に合併されて、いまは渋民村という名称はなくなった。しかし啄木の文学とともに、渋民村の名は永久に人々の記憶からは消えないであろう。

明治二十四（一八九一）年、六歳で渋民小学校に入った。当時神童といわれたほどの秀才で、工藤千代治という少年と、いつも首席を争っていた。

小学の首席を我と争ひし
友のいとなむ
木賃宿かな

×

千代治等も長じて恋し
子を挙げぬ
わが旅にしてなせしごとくに

と、啄木はあとになってその友を想い出して歌っている。十歳で小学校尋常科を卒業するときは彼はついに首席だった。渋民の尋常小学校を卒業した啄木は、高等小学校に入るために、盛岡市に出て、母方の伯父にあたる工藤経象方に寄宿し、盛岡市立高等小学校に入学した。同級に伊東圭一郎、二年に小笠原謙吉、三年に阿部修一郎、四年に金田一京助などがいた。この金田一京助は啄木を文学にみちびいた先輩の一人であり、終生の親友として、啄木の死にいたるまで深い交わりをつづけた人である。

啄木が高等小学校へ入った日の印象を、金田一はその著『石川啄木』のなかでつぎのように書いている。少年啄木の風貌をつたえる文章だから、少し長いが引用しておく。

見たところでは、六つ七つの子供と見違へさうな、如何にも子供らしい、小さな、左右の頬ぺたと、おでこが柔かに盛り上って、ゴム人形の面立ちそっくりな、併し牛乳色の肌細(きめこま)かな、くるくるっと円い目をしばたゝく可愛らしい子供であった。

私は、心の中で、どこかの尋常校へでも上る子供が、途中まで連れて来て貰ってゐる所だらうと考へた。併し、そんな風もなく、何処(どこ)までも、吾々の校門の方へ近づいて来て、やがて校門を入らうとするから、私は小さい声で、阿部君に聞いて見た。

「この子は？　高等小学なの」心でまさかと思ひながら。

すると阿部君が、大笑ひをして、かう云ったものだ。

「うん、この人は幼稚園へ上るのを間違って此処へ来たの。」

私は「道理」でと思った。が、その子は、首と体を一体に振って、いやいやをして、阿部君へすねてむづかっていた。阿部君は、にやにや笑って面白がりに、かう云った。

「この人はよ、乳母(ちはゝ)要らず（ゴムの乳首を取付けた牛乳壜のこと）から、やっと放れて来たの。」

「やあ！」と私達が笑ふと、その子は、捉ってゐた阿部さんの腕を引張ったり、胸へ飛びついて顔を打

ったりした。

「名は何といふの？」

と、私がはたの沢田君か、小林君へ尋ねたら、阿部さんが、かかられ乍ら尙も、

「名前は石川一っこさん、一名ふぐべっこさん。」

といって逃げだした。怒ってあとを追ひかける一さんは、成程、丸々肥えた青瓢箪の可愛い地肌を思はせる所があったからだ。私達もわあわあ笑って一諸にあとについて馳け出した。

「乳母要らずからやっと放れた……」だの「石川ふぐべっこさん」だのと云って、からかって逃げるものだから、順々にみんなに飛びついてかかって行く。誰かへかかって行くので、私の前をすれすれに横ぎる途端、それまで純然たる傍観者でゐた私も、何かやっぱりからかひたくなって、といふよりも、私の指がむづむづしてさはって見たい誘惑にのって、ぽっちやりしたその両頬の上におっかぶさるやうに載ってる白い丸いおでこへ、ちょっと人差指の指頭をさはった。同時に、「此のでびんこ！」（おでこの意）と覚えず云ったものだ。

すると幼い石川君は、他の友達を追ひかけるのを止めて、円い目をくるくるっと私へ転じ、下唇を嚙んで左右の糸切歯を覗かせながら、奮然と私へかかって来たのだった。

私の方は労はる気があるのに、向うは真剣なものだから、私はたじたじとなって、ぐんぐんあとへ圧されて、大勢の子の見る前で、到頭、溜りの壁まで押されて行った。背中が壁へぴたりと着いてもうあとへ

行けないのに、それでも、拳固をかためて、圧すやら衝くやらすることを止めないものだから、あばら骨やお腹のあたりが拳固で少し痛かった。

「おやおや、赤ン坊の様な子だが、割りに手剛いところのある子だな。」

と、少し興ざめたのが、私のその時の正直な印象だった。而も此が私の、石川啄木に対する第一印象であったのである。

からだが小さくて、高等小学にはいるのに尋常科にゆくのとまちがったのだろうと疑われたほどの啄木が、しかし自分よりずっと大きい幾人もの人々に、臆せず組ついていった彼のまけじ魂が、この金田一の文章によくあらわれている。啄木は何ものにたいしても、たしかに「手剛い」相手であった。

明治三十一（一八九八）年四月、十三歳で岩手県立盛岡中学校に入学した。同級に前記の阿部、伊東、その他小沢恒一（早大教授）などがあった。

小沢恒一の書いている「ユニオン会と啄木」（岩波版『啄木全集』別巻）に「啄木や私どもが盛岡中学に入学したのは明治三十一年四月であった。その頃のクラスの編制は身長順によったもので、私どもは小さい者の集りである丙組であった。啄木も私も追々身長は伸びた筈であるが、いつも小さい者のクラスに編制され、それが五年まで続いた。」とあるので、啄木の背のひくかったことはこれでもわかる。

啄木は中学二年になって、盛岡市新山小路の、長姉の嫁ぎさきである田村方に移った。そしてその年の夏期休暇を利用して、はじめて東京に出ている。当時上野駅に勤務していた次姉の嫁ぎさきの山本をたよって市内見物をして帰った。この田村の庭つづきの隣家に堀合忠操という人が住んでいて、そこの娘の節子と啄木は親しくなり、やがて相愛の仲となった。これが啄木の初恋で、そしてこの初恋がやがて実をむすんで、啄木二十歳の六月結婚するのである。

かなしみといはばいふべき
物の味
我の嘗めしはあまりに早かり

×

城址（しろあと）の
石に腰かけ
禁制の木の実をひとり味ひしこと

×

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のことなど

思ひ出づる日

などの歌は、のちに当時を回想して歌ったものである。

当時の盛岡中学は前記の金田一、小沢などのほか野村長一（胡堂）、田子一民（自由党代議士）などの人々がいて文学熱もさかんであったが、一方、日清戦争後の軍国主義はなやかなころで、軍人志望のものも多かった。この人々は、「修養団」というグループをつくり、及川古志郎（後の海軍大将）などが中心になっていた。（米内光政元海軍大将なども当時の盛岡中学生であった。）啄木も一時軍人を志望し、いかめしい馬上の将軍の姿などを夢想していた。

軍人になると言ひ出して
父母に
苦労させたる昔の我かな

×

うっとりとなりて
剣をさげ、馬にのれる己が姿を
胸に描ける

しかし啄木の軍人熱はながくつづかず、しだいに文学に熱中するようになった。明治三十三

（一九〇〇）年、中学三年になって、与謝野鉄幹（寛）の『天地玄黄』『東西南北』などの詩歌集を及川から借りて愛読し、また後に金田一から雑誌『明星』を借りて明星派の詩歌に親んだ。そして彼も「翠江」という雅号を用いて、短歌をつくり、回覧雑誌に掲載した。

明治三十四（一九〇一）年の二月、盛岡中学にストライキがおこった。その原因になったのは地元の古い教師と、東京などから赴任した新しい教師とのあつれきで、地元の古い教師の勢力がつよく、生徒に信望のある新しい先生はすぐやめてゆく。そういうことに不満をもった生徒たちは、地元の古い教師を排撃するためにストライキをやったのである。三年生のクラスでは啄木が中心になり、四年のクラスでは野村長一（胡堂）が中心になって校長にかけあった。このストライキには一年生も二年生も合流して問題が大きくなり、ついに文部省も問題の解決にのりだし、結局校長はじめ二十数人の教師が交迭して解決した。そして生徒側からは一人の犠牲者も出さずストライキは大勝利に終り、その四月啄木は四学年に進級した。

夏休み果ててそのまま

かへり来ぬ

若き英語の教師もありき

×

ストライキ思ひ出でても
今は早や我が血躍らず
ひそかに淋し

×

盛岡の中学校の
露台(バルコン)の
欄干(てすり)に最一度我を倚らしめ

と、啄木はのちに当時を思い出してうたっている。

啄木十六歳、中学四年生になってからは、彼の文学熱はいよいよたかまり、そして文学的才能も目にみえて成長した。回覧雑誌『三日月』『爾伎多麻(にぎたま)』などを編集し、『爾伎多麻』に美文「秋の愁ひ」、短歌「秋草」などを発表している。このように文学に熱中するとともに、学業の方は怠りがちになったので、学校の成績はわるくなるばかりであった。彼はたびたび教室をぬけだして、近くの不来方(こずかた)城址の草の上にねころんで、詩や歌を考え、未来の文豪を夢にえがいて、時をわすれることが多かった。

師も友も知らで責めにき

謎に似る
わが学業のおこたりの因(もと)

×

教室の窓よりにげて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

×

愁ひある少年の眼に羨みき
小鳥の飛ぶを
飛びてうたふを

これらの歌をよむと、当時の少年詩人啄木が、大空を自由に飛びまわる小鳥のように、いろいろな空想の輪をひろげながら、そのたのしさにうっとりとしていた姿が目にみえるようである。

この年の冬、啄木の生涯を考えるうえに忘れてならない一つの事件があった。それは足尾鉱毒事件である。

足尾鉱毒事件というのは、栃木県の足尾銅山の鉱毒が渡良瀬川に流れでて、そのために沿岸の

田や畑が荒れ、農作物ができなくなり、そのため附近の農民たちの生活がおびやかされるようになった。そこで農民たちが、いくども政府に陳情して、鉱山の設備改善をねがったのであるが、政府はその陳情をとりあげようとしない。当時栃木県選出の代議士田中正造がこの鉱毒事件に大きな関心をもち、被害の実情を調査してこれを議会の問題にしたが、やはり政府に誠意がなく、いつもうやむやにしていて解決がつかず、その後十年ものあいだうちすてておかれた。明治三十三年二月、鉱毒地の農民たちは、いよいよ最後の手段として、ちょうど開会中の議会に訴えようとし、デモ隊を組織して東京へ押しかけてくる途中、多数の憲兵や警官によって捕えられ、投獄されるというような事件になった。

このようなことから鉱毒問題は大きな社会問題となり、また大衆運動となって全国的にひろがった。このころ当時の東京帝大の学生であった河上肇が、この問題についての講演会をききにいって、鉱毒地の農民にふかく同情し、持っているだけの洋服や着物を、気の毒な被害地の農民に寄附したというようなこともあった。この鉱毒問題で献身的にたたかった田中正造は、明治三十四年十二月、ついに決心して代議士を辞職し、議会の開院式から帰る途中の天皇に直訴した。つまり渡良瀬川沿岸の農民の窮状を直接天皇に訴えて、何とか救済してもらおうと考えたのである。このときの直訴状は幸徳秋水が書いたものだが、この幸徳秋水は、のちに明治天皇暗殺の陰

謀をやったという無実の罪で、明治四十四年一月死刑になっている。これが一世を驚かしたいわゆる大逆事件で、この事件から啄木は大きな衝撃をうけ、そして彼はこのときから、はっきり社会主義者であることを宣言したのである。

当時十六歳であった少年啄木も、この鉱毒事件にふかく心をうごかされた。たまたま三十五年一月、青森歩兵連隊の一個大隊二百二名の兵士たちが八甲田山越えの雪中行軍をやったが、そのうちわずか十二名を残して、他は全部雪中で凍死したという事件がおこった。この連隊は岩手県出身の人が多かったので、盛岡市もふかい悲しみに沈んだ。啄木は級友をうごかしてこの事件の新聞号外を街頭で売り、その金を鉱毒地の農民や、凍死した兵士の遺族に義捐した。啄木はこの鉱毒事件についてつぎのような歌をつくっている。

夕川に葦は枯れたり血にまどふ民の叫びのなど悲しきや

啄木の社会的関心は、少年時代からすでにこのようにふかかったのである。

明治三十五（一九〇二）年十月、中学卒業を間近かにして啄木は退学した。その理由としていろいろ伝えられているが、第一には文学に熱中して学業を怠ったために、二学期の試験に数学に落第点をつけられたということが彼の心を腐らせたことにもよろう。それから前年のストライキ後、新しく赴任した校長が厳格で、生徒の自由を圧迫したということも、彼を学校から去らせた

原因の一つであろう。さらに彼は、文学をもって身をたてようという決心がようやくはっきりしてきて、そのためにはもう学校の勉強などどうでもいいと考えたことにもよろう。とにかく啄木はいさぎよく学校をやめて、その月三十一日上京したのである。

東北本線で盛岡から青森に向って三ツ目に好摩（こうま）という駅がある。この駅で降りると左手に岩手富士といわれる秀麗な岩木山が高くそびえ、右には北上川のゆたかな流れがある。はるか向うに岩手山と相対して、姫神山がとがった峰をみせている。北上川にかかった船田橋をわたって五六丁ゆくと、そこが渋民村である。

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

×

霧ふかき好摩の原の
停車場の
朝の虫こそすずろなりけれ

×

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

歌集『一握の砂』にはふるさと渋民を歌ったものがたくさんある。詩集『あこがれ』の三分の二は渋民で作られ、また彼の小説「雲は天才である」「天鵞絨」「赤痢」「足跡」「鳥影」などもみなこのふるさとが舞台になっている。このように啄木の文学とふかいつながりがあり、啄木の文学を育てた母胎ともいうべきふるさと渋民に、しかし、啄木はその短い生涯のなかでも、ごくわずかしか住んでいない。すなわち渋民尋常小学校を卒業した十歳までと、明治三十七年二回目の上京から帰って半年ばかりと、それから三十九年三月から翌四十年四月、代用教員をやめて北海道へわたるまでの一年間だけである。

明治三十九年三月四日の日記に、盛岡から一家をあげて渋民に移ったことについてつぎのように書いている。

我が一家の此度の転居は、（中略）田舎で徴兵検査を受けたいためや、又生活の苦闘の中に長く家族を忍ばしめる事の堪えられなかったためや、閑地に隠れて存分筆をとりたかったためや、種々の原因のある事であるが、新住地として何故に特にこの僻陬を選んだか。それは一言

にして尽きる。曰く、渋民は我が故郷――幾万方里のこの地球の上で最も自分と関係の深い故郷であるからだ。「故郷」の一語に含む甘美比ひなき魔力が、今迄、長く、深く、強く、常に自分の心の磁石を司配して居たからだ。愛と詩と煩悶と自負と涙と、及び故郷と、これは実に今迄の、又現在の、自分の内的生活の全部ではないか。
このように「甘美比ひなき魔力」をもって啄木をひきつけた故郷渋民も、啄木にとって決して安住の地ではなく、「石をもて追はるる如く」渋民を去って北海道にわたってから、ついに再びこの地を踏むことがなかったのである。

二、啄木の文学的出発

啄木の文学作品としては明治三十四（一九〇一）年九月、盛岡中学四年生のとき、級友でつくっていた回覧雑誌『爾伎多麻』に発表した「秋草」と題する短歌三十首であろう。ここにそのなかから十首をあげてみる。

人けふをなやみそのまゝ闇に入りぬ運命（さだめ）のみ手の呪はしの神

ゑ枕よこよひの夢はかたらざれなうらみうれたみさてはうれしの
世も人ものろはじさては怨みまじ理想のくものちぎれてし今
ひかりありて野辺の闇路に光りありて姿の哀れ照らししの宵
火かげあかき御殿(みとの)の戸ぼそそとあけて琴ひくみ手をうかがひよりぬ
さらでそのただかりそめの惑ひよとそとはほゑみし君や悶えの
紅ふくむ袖やおもきらふたげのたけのくろ髪おばしまの君
もやの袖おぼろの空の春の神歌やめすらむ月姫のみや
見ずや君そらを流れしうるはしの雲のゆくへの理想のみ国
あきの夜のそぞろの夢よおばしまにうすむらさきのもすその女神

これらの歌をみると、そのことばつきはいかにも明星調で、とくに与謝野晶子の模倣と思われるものが多い。しかしいかに模倣であっても、十六、七歳の少年の作としてみるとき、その早熟さに驚かざるをえない。

啄木はその前年あたりから与謝野鉄幹の『天地玄黄』や『東西南北』を読み、また雑誌『明星』にも親んでいたことは前に書いた。当時金田一京助はすでに『明星』の社友で、「花明」という雅号で同誌上に作品を発表していた。雑誌『明星』は明治三十三年四月に創刊されたもので

いわゆる新派和歌運動の中心であり、当時の日本の浪漫主義文学運動の主流でもあった。

日清戦争を経て、それにつづく明治三十年代の初期は、日本の資本主義のめざましい発展期である。しかしそれは「富国強兵」というスローガンにもみられるように、真に近代的な民主・自由の上には育たず、半封建的、専制的な国家機構を土台としたものであった。けれどもとにかく近代的人間の自覚はたかまり、自我解放をさけぶ声はまず詩や短歌を通じてあらわれてきた。このような機運のうえに雑誌『明星』は創刊され、伝統的短歌の封建的保守性をはげしく批判し、奔放な感情を、自由なことばと形式によって表現しようとした。一方では新しい詩の運動もおこり、島崎藤村、土井晩翠、蒲原有明、薄田泣菫などによって清新な近代詩の運動も発展していた。『明星』はこれらの新しい詩歌運動の中心として、はなやかな浪漫主義文学運動を展開したのである。三十四年八月、与謝野晶子の処女歌集『みだれ髪』が出版されて、天下を風靡するというありさまであった。

このような時代に、遠く盛岡の一中学生であった啄木が、及川、金田一などの先輩によって『明星』に接近し、その影響をうけて、まず短歌をつくりはじめたのである。啄木が最初に短歌に興味をもったのは、彼の父一禎も和歌のたしなみがあったことによるのかも知れない。

明治三十五年になると、啄木はさらに多くの短歌をつくっている。そして『明星』に入社して

短歌を投稿していたが、三十五年十月の第三明星第五号に、六号活字三段組のなかにはじめて彼の短歌が一首掲載された。このころは「白蘋」という雅号を用いている。その一首は

血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひここに野に叫ぶ秋

というのである。つづいて翌月号に二首、翌々月号に三首というふうに、だんだんふえていって三十六年七月号に四首、同十一月号に十二首が掲載され、そしてこの年十月から新詩社同人に加えられたことが社告として出ている。この十二首のうち

さびしみを胸に干すぢの髪のごと捲けると知りて天の名よびぬ
犠卓に篝火ささげて陰府の国妖女夜すがら罪の髪梳く

の二首を、翌月号の合評会で、鉄幹が「最も傑作です」といい、晶子も「さびしみをの歌が殊に宜しい」といっている。この合評の載った十二号にも白蘋の名で四首の短歌が発表されているがこの号に「愁調」と題する五篇の長詩も発表され、この方は「啄木」という雅号になっている。これが啄木の名の出た最初である。すなわち三十六（一九〇三）年十二月、十九歳の年から石川啄木となったのである。

啄木という雅号は、「愁調」五篇の詩のなかに「啄木鳥」というのがあって、これによって鉄幹が啄木とつけたといわれている。ここにはこの「啄木鳥」の詩をあげておく。

啄木鳥

いにしへ聖者が雅典（アゼン）の森に撞きし、
光ぞ絶えせぬみ空の『愛の』火もて
鋳にたる巨鐘（おほがね）、無窮のその声をぞ
染めなす『緑』よ、げにこそ霊の住家。
聞け、今、巷に喘げる塵の疾風（はやち）
よせ来て、若やぐ生命（いのち）の森の精の
聖きを攻むやと、終日（ひねもす）、啄木鳥（きつつき）
巡りて警告夏樹（いましめなつき）の髄にきざむ。

往きしは三千年（みちとせ）、永劫猶すすみて
つきざる『時』の箭、無象の白羽の跡
追ひ行く不滅の教よ。――プラトオ汝が
浄きを高きを天路の栄と云ひし
霊をぞ守りて、この森不断の糧（かて）、

奇かるつとめを小さき鳥のすなる。

この「愁調」五篇の詩をみた鉄幹は「読んで見ると――歌とは似もつかず清新な上に、荘重と優麗と哀調とに富んだものばかりであった。当時の私達の同人雑誌『明星』に毎月載せている薄田、蒲原両氏の詩風の影響は勿論あるが、確かに其れの基礎となって一貫するすがすがしい芳烈な純情は啄木君自身のものである。その措辞手法にも顕著な独創がある。私は妻を近く呼んで二たび三たび声に出して朗読した。云々」と激賞している。啄木はこれに力をえて、それ以後は短歌よりも長詩に力をそそいだが、短歌もときどき発表している。

三十五年十月末、盛岡中学を退学して上京した啄木は、小石川区小日向台町の大館方に止宿し十一月九日はじめて新詩社の集りに出席した。そして鉄幹をはじめ、平木白星、山本露葉、岩野泡鳴、前田林外、相馬御風、前田香村、高村砕雨（光太郎）、平塚紫袖、川上桜翠、細越夏村など当時文壇、詩壇にすでに名を成している人々と歓談した。啄木はこの日の日記につぎのように書いている。

啄木の日記は尨大な量にのぼっているが、その日記について桑原武夫氏は「日本の日記文学中の最高峯の一つといえるが、実はそれではいい足りない。いままで不当に無視されてきたが、この作品は日本近代文学の誇りとして、最高傑作の一つに数えこまねばならない。」（岩波版『啄木全集』別巻）といっている

ように、文学的にも価値の高いものであるが、この啄木の日記は、三十五年十月三十日、すなわち盛岡中学を退学して上京する前日からはじまっているのである。このことは、彼が中学をやめて、いよいよ文学に専心しようとする決心のあらわれではなかったかと思う。

「都は国中活動の中心なる故万事活潑々地の趣あり。かの文芸の士の、一室に閑居して筆を弄し閑隠三昧に独り楽しめる時代は既に去りて、如何なる者も社会の一員として大なる奮斗を経ざるべからずなれり。人の値は、大なる戦ひに雄々しく勝ち、もしくは敗くる時に定まる。

我は今日の集会に人々の進取の気盛んなるに大によろこぶ。その社員遊説の挙の如き、以て徴すべし。

あゝ吾も亦この後少し振ふ処あらんか。」

この文章をみると、当時『明星』に拠った人々の新しい文学運動に気負っていた様子がわかるし、啄木自身の文学にたいする抱負も知ることができよう。この集会のあった翌日、渋谷の与謝野家をたずね、はじめて晶子に会っている。

啄木は東京で英語の勉強かたがた西欧の文学の勉強をはじめた。当時の日記をみると、

十一月十二日。一日英語の研究に費す。読みしはラムのセークスピーヤにてロメオエンドジュリエットなり。

十一月十三日。午前英語。午時より番町なる大橋図書館に行き宏大なる白壁の閲覧室にてトルストイの我懺悔読み連用求覧券を求めて四時帰る。Shakespeare's "coriolanus" を求む。

十一月十六日。大橋図書館に一日を消す、帰路、中西屋より Mauriers novcl "Trilby" "Selected poems from Wordsworth's" を求む。

十一月十七日。午前は読書。午後は日本橋の丸善書店へ行って "Hamlet By Shakespeare" "Longfellows poem" の Selectionとを買った。

十一月十八日。午後は図書館に「即興詩人」を読む。瓢忽として吾心を襲ふ者、あゝ何らの妙筆ぞ。

十一月十九日。近頃余が日課は殆んど英語のみとなれり。昼はロングフエロー、ウヲルズヲルス、トリルビー等也。この夕モントゴメリーの詩に「黄昏」twilight を読む。

十一月廿三日。心地尚平常の如く快からざるを覚えたれどつとめて、一日イブセンの John Gabrel Borkman を訳出す。（十三頁まで）

十一月廿四日。夜十一時まで「ボルクマン」読み終る。

十一月廿五日。イブセンのボルクマン訳す。

十一月廿六日。英訳。午後、中西屋より Mr punchs pocket Losen By Anstey. Orioff and his By Gorky. 買ひ来る。

十一月廿七日。一日英語。夕方三丁目の後方の芝地にてゴルキイ読む。

十一月廿八日。この頃起床は八時すぎ、就寝は十一時すぎ。イブセン訳述。

大体以上のようであるが、彼は上京後いかに熱心に外国文学をまなんだかがわかる。そしてこのときの勉強が、のちの彼の詩作の上にも影響していることがわかる。

啄木は東京で飜訳でもして生活の途をたてる考えであったらしいが、何といっても年少十七歳の中学もでていない彼には、それははじめから無茶な考えであった。一銭の収入もなく、下宿料は払えず、それに健康も思わしくなく、失望と困窮のうちに明治三十七年十八歳の正月を、さびしい下宿の一室でむかえた。しかも下宿料も払っていないので飯もくれず、仕方なく着物や袴を質にいれて飢をしのいではいたが、そのうちにとうとう下宿をおいだされてしまった。そんなみじめな状態になっても、負けずぎらいの啄木は、父のところへは一回の便りもせず、知人の少ない東京をあてもなくうろついていたが、そのうち通りがかりの佐山某という人の同情で、神田のその人の下宿につれてゆかれて、二十日あまりも厄介になっていたが、からだの調子もいよいよ

悪くなったので、さすが強情の啄木もついに降参して、故郷の父のところへはじめて手紙をだしその窮状をうったえたのである。

啄木の手紙をみた父は驚いて、さっそく上京して啄木を渋民村につれてかえった。（このときの費用をつくるために、父は宝徳寺の境内の杉の木を、檀徒に無断で切って売ったことが、父が宝徳寺を追われる大きな原因の一つになっている。）それは二月末のことで、たのしみにしていた上野の桜も見ず、四カ月ほどの東京生活で、人生、社会の痛苦を身にしみて味わい、身も心も疲れはてて故郷へ帰ったのである。そしてなつかしい渋民の山河に接し、やさしい肉親の人々の愛情にいだかれて、在京四カ月の身心の疲れを休めることができた。

啄木は渋民村に帰るとすぐ盛岡にいる友人に手紙をかいて「あらゆる自然と人とは今我が心の巷の塵を洗い清め居候。古くして益々新たなる自然の情趣は申すに及ばず、友の一語、父母や妹の一挙手、恋人の一盼……若し生に病者の最好薬剤はと問はば、生はただちに故郷にかへれと申すべく候」と。

こうして啄木は故郷で病いを養いながら、短歌や長詩の作に熱中した。そしてこの年十一月、ふと興味がわいて「杜に立ちて」以下四篇の四八六調という新しい韻律の詩をつくり、これをさっそく『明星』に送った。これが前にいった鉄幹から激賞された「愁調」五篇の詩で、このとき

から啄木と号したことも前にのべてある。この年から翌三十七年にかけて五六十篇の詩を発表し「天才詩人」の名がようやく詩壇に高まったのである。

明治三十七（一九〇四）年一月、アメリカから出版された野口米次郎の詩集『東海より』の批評を岩手日報に書いた。そしてこの詩集が欧米ではなばなしい名声をえているのにあこがれ、野口米次郎に手紙を送って、自分もアメリカに行きたいという希望をのべている。

げに、洋濤遙かに大兄の撞き出した詩の巨鐘の、哀れむべき一青年に及ぼした余響は、単に詩興一面の感化ではなくて、私が幼時より心がけていた、米国行の志望に、強く制すべからざる加燃力を与えたのであります。此に至って大兄に対する私の敬慕は一層深い感銘と共に胸の中に燃えて居るのです。たとひ、如何なることがあっても、私は是非この望みを果さなくてはならぬ。或ひはこれは、自国に於ての学資さえない、いわゆるベニーレス・ボーイの私にとってあまりに突飛な、分外、又遂行し難い希望でありませう。突飛か、分外か。それは己が関する所ではない。あゝただこの一事が、私の生涯の進路をひらく唯一の鍵ではないか。さらばその鍵を握り、なつかしい大兄の高風に接すべく、如何にして己が渡航の機会、否費用を見附けたらよいのであらうか。あゝ大兄よ、少なくともこれは、私の未だかつて遭遇したことのない大問題であるのです。如何にして？、如何にして？　私はまだ知りませぬ。ただ私は心に期し

てそのたのしき日の必ずあるであらうことを信じて居ります。（37年1月2日）

空想ずきの啄木は、この当時しばらくの間は、アメリカ渡航の日を夢見ていたのであるが、それはとうてい実現できることではなかった。そして啄木は、その不可能なことをさとって、こんどは、ふたたび東京にでて、詩人としてはなやかに活動することを考え、かねて尊敬していた姉崎潮風博士に手紙を送って、博士が発刊することになっていた雑誌『現代思潮』の校正にでも自分を使ってもらえないかと熱心にたのんでいる。その手紙には

あゝ先生よ。『現代思潮』は、校正なり何になりと、小生が五尺の躯を動かすの余地無之候べきか。よしや病余の骨弱くとも、詩興彷彿として一味の慰藉胸にあらば、如何なる健闘と雖も耐へ難きことあるべからずと存じ候。疑ひもなくこれ先生にとりて、意外且つ無礼の御願ひと覚召し被遊べく候。あゝげに小生は未だ御高容に接したこともなく、ただ疎墨一封を以て先生を驚かしまゐらせたるの身に候。さもあれ、若し先生にして、児をこの苦境に救ひ、窮厄の尽頭に一望の戦路を開き給はゞ、児の幸福はただに『今』の幸福のみに非ざるべく候。犬馬の苦労何ぞまた辞せんや。先生にして之を許し給はゞ、小生は衣を売り、書を売りて直ちに先生の麾下に馳せ参じ可申候。（37年1月27日）

と書いている。この手紙を送った少しあと、姉崎博士が盛岡に講演にきたので、啄木はその旅宿に博士をたずねた。二月一日の日記に、「寒さに躯ちぢめて九時盛岡に至り、直ちに俥を駆って六日町高与旅店に潮風氏を訪ふ。杜陵館の演説まだ了らず、乃ち十五夜の月に嘯いて暫らく散歩。十時頃いたれば、氏すでにあり。洋風の一室にビールを呑んで語る。十二時にかへる。新しき年は幸なり。先生とここの地に会するが如きは実に千載の一遇なり。しかもこれ初対面なりき。種々の談話の如きは胸深く刻まれて忘るべくもあらねばここには記さず。」と書いている。

ちょうどその頃日露戦争がはじまり、国をあげて昂奮のるつぼのなかにあった。十九歳の啄木も「小生は、あらゆる不平を葬り去りて、この無邪気なる愛国の民と共に軍歌を唱へんと存じ候。明日は紀元の佳節、小生は郷校に村人を集めて、一席の悲壮なる講話を仕るべく候。露艦一隻仁川に封鎖せらると。佩剣戛として空に声あるの武人、才筆馳せて弾の如き文客、立たざるべからず、叫ばざるべからず候。小生は近く『愛国の詩』を賦して、唱へんとして歌なき民衆にそなへんと存じ候。我は何故にかく激したるか。知らず、ただ血は沸るなり。眼は燃ゆるなり。快哉。日は暮れて、森の絵、灯光に映じて、色彩の調和益々美しく相成り候。」（野村菫村宛書簡）と昂奮して書いている。

この日露戦争がはじまる前の三十六年秋頃から、堺利彦、幸徳秋水、木下尚江などという人々

が、戦争に反対して政府とたたかっていた。そしていよいよ戦争がはじまると、これらの人々は週刊『平民新聞』を発行し、政府の弾圧に屈せず、あくまで戦争反対のたたかいをつづけたが、啄木はこの反戦運動についてどの程度知っていたかわからない。また与謝野晶子が、有名な「君死にたまふことなかれ」という反戦的な詩を発表して問題になっていたが、これについて啄木は何を感じていたかもわからない。おそらく当時の啄木は、多くの世間の人々とおなじように、戦争を単純に愛国的な行為と思っていたのであろう。

しかしそれから二年あとの三十九年四月二十一日の徴兵検査のときの日記に「身長は五尺二寸二分、筋骨薄弱で丙種合格、徴集免除、予て期したる事ながら、これで漸やく安心した。自分を初め、徴集免除になったものが元気よく、合格者は却って頗る銷沈した居た。新機運の動いてゐるのは、此辺にも現はれて居る。」と書き、さらにそれから二年後の明治四十一年二月十一日（紀元節）の日記には「今日は、大和民族といふ好戦種属が、九州から東の方大和に都して居た蝦夷民族を侵略して勝を制し、遂に日本島の中央を占領して、其首長が帝位に即き、神武天皇と名告った記念の日だ。」と書き、その日の学校（当時渋民小学校の代用教員）の式に、朝寝をして出なかったといっている。このように、その後、彼の思想は急速に変化していっている。

啄木の文学的な出発は、ちょうど『明星』の創刊とほとんど時期をおなじくしている。そして

この『明星』によって代表されていた、当時の日本文学の主潮流であった浪漫主義によって彼の文学への情熱がもえあがったのであった。しかし日本の近代社会の未成熟から、この浪漫主義文学運動も未成熟に終った。彼らがさけんだ自我の解放も、たかだか恋愛の自由と、感覚的官能の放恣をもとめたに過ぎず、それはやがて『明星』の後身といわれる雑誌『スバル』（明治四十二年一月創刊）にみられるような、享楽的、頽廃的な傾向に走らざるを得なかったのである。啄木はこれより早く、すでに浪漫主義から脱脚して、自然主義文学の方向に転換しようとしている。しかしこれがはっきりするのは四十一年以後で、ここにいたるまでには、満一カ年にわたる北海道の生活があり、彼が彼自身の生活の苦闘のなかで、現実社会の矛盾に直面し、社会と個人、政治と文学の問解を、血のにじむようなたたかいのなかで、一歩一歩解決してゆくのである。

三、処女詩集『あこがれ』

明治三十六（一九〇三）年十二月の『明星』にはじめて彼の長詩「愁調」五篇が載って、それが好評だったことから意をつよくし、その後はもっぱら詩作にふけった。そしてそれがつぎつぎ

に発表されて、詩人啄木の名は中央詩壇にもみとめられていった。

三十七年九月、彼ははじめて北海道に旅行し、二十日間ほど、小樽の、次姉の嫁ぎ先である山本千三郎方に滞在した。十月十九日北海道から渋民に帰り、その月の二十八日、かねての望みがかなって、東京にでることができた。このときは前とちがって、すでに詩人として名声もあがっていたので、彼は今度こそ文学で身をたてるつもりで、意気揚々として上京した。そのときの啄木の様子を金田一京助は「石川君の二度目（実は三度目—渡辺）の出京は、仙台平の袴を着け、頭の毛を分けて、ソフトをかぶり、丸に笹龍胆を大きく染め抜いた木綿の五つ紋の羽織を重ねて出来るだけ背延びをして歩いた。」と書いている。いかにもこのときの啄木の得意な姿が目にみえるようである。

上京してまず本郷向カ丘弥生町の村井という家におちつき、翌月に神田駿河台の養精館という下宿屋にうつり、間もなくまた牛込区砂土原町の井田という家にうつっている。そして長詩「枯林」など十数篇の詩を書いて発表したが、金になるものはなかった。そのため生活のあてもつかず、とうとう年末には金田一に借金の申込みをしている。「かくの如くして違算又違算、自分だけは呑気で居ても下宿屋が困り、故家が困っては、矢張り呑気では居られず、全く絶対絶命の場合と相成申候」といって十五円の借金をたのみ、それが与えられたので、三十八年二十歳の正月

をむかえることができた。

新年はむかえたが、その後の生活は安定せず、そのため友人などにはますます不義理がかさなり、迷惑をかけることも多かった。それで友人たちからも愛想をつかされ、「石川は嘘つきだ。信用できない。」という評判がひろまった。「違算又違算」というようなことが、結果において嘘をいったことになり、友人たちを裏切ることになった。そして彼が盛岡中学で牛耳っていたユニオン会（英語ユニオンリーダーの勉強会―渡辺）の旧友たちからまで、ついに絶交を申しわたされるようなことになった。「兄よ、天下に小生の恐るべき敵は唯一つ有之候。そは実に生活の条件そのものに候。生活の条件は第一に金力に候。小生は金の一語を聞く毎に云ひ難き厭悪と恐怖を感じ申候。小生は少くとも悪人には無之候。然もただ金のために、否金のなきために、貧なるために親に不幸の子となり、友に不義の子と相成るにて候。茫々たる未来の事を思ふ毎に、小生はまずこの恐るべき敵に切歯せざるを得ず候。」（4月11日、金田一京助宛書簡）と、彼は当時の苦衷をうったえているのである。

しかしこのような苦しい生活のなかで、啄木にとって一つのよろこびがあった。それはかねての宿願であった詩集の出版である。すなわちこの年五月、小学校時代の級友であった小田島真平という人の援助で、処女詩集『あこがれ』を小田島書房から出すことができたのである。この詩

集には三十六年十一月に書いた「杜に立ちて」から、三十八年三月作の「めしひの少女」まで七十七篇の詩が収められている。年齢では十八歳から二十歳まで、満一年五カ月間につくられたものである。

この詩集には「啄木」と題する上田敏の序詩と、与謝野鉄幹の跋文が添えられている。「石川啄木は年頃わが詩社にありて、高村砕雨平野万里など云ふ人達と共に、いといと殊に年わかなる詩人なり。しかもこれらわかきどちの作を読めば、新たに詩壇の風調を建つるいきざし火の如く、おほかたの年たけし人々が一生にもえなさぬわざを、早う各々身ひとつには為遂げむとする。あはれさきには藤村・泣菫・有明の君達あり、今はたこれらのうらわかき人達を加へぬ。」と、若き詩人啄木の出現をよろこび、その将来に大きな期待をよせているのである。

この『あこがれ』は啄木の浪漫主義時代を代表するもので、内容としては空疎な非現実的なもので、観念的、抽象的な、そして夢幻的な美をもとめ、文字通り青春の「あこがれ」を天上の星や女神に象徴しているのである。そしてむずかしい漢語や古語をやたらに使い、美辞麗句をかさね、極度に技巧をこらして、あるものは壮重な、あるものは優麗な韻律によって詩的情緒をかもしだしている。それは前にあげた「啄木鳥」の詩をみても明らかであるが、ここにもう一つ「杜に立ちて」をあげておこう。

杜に立ちて

秋去り、秋来る時劫の刻みうけて
五百秋朽ちたる老杉、その真洞に
黄金の鼓のたばしる音伝へて
今日また木の間を過ぐるか、こがらし姫。
運命せまくも悩みの黒霧落ち
陰霊いのちの痛みに唸く如く、
梢を揺りては遠のき、また寄せくる
無間の潮に漂ふ落葉の声。

ああ今、来りて抱けよ、恋知る人。
流転の大浪すぎゆく虚の路、
そよげる木の葉ぞ幽かに落ちてむせぶ。──
薫風いづこへ吹きしか。胸燃えたる
束の間、げにこれたふとき愛の栄光。

この詩集が出たとき森鷗外が「有明は泣菫に勝り啄木は有明に勝る」といって激賞したと伝えられているが、とにかく突如としてあらわれた啄木の名に、詩壇はおどろきの目をもってむかえあるいは賞讃し、あるいは悪評もあったのである。日夏耿之助は『明治大正詩史』のなかで、「早熟と不完全と生硬とひとりよがりと稚気衒気がこの詩集の特色であって、云々」といい、また河出書房版の啄木全集の『あこがれ』の解説のなかで、「イミテイションの旨いことは啄木は白秋とも通じ露風とも通じてゐる。当時は藤村・晩翠対立時代がすぎて、泣菫・有明並立の時代であり、初に与謝野鉄幹と伊良子清白とが二座の両極の慧星のやうにかがやいてゐた。（中略）以下四人の外に訳詩のヴアーテユオウゾ上田敏を加へた五人の感化が啄木の若き『あこがれ』の間に実に目まぐるしい程気恥かしいほどに出てくる。よくもかうすくすく真似られたかと思はれる程抜け抜けと真似てゐるのである。その真似のなかに啄木の将来を示唆するものが多くあったならば、詩集『あこがれ』の価値が増すのであるが、遺憾ながら詩集時代はそれなりでポツリと断れて、あとは異質の短歌時代に移動してしまったのであるから、その点の興味はない。」といっている。『あこがれ』の模倣について窪川鶴次郎は「啄木の詩歌と個人主義思想の問題」（岩波版『啄木全集』別巻）という文章で『あこがれ』における模倣は、「自負と野心に燃えた『自己発展』が、あらゆるものをその鋭敏な理解力によって摂取しようとした、この一途の努力が、年

少の力の不足と未熟に結びついて生じた過渡的な現象ではないだろうか。もちろん啄木に模倣の才能が大いにあったことはいうまでもない。けれどもそれは単なる模倣だけのものではない。模倣の才能が、同時にその克服、それからの脱出の才能でもあることを、特に啄木の場合には見のがすことができぬであろう。」と理解ある見解を述べている。

事実、泣菫や晩翠や有明などが、けっきょく浪漫詩人として止まったのに反して、啄木は『あこがれ』を出してから数年ならずして浪漫主義から脱出している。「食ふべき詩」はその明らかな宣言であり、しかも驚くべきことは、それと前後して書いた「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」において日本の自然主義文学をもするどく批判し、その観照的態度と、否定的リアリズムの克服によって、新しい文学の方向を示唆している。また日夏は『あこがれ』をもって「遺憾ながら詩集時代はそれなりポッリと断れて」といっているが、啄木には『あこがれ』以後にもかなりの詩作があり、そしてそれらの詩は、あこがれ以後の発展を示しているし、ことに死の前年に書いた「呼子と口笛」の詩にいたって、あらゆる意味で鉄幹、泣菫、晩翠、有明など、さらに白秋、露風などをも、はるかあとの時代へ残して前進しているのである。さらに日夏は前のことばにつづいて「あとは異質の短歌時代に移動してしまった」といっているが、明治四十年頃までの短歌と『あこがれ』時代の詩とは、内容的にまったく同質のものとみてよいし、『あこがれ』以

後の詩の変化は『一握の砂』への移行と同質であろう。さらに「呼子と口笛」の詩は、歌集『悲しき玩具』と表裏一体の関係にあることも明らかであろう。

明治三十六年から八年にかけて、(すなわち『あこがれ』の詩がつくられたころ)の啄木は、「人生とは何か」「我」とは何か、「神・愛とは何か」というような問題について深刻に思いなやんだ時代である。当時の書簡をみると、たとえば野村長一(胡堂)に宛て、「其後生が日夜の惨憺たる心闘を重ねて、初めて『我』の何者たるか、果た『人』の如何なるかを探りはじめた時」(中略)「利己主義と個人主義(我が所謂)とは雲泥の差である。真に自己を愛するものは、又他の者をも一汎に愛すべき者である。」(36年9月17日)といい、また「只一言す。嘗て僕の保持した『愛』と云ふことに就いての観念は、『我を愛するもののみを愛す』と云ふ、大に偏狭なものであった。愛は包含である。一体である。融合である。その後から考へて来て、現在の僕は人生と云ふ混乱矛盾の渦中に或る明瞭な光明を認める様になった。『自己』と云ふ事を深く〳〵考へると、遂には勇躍して霊性の要求に応じ大なる意志は単に自己拡張のみではなくて更に自他を融合し、外界を一心に摂容する者であることを自覚してくる。」(野村宛、同9月28日)といっていることとでも、当時の啄木がいわゆる「心闘」を経て到達しつつあった思想傾向を知ることができる。

当時の啄木は、姉崎嘲風にふかく私淑し、また嘲風を通じて高山樗牛の思想にも傾倒していた

のである。三十七年一月十三日姉崎博士に送った書簡に「苦悶愁悵の間に、先づ思ひ立ちたるは、嘗て先生の御書にて聞き知りたるワグネルの研究に御座候。元より学浅く資乏しき事に候へば、彼の巨人が胸中を闡き尽すなどは思ひも及ばぬ儀に候へど、二三の書を友に、日夕想ひに耽りて、又得る所無きに候はざりき、はかなき夢想児に過ぎざる私、敢てワグネルを研究したり等とは申すまじく候。ただ、力の限り小さき成心を没して、空想の翼たゆまざるままに、彼の偉大を想像し、飢ゑたる胸の底に髣髴し出したりと申さば事足るべく候。あゝかくて先生は、知らざるうちに未見の一徒弟のために、尊き光の導者と成られ申候。」（中略）「先生にして若し今後小生のために師と呼ぶの栄を許し玉はば、わが願ひ或はそれにて事足る可く候。昨秋十一月の初め、病怠るにつれて我が終生の望みなる詩作の事に思ひ立ち、ふとしたる動機より一の新調を発見し、爾後営々として人知らぬ歩みの中に筆を進め居候。」と書いていることで、姉崎博士にたいする傾倒のなみなみならぬことが了解できよう。そして『あこがれ』の詩の出発はここからはじまっているのである。この手紙を出して間もなくの二月一日、盛岡で姉崎博士とはじめて会ったことは前に書いた。

この年八月三日、旧友伊東圭一郎に宛た手紙に、「神と云ふ者が世界の根本意志なるを悟り、その意志が意力たると同時に又万有に通ずる『愛』によって整然進歩すると云ふ事に明徹するに

至って、玆に偉大高俊の人格乃ち宗教的人格の理想を確立し、初めて真人の境に呼吸達入して教の奥秘を断定するに至る様に帰着するであらうことを信じて疑はぬのである。」といい、「あゝ思へば、神智の宏大無辺なる、神の愛の渾円微妙なる、到底人間の智の量り知る所ではない。生は斯く感じ、斯く信じて詩のために努力して居る。又将来、詩とは限らず、凡て我が赴く所はこの信念によって行動しやうと思ふて居る。それ故に我に於ては詩は乃ち宗教である。信仰は乃ち我が生命である。」といっている。

以上ながながと啄木の書簡を引用したのは、詩集『あこがれ』の根底になっている彼の思想、人生観を明らかにしたかったからである。彼が「日夜の惨胆たる心闘を重ねて」到達したものは個人主義であった。それは利己主義ではなく、自他融合の世界であり、神の意志である「宗教的人格」である。この自覚から彼は、「詩は乃ち宗教」であり、「信仰は乃ち我が生命である」という結論をえたのである。しかし啄木は、日露戦争後の現実の社会の矛盾に直面して、宗教的人格や、信仰を生命とする生き方では、とうてい「我」を現実的に生かしうる道でないことを、彼の人生にたいする誠実さと情熱によって、いやおうなしに思い知ったのである。『あこがれ』時代の彼は「芸術は芸術のための芸術」であり、「詩は理想の花、神の影」(37年2月10日、野村宛書簡)といっているが、四十二年に書いた「食ふべき詩」ではまったく反対の立場で、すなわち人生の

ための、生活のための芸術を主張するにいたっている。前にあげた書簡で明らかなように、『あこがれ』時代の啄木は観念論者、唯心論者であったが、それから数年後の四十三年には「予は強固な唯物論者である」と宣言しているのである。

啄木の「惨胆たる心闘」は、『あこがれ』以後においていっそう深刻につづけられ、そして彼は「人生いかに生くべきか」を、宗教的にではなく、あくまで現実的に解決する道をえらんだのである。だから彼は、かつて私淑し傾倒した樗牛や嘲風などをものりこえることができたのである。窪川鶴次郎は上掲の文章でつぎのようにいっている。

『あこがれ』の苦悩はもちろん『あこがれ』にのみにかぎられたものではない。それは啄木の詩と歌のうえにあらわれた二つの苦悩の一つを意味していた。それはすでに明らかなように単なる近代的人間的自覚と成長の苦悩ではなく、その自覚と成長が個人主義思想としてしかこの時代の人生観をとらえることができなかったための苦悩にほかならなかった。これにたいしてもう一つの苦悩は、『一握の砂』（明治四三・一二）から『悲しき玩具』（明治四五・六）への時期に啄木をとらえた苦悩であった。それは『あこがれ』の苦悩が個人主義思想の本質にもとずくものであったのに対して、これは要するにそれとはまさに相反する社会主義思想への発展にもとづくものであったということができる。

これら二つの苦悩は啄木文学の核をなすものであった。これらはまた近代日本文学の発展における二つの核をも意味していた。こういう事実は近代日本文学史において啄木文学のほかに見出すことができない。

啄木は『あこがれ』を出版してからのちも詩作をつづけている。そして四十一年四月末釧路を去って最後の上京をしてから、本郷菊坂の下宿で「泣くよりも」という八篇の詩を作っている。これまでの期間に大体百篇あまりは作られていると思われるが、啄木はこのなかから四十数篇をえらんで第二詩集の編集をしている。そして四十一年五月下旬の日附で、「第二集の初めに」という文章を書いている。そのおわりの方に「最近一ケ年間に於ける予の生活は、荒涼たる北海の風物を背景にして、凄惨を極めたる白兵戦場になしたる舞踏——と云ふを得べし。四月下旬、予は其恐るべき演舞場を去りて、海路より三度都門に客となりぬ。予が心は今、月光魂を溶す詩歌の故郷を旅立ちて、白日炎々たる自由の国土——散文の領域に走り去らむとす。而も、稀に異様なる興に捉へられて、詩を書かむと欲する事なきに非ず。以下に記し置かむとするもの乃ちそれなり。これ真の詩なりや否や。予之を知らず。唯、予が現時の心境に於て、衷心の求めむとする声調は正に恁くの如きものなるを信ぜむと欲す。」と書いているのであるが、啄木のこのときの上京は、「白日炎々たる自由の国土——散文の領域」、すなわち小説を書くのが目的であった。そ

して事実書いたのである。
　この第二詩集はついに出版されなかったが、四十二年になってからも「心の姿の研究」という六篇の詩を発表している。これらの詩は『あこがれ』時代の詩にくらべて、表現も平明になり、難解な象徴的手法を捨て、『あこがれ』時代のような空疎な理想や、幻想的に天や星にあこがれるといったものから、目を地上にうつし、人間の生活の中に詩材を求めるという傾向にはっきり変ってきている。ここにそのなかの短い一篇をあげてみる。

　　起きるな

西日をうけて熱くなった
埃だらけの窓の硝子よりも
まだ味気ない生命がある。

正体もなく考へに疲れきって、
汗を流し、いびきをかいて昼寝してゐる
まだ若い男の口からは黄色い歯が見え、
硝子越しの夏の日が毛脛を照し、

その上に蛋が這ひあがる。

起きるな、起きるな、日の暮れるまで。
そなたの一生に涼しい静かな夕ぐれの来るまで。

何処かで艶いた女の笑ひ声。

（明治42・12・13「東京毎日新聞」）

この詩と、前の「啄木鳥」や「杜に立ちて」などとくらべてみて、数年の間にいかに隔絶したちがいがあるかに誰しも驚くであろう。まず用語として口語を用いていることが第一である。（それは前の「泣くよりも」の作品にすでに試みられている。）そして現実生活をリアルにとりあげていることである。この「心の姿の研究」のなかに「夏の街の恐怖」「事ありげな春の夕暮」「柳の葉」などの詩もあって、それらはいずれも生活に疲れた都会の下層の男女がうたわれている。たとえば「夏の街の恐怖」では、「病身の氷屋の女房が岡持を持ち、骨折れた蝙蝠傘をさしかけて門を出れば」であり、「事ありげな春の夕暮」では、「質屋の店には蒼ざめた女がたち、燈火にそむいてはなをかむ。」の情景、また「柳の葉」では「旅鞄を膝に載せて、やつれた、悲しげな、

しかし艶かしい、居睡を初める隣席の女。お前はこれから何処へ行く?」といった、電車の中のやつれた女に目を注いでうたっているのである。

日本の詩壇にいわゆる自由口語詩の運動がおこったのは明治四十年頃からであり、その最初の「見本的作品」といわれる相馬御風の「痩犬」という詩が発表されたのは四十一年五月の『早稲田文学』である。しかし当時はまだ口語自由詩にたいして反対する人が多く、少数の先覚者によって試みられていたにすぎなかった。四十二年三月三日、宮崎大四郎に宛た手紙のなかで、平野万里や吉井勇が口語詩に反対したのにたいして、啄木は「僕は然し、口語詩はいゝと思ふ――理論上いゝと思ふ。尤も、今迄に出た作物の価値は別問題だが……」と答えたことを報じている。

啄木は「心の姿の研究」という詩を書いたとちょうど同じころに「食ふべき詩」を書いている。そしてこれまでの空想的な詩にたいして痛切なことばをもって嫌悪と自嘲の感情を吐露し、そして「実人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩」でなければならぬといっている。このように詩にたいする彼の考え方の発展から、口語自由詩にうつり、内容的にも空想的なものから現実的なものに変ってきたのである。そしてやがて「呼子と口笛」のような、当時の詩人の誰もが及びもつかなかった高い思想的内容をもった詩にまで飛躍してゆくのである。

四、「日本一の代用教員」啄木

詩集『あこがれ』を出版して詩人としてひろく認められるようになって、できれば東京にとどまりたい希望で、本郷区神明町に借家までしたが、ちょうどそのころ父の一禎が渋民村の宝徳寺を追われるという事件がおこったので、にわかに東京を去らねばならぬことになった。父が宝徳寺を追われるようになった理由は、前にもいったように寺の杉の木を檀家に無断で売ったということもあり、村民のなかに啄木一家に悪感情を抱いている人々があって、その人々の策謀もあったようである。

啄木は五月二十日東京をたって、途中仙台に下車して土井晩翠を訪れたり、小林花郷などの友人に会ったりして数日をすごし、六月四日盛岡に着いた。そして堀合せつ子と結婚し、市内の帷平(かたひら)小路というところに家を借りて、ここに両親と妹を迎え、一家五人の新家庭をつくったのである。この盛岡での新しい家庭生活は、啄木の短い生涯のなかで、もっとも満ち足りた幸福な時代であった。彼は当時書いた「江畔雑誌」という詩に序して「あはれ如何に非常なる変化なりし

ぞや。さきには一人の親縁さへなき客舎の人たりし身が、今はあたゝかき愛の新苑に心の限り甘さ慰めを呼吸するなり。さきには塵埃を吸ひ煤煙にはばめる日光を浴びしに、今は些かのけがれなき新鮮の空気を吸ひ、些の遮りなき天日の影を直ちに浴ぶる也。」と書いている。

この月二十五日、中津河畔の加賀野磧町に移転し、新しい意気込みでいくつもの詩や文章を書き、また友人を集めて歌会なども催した。こうして文学熱を燃やしていた啄木は、雑誌刊行の計画をたて、九月に『小天地』第一号を発行した。彼はこの雑誌に全力をあげて熱中し、表紙の絵まで自分で描いた。第一号は四六倍判五十二頁で、岩野泡鳴、金田一花明、与謝野鉄幹、綱島梁川、小山内薫、正宗白鳥、茅野蕭々、平野万里、細越夏村など、中央知名の人々三十数名の執筆者をえて、地方雑誌としては他にみることのできない、実に堂々たる内容のものであった。

しかし啄木にはさきまった収入のあてもなく、彼が気負って書く文章や詩も、金になるものは少なかった。そのため彼の生活難は目にみえて苦しさを加えてきた。また彼の健康もよくなく、病臥の日が多くなった。十月十八日ある友人に宛た手紙のなかに、「私、二つの敵あり、貧乏には打勝ちも致すべく候へども、不健康には致し方もなく、この頃また、西日あかるき窓の下、枕の上より天井のフシ穴数へる日のみ多きには閉口の至りに候。小生の如き性質のものに取りては、健全の時よりも病の天地に高臥して、却って幾多の新しき声をきくこと、先来の経験に徴しても

明かに候えど、さりとて、厨に米なくなりゆく日を数へながら、晏然として仰臥禅を学んでも居られず、この苦心惨胆の中に病の真味殊に深しなど苦笑し居り候ものの、浮世の波穏かならぬものと、毎日々々今更の様に感じ居候。」と書いて、貧乏と病苦とを訴えている。そしてまた、彼が大きな希望をかけていた『小天地』も、第二号を出す見込みがなくなり、彼の身辺は、秋のふかまるとともに、いっそう淋しいものであった。「小生はここ二月あまりの間は、殆んど全く何事もなすことをえず、詩も手紙も書かず、一室にとぢ籠って、愉快なること少なき病中生活を営み申候。まことにつまらぬ事に候。『小天地』もそのため休刊、不平と妄想の中に病悩を埋め居候。」とも友人への手紙に書いている。

こうした淋しい生活のなかで明治三十九（一九〇六）年を迎え、彼は二十一歳になった。このころまたアメリカ行を考えたがもちろん実現のあてはなく、二月に友人から借金して北海道の姉のところに生活打開の相談に行ったがうるところがなく、四五日滞在しただけで空しく盛岡に帰った。そしてこの月の二十五日、彼の長姉さだが肺結核で亡くなって、彼をひどく悲しませた。「私の一番大きい姉、私の一番世話に成りたる姉、兄弟四人の内最も不幸なりし姉、その不幸なる姉は遂に不幸のうちにあの世の人と相成り申候。私この度初めて身内の者の死に逢ひ申候。老母並に私の心中お察し被下度候。」と友人への手紙に書いている。

詩集『あこがれ』を出版して天才詩人の名を謳われ、それにつづいてながい間の恋人であった人と結婚して新家庭をもつことができたという、啄木にとっては生涯のうちのはなやかな時代であったはずのこの年も、父の失職とともに一家の生活が啄木の痩せた双肩に重くのしかかってきたことから、甘美な新婚時代の夢も、ロマンチックな文学への熱情も、苛酷な現実の力の前にうちくだかれてしまった。かくして盛岡での生活もいよいよゆきずまるばかりだったので、三月四日、啄木の一家はまた渋民村へうつった。彼はその日の日記に、つぎのように書いている。

父は野辺地が浜にあり、妹をば通ひ居る学校の女教師の家に下宿さす事にして盛岡に残した。母とせつ子と三人、午前七時四十分盛岡発下り列車に投じて、好摩駅にて下車、凍てついて横辷りする露路を一里、街の東側の、南端から十軒目、斉藤方の表坐敷が乃ち此の我が一家当分の住居なのだ。

不取敢机を据ゑたのは六畳間。畳も黒い、障子の紙も黒い、壁は上塗りのまゝで、云ふ迄もなく幾十年の煤の色、例には洩れぬ農家の特色で、目に毒な程焚火の煙が漲って居る。この一室は、我が書斎で、又二人の寝室、食堂、応接室、すべてを兼ぬるものである。あゝ都人士は知るまい、かゝる不満足の中の満足の深い味を。

またそのころ与謝野鉄幹に宛た手紙のなかに、「かゝる私がこの全身心を投げ出して打ち委せ

つべきもの、二十とせの恋人なる故郷を除いては、幾十万方里の世界の中、いづこにか求め候ふべき。げに、幼児の如き愛着と、尽くることなき追憶に充ち満ちたるこのなつかしきふるさとの清浄なる空気を除いては、今の私を癒すべき霊薬、いづれの所にも見あたるまじくと覚え候。」と書いている。啄木は渋民村を「二十とせの恋人」として、「尽くることなき追憶」のなかに、「幼児の如き愛着」をもっていたのであるが、しかし故郷の人々は必ずしもあたたかい心で啄木一家を迎えてはくれなかった。彼は日記につぎのように書いている。

故郷の自然は常に我が親友である。しかし故郷の人間は常に予の敵である。予言者郷に容れられざるものであらう。予が幼くしてこの村の小学校に学んだ頃、――神童と人に持て囃された頃から、既に予は同窓友の父兄たる彼等から或る嫉視を享けて居た。この嫉視は、その後十幾年、常に予を監視して居る。高い木に風の強いのであらう。今年の三月、予が盛岡の寓を撤してこの村に移らむとした時、彼等はいかにもして予を閭門に入れまいとした。然し予は平気で来てしまった。予が学校に奉職しようとした時、彼等は狂へる如くなってこれを妨げた。然し予は勝った。（中略）父が帰って来て、宝徳寺再住の問題が起るに及んで我が一家に対する陰謀は益々盛んになった。如何にもして我が一家を閭門の外に追ひ出さうとするのが、彼等畢生の目的であった。（中略）かくて我が一家を――つまり予を中心とした問題が、宗教、政治、

教育の三方面に火の手をあげて、渋民村を黒煙に包んでしまった。この戦争は、十九世紀の初の仏国王党と革命党との戦争其儘である。

この日記の文章にはかなりの誇張があるにせよ、野心家で自負心のつよい、そして情熱的な詩人啄木の言動が、東北の草深い渋民村の人々の目には、よほどの異端者として写ったにちがいない。そういうところからくる圧迫や迫害とたたかいながら、啄木はしだいに『あこがれ』時代の浪漫主義から脱けだして、現実を現実として直視するリアリストに成長してゆくのである。翌四十年の三月四日の日記、すなわち渋民を去って北海道にわたる少し前に、最後の渋民の一カ年を回顧して「噫其後の一カ年！　寂しい村の寂しい生活、とは云へ、予は今思出す、此一カ年は矢張り戦ひの一カ年であった。さうだ、要するに生活それ自身が戦ひなのだ。特に予自身の性格と境遇とに於て然るのだ。誰と戦ったか、敵は？――敵はすべてであった。予自身さへ、亦予の敵の一人であった。」と書いている。

生活それ自身が「戦ひ」であるという認識、また自分自身のなかにもたたかうべき「敵」を発見してたたかったこと、このことは誠実なヒューマニストとしての啄木を不断に成長せしめた鍵であろう。この日記を書いた少し前の一月二十九日の日記に

枕について も仲々眠られぬ習慣がついた。眠られぬから様々な事を考へる。或はこれは考へ

るから眠られぬのかも知れない。問題は主として、いつもの如く文芸と教育のことであった。此頃新詩社乃至其他の派の詩を読んでも、別に面白味も有難味も感じない。これはどうしたものであらうといふのが其一。自分の頭が荒んで散文的になったのかとも考へたが、然しこれは天上から詩が地上に落ちた為ではあるまいか、壇上の朗誦から床間もない室の雑談に変化した為めであるまいか。小説の事は毎日の様に考へた。自分はどうしても小説を書かねばならぬ。

現代教育の恐るべき欠陥についても常に考へた。そして自分の理想の学校の設計までやって見た。然しこれらは皆、少なくとも今の自分には、実行の出来ぬ事のみであった。

この日記をよむと、すでに後年の「食ふべき詩」にいたる前触れであることがわかる。明治三十九年から四十年にかけての渋民時代、すなわち代用教員時代の啄木は、まだ二十歳から二十一歳の若さであったが、一家の生活を一身に負わねばならぬという境遇から、彼は人生を具体的な社会生活として経験し、そのことで彼の思想も文学も、かつての空想的、夢幻的なものから、現実的、具体的な内容をもつようになったのである。

三十九年四月十四日から、啄木は渋民小学校の代用教員になった。そして月給八円を支給されることになった。この月給八円の代用教員啄木は、ここでも「日本一の代用教員」を自負し、文字通り全身をささげてその仕事に熱中した。彼は愛する故郷の子弟のために、学校と家庭の区別

なく、いっさいを忘れて教育に没頭したのである。五月十一日、小笠原謙吉に宛た手紙につぎのように書いている。

かゝる境にありて、我が唯一の楽しみは故山の子弟を教化するの一任也。小生は蓋し日本一の代用教員ならむ、兄よ、願くはこの小さき自負を公言するをゆるせ。朝起きて直ちに登校す。受持は尋常二年なり、十分休み毎には卒業生に中等国語読本を教ふ。放課後は夕刻まで英語の課外教授をなす。一日自分の時間といふものなし。夜は種々の調査、来客等に忙殺せらる。又時々近隣の女生徒を集めて、作文の教授をなすことあり、我が談話をきかんとする青少年の来襲に逢ふことあり。

兄よ、かくの如きは乃ち我が現在の日課なり、我が在職は蓋し長からざらむ。しかも我は、その長からざる間に於て、十分に人格的基礎を有する善美なる感化を故山の子弟が胸奥に刻まむことを期す。これ詩人たる予の本能的要求なり。これ実に何らの報酬をも期せざる我が心霊の希望なり。而して兄よ、予はこの希望の実現を確信せざらむと欲するもえず、予は就職以来日猶残し。しかも誰かまた予の如く生徒の心服を買ひうるものぞ。予が就職以前の杞憂は、放浪に慣れたる予が、果して中途にして倦怠に陥らざるをうるや否やの問題なりき。而して現在の心配は、予は果して予定の一ケ年位にてこの神聖なる教壇を退きうるや否やの問題なり、兄

よ、詩人のみよくひとり真の教育者たりうるには非ざるか。

人生に対する予の不平は日々に益々多し、生活の苦闘も亦日に甚だし、八円の月給がよく一家五人を養ひうるの理遂になきなり。然れども一切の不平は却って予が精神を鼓舞するの良薬なり、鼓舞せられたる精神の火は、日夜我が紅唇を迸り出でて、神の如く無垢なる子弟の血に燃え移りつつあり、感化は畢竟救済なり、一国の王とならむよりも、一人の人を救済するは大なる事業なり。

この手紙をみれば、当時啄木が、いかに大きな希望と確信をもって教育にあたっていたかがわかる。彼は「林中書」（明40・3「盛岡中学校校友会雑誌」）のなかで「教育の真の目的は『人間』を作る事である。決して学者や、技師や、事務家や、教師や、商人や、農夫や、官吏などを作る事ではない。何処までも『人間』を作ることである。唯『人間』を作る事である。これで沢山だ。知識を授けるなどは真の教育の一小部分に過ぎぬ。」といっているように、教員の根本をあくまで自主独立の人間を作ることと考えた。四十年一日七日の日記に「新春第一に先づ予の遂行せむとする計画二あり。先徒間に自治的精神を涵養せむとする其一也。兎角田園にまぬがれ難き男女間の悪風潮を一掃して、新らしき思想を些少なりとも呼吸せしめんとする其二也。」といっていることでも、彼があくまで人間的な自覚の養成を教育の第一に考えていたことがわかるであろ

う

代用教員になってから間もなくの日記に「児童は皆余のいふ通りになる。就中たのしいのは、今迄精神に異状ありとまで見えた一悪童が、今や日一日に自分のいふ通りになって来たことである。教授上においては、先ず手初めに修身、算術、作文の三科に自己流の教授法を試みて居る。文部省の規定した教授細目は『教育の仮面』にすぎぬのだ。」といっているように、彼は自分の信念にしたがって、自由な「自己流」で教授をやった。そして生徒たちの信望を一身にあつめたが、旧弊な校長や先輩の教師と意見があわず、ことごとに新旧の衝突があった。啄木はここでも雄々しくたたかった。

「八円の月給がよく一家五人を養ひうるの理遂になきなり」といっている通り、啄木の貧乏はひどいものであった。朝飯を食わずに学校に出たり、夕食がないので早く寝てしまうということもあった。「蚊帳も吊らず、給着て過し候ふは今年の夏がはじめてに候。」と友人への手紙に書いたほどであった。しかもその八円の月給さへ、村役場が払ってくれないこともあった。「去る廿一日の月給日にも請求致し候ひしも俸給金役場より出来ず、お葉書によつて今日も催促に参り候ひしも矢張り駄目、これは昨年の凶作の影響にて村税未納者多く、村費皆無のために候。」と、借金のいいわけの手紙を書いているのである。

この手紙をみると、東北農村のみじめさがよくわかるのである、啄木は後になつて

田も畑も売りて酒のみ
はろびゆくふるさと人に
心寄する日

×

あはれかの我の教へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づるらむ

×

年ごとに肺病やみの殖えてゆく
村に迎へし
若き医者かな

×

百姓の多くは酒をやめしといふ。
もつと困らば

何をやめるらむ。

と、もはや救いがたい農民の窮乏化にふかい思いをよせて歌っている。

三十九年六月十日、学校の農繁休暇を利用して上京した。それは第二詩集出版の相談と、父の宝徳寺への復帰運動であったが、この二つとも失敗におわった。このとき千駄ヵ谷の新詩社に十日ほど滞在して、新刊の小説を読む機会をえた。そして彼も小説を書く決心をして渋民に帰った。彼は日記につぎのように書いてる。

近刊の小説類も大抵読んだ。夏目漱石、島崎藤村二氏だけ、学殖ある新作家だから注目に価する。アトは皆駄目。夏目氏は驚くべき文才を持ってゐる。しかし「偉大」がない。島崎氏も充分望みがある。「破戒」は確かに群を抜いてゐる。しかし天才ではない。革命健児ではない。兎に角仲々盛んになった。が然……然し、……矢張自分の想像して居たのが間違っては居なかった。「これから自分も愈々小説を書くのだ。」といふ決心が、帰郷の際唯一の予のお土産であった。予は決して、田舎に居るからといって、頭が鈍くなっては居ない。周囲から刺戟をうけて進む手合とは少々格が違ふ。自然と人生とが目の前にある限り、予は矢張り常に生きて居るのだ。

この日記をよむと、意気軒昂たる啄木を想像することができる。当時の文壇は、新しい潮流と

して自然主義文学の擡頭期にあった。藤村の「破戒」は自然主義文学のさきがけだといわれているが、それにつづいて国木田独歩、正宗白鳥、田山花袋、徳田秋声などが、新らしい作家として登場してきている時代であった。啄木は東京に十日間ほど滞在している間に、これらの新作家の作品に触れ、少なからぬ刺戟をうけたことと思われる。それにしても漱石を「驚くべき文才をもって居る。しかし『偉大』がない。」といい、「『破戒』は確かに群を抜いて居る。しかし天才ではない。」と断定としていることは、啄木の批評眼のたしかさを示しているものといえよう。

　啄木はいよいよ小説を書きはじめた。すなわち七月三日から「雲は天才である」に筆を染め、さらに「面影」を百四十枚ばかり書いた。「雲は天才である」について「これは鬱勃たる革命的精神のまだ混沌として青年の胸に渦巻いているのを書くのだ。題も構想も恐らくは破天荒なものだ。革命の大破壊を報ずる暁の鐘である。」と日記に書いているが、この小説は渋民小学校を舞台にし、新田という月給八円の代用教員、そして「自ら日本一の代用教員をもって任じている」、「革命的精神」の「鬱勃」たる男を主人公にして、それにたいする田島校長と古山訓導は教育勅語の召使いであり、「平凡と醜悪とを『教育者』といふ型に入れて鋳出した」ような人間として戯画化したもので、啄木の教育革新をテーマにしたものであるが、小説としてはまだ生硬なところがあり、しかも未完で終っている。

「雲は天才である」より先きに完成した「面影」は啄木の処女小説であるが、これを雑誌『新小説』の後藤宙外に送ったが雑誌には載せてもらえず、さらに小山内薫に送って、どこかの雑誌に紹介してもらいたいと頼んだが、これも空しく返送されてきた。生活の窮迫はいよいよひどくなり、原稿を書くにも一枚の原稿用紙もなく、手紙を出すにも切手代がないというありさまであった。

こういうなかで彼は新しくドイツ語の勉強をはじめている。金田一からドイツ語の辞典とハイネ、シルレルなどの詩集をもらい、辞典と首っぴきでハイネやシルレルの詩を読んでいる。このときの日記に「人間の知識慾はすさまじく逞ましいものだ。」と書いているが、われわれもまた彼の知識慾のすさまじさと精力の逞しさには驚かずにはいられない。

そのころの日記をみると、十数篇の小説の構想を書いている。そのなかの一つに「本年三月四日、乃ち予が帰任してからの渋民村、（一大社会小説）。教育政治宗教三方面の問題を含み、明治現代の社会の縮図。過渡時代。純正なる旧時代の人間の死。旧時代と過渡時代を繋げる半文化人の暴威。新時代の曉光、（少年の新意気、人格の感化）主人公は自身。その他数十名。地方的特色の描写。」などというのがある。これをみても、彼が小説によって現実批判をくわだてていたことがわかると思う。

彼の処女小説「面影」は翌年函館で火災にあって未発表のまゝ焼失してしまった。この年十一月になって「葬列」前半五十七枚を書き、これを『明星』に送って同誌十二月号に掲載された。「予は、白状すると胸がドキ〳〵し出したのであった。これは初めて活字の厄介になった予の小説である。」と日記に書いている。この年十二月二十九日、長女京子が生れた。啄木は「予は此日の心地を、いかなる語をもっても表はす事能はず。嬉しさに立っても臥ても居られぬ様なりき。心の底がうすら痒ゆき様なりき。」と日記に書いている。かくして啄木ははじめて父となり、そして間もなく明治四十（一九〇七）年、二十二歳の正月を迎えたのである。

新しい正月を迎えても啄木一家の生活はいよいよ苦しく、その苦しさを見かねて、父の一禎がある夜ひそかに家出するという事件がおこった。それは三月五日のことである。啄木はこの日の日記に「此朝予の心地は、とても口にも筆にも尽せない。殆んど一ケ年の間戦った宝徳寺問題が最後のきはになって致命の打撃を享けた。今の場合、モハヤ其望みの綱がスッカリきれて了ったのだ。それで自分が、全力を子弟の教化に尽して、村から得る処は僅かに八円、一家は正に貧という悪魔の翼の下におしつけられて居るのだ。されば父上は自分一人だけの糊口の方法もと、遂にこの仕末になったものであらう。予はかく思ふて泣いた。」と書いている。

三月二十日、この年の学年の終りの日で、卒業生の送別会があった。この送別会は、啄木の発

案で、一切を生徒に自治的にやらせた。「この送別会は、一切生徒にやらせたので接待係、余興係、会場係、会計係、何れも皆生徒、矢張生徒から出した二名の委員長の招待状によつて、定刻になるとこの村の紳士貴女十数臨席せられた。生徒などの招待状で紳士を招くといふのは、この村開闢以来の事である。」と日記に書いている。そしてこの送別会が非常に成功で、「喜び極って落涙を催す位であった。」といい、そして「生徒の活動振りの愛らしかったこと！　嗚呼、これも予が過去一ケ年の生活の決して無意味でなかった一つの証拠ではなかろうか。」といっている。

啄木はこの会の模様と、それから学校に関する希望や意見を書いて郡視学に送り、これを置土産のようにして辞表を出した。

彼はそれより少し前に友人への手紙に「小生は意を安んじて筆を取らむがためには、先づ生活を安固にする方法を構ぜざるべからずと感じ申候。代用教員は愉快なれど、八円の月給は小生をして意を安んぜしめず、生活費だけを毎月取る工夫なきやと考え居候。」（明39年8月16日、小笠原謙吉宛）と書いている。彼は「意を安んじて筆をとる」ことのできる生活をえようとして、ついに意を決して北海道にわたるのである。これは明治四十年五月四日である。その日の日記につぎのように書いている。

我が夜の物を質に入れて五金をえつ。懐中九円七十銭なり。家には一厘もなし。これ予と妹

との旅費なり。乏しき旅費なり。米田君より出づべきものを以て、予が立てるあと当分の間老母が命をつながむと決せるなり。あゝ危いかな。

予立たば、母は武道の米田氏方に一室を借りて移るべく、妻子は盛岡に行くべし。父は野辺地にあり、小妹は予と共に北海に入り、小樽の姉が許に身を寄せむとす。

一家離散とはこれなるべし。昔は、これ唯小説のうちにのみあるべき事と思ひしものを…。

午後一時、予は桐下駄の音軽らかに、遂に家を出でつ。あゝ遂に家を出でつ。これ予が正に一ケ年二ケ月の間起臥したる家なり。予遂にこの家を出でつ。下駄の音は軽くとも、予が心また軽かるべきや。或はこれこの美しき故郷と永久の別れにあらじかとの念は、犇々と予が心を捲いて、静けく長閑けき駅の春、日は暖かけれど、予は骨の底いと寒きを覚えたり。

啄木、渋民村大字渋民十三地割二十四番戸(十番戸)に留まること一ケ年二ケ月なりき、と後の史家は書くならむ。(中略)

あゝ、故里許り恋しきはなし。我は妻を思ひつ。老ひたる母を思ひつ。をさなき京子を思ひつ。我が渋民の小さき天地はいと鮮やかに眼にうかびき。さてまた、かの夜半の蛙の歌の繁かりしなつかしき友が室を忍びつ。我はいと悲しかりき。三等船室の棚に、さながら荷物の如く眠れるは午前一時半頃にやありけむ。

「この美しき故郷と永久の別れにあらじか」という啄木の予感は悲しくも適中して、この日渋民の地を去ってから、ついに再びなつかしい故郷渋民に帰ることがなかったのである。

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

×

病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

×

かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

五、北海道の一年間

明治四十（一九〇七）年五月五日午前九時、啄木と妹光子の二人は函館に着いた。光子はすぐ小樽に向い、啄木は函館の友人たちに迎えられてここに足をとどめることになった。函館には啄木の友人がたくさんいた。大島経男（流人）、宮崎大四郎（郁雨）、岩崎正（白鯨）、吉野章三（白村）、並木武雄（翡翠）、松岡政之助（露堂）、沢田信太郎などで、この人々は「苜蓿社」という結社をつくり、「紅苜蓿」という文芸雑誌を出していた。そして啄木から原稿をもらって載せたこともあり、啄木の才能を尊敬していたので、啄木が函館にきたことを大いによろこび、さっそく「紅苜蓿」の主宰者になってもらった。啄木は九月六日の日記に「雑誌紅苜蓿は四十頁の小雑誌なれども、北海道における唯一の真面目なる文芸雑誌なり。嘗て故山にありし時松岡君の手紙を得て、遥かに援助を諾し一二回原稿を送れることありき、今予来って此函館に足を留るや、大島氏の懇請やみ難くして予は遂に其主筆となる。」と記している。

その日の日記にはさらに、「五月十一日より予は沢田君に促がされて商業会議所に入れり、予

は一同僚と共に会議所議員選挙有権者台帳を作る事を分担し、毎日税務署に至りて営業税納入者の調をなせり。」と書いているが、この勤めは間もなくやめ、六月十一日から区立弥生小学校の代用教員になった。月給は十二円で、これで生活の見透しもついたので、七月七日妻のせつ子と京子とを函館に迎え、青柳町十八番地に借家して住むことになった。

函館でようやく新居をかまえることのできた啄木は、宮崎郁雨につぎのような手紙を書いている。「お蔭にて人間の住む家らしくなり候ふ此処、自分の家のやうでもあり、他人の家のやうでもあり、自分が他人の家へ来てゐるのか、他人の家へ自分が来てゐるのか何が何やら今朝もまだ余程感覚が混雑して居り候。ヘラがない、あゝさうだった、といふので今朝は杓子にて飯を盛り候。必要で、足らぬものがまだある様に候。否、数へて見ぬがあるらしく候。兎に角一本立になって懐中の淋しきは心の淋しくなる所以に御座候。申上かね候へど、実は妻も可哀想だし、〇少し当分お貸し下され度奉懇願候。少しにてよろしく御座候。草々。」と。

宮崎郁雨と啄木との交友は、このころから深くなり、啄木生涯の親友として、また物質上の援助者として、金田一京助とともに啄木にとってはなくてはならぬ人となった。

啄木は「紅苜蓿」の編集その他に、例のような熱情をかたむけはじめた。「社の前途について大いに考ふる所あり、口先だけの発展は到底効力なき故、今度愈々積極的方針をとることに致

し、」「九月十五日紙数百頁以上の特別号を出し、爾後引きつづき定価十五銭に値上げの事、十月以後も毎号六十頁以上の事、社友をつのること、九月の大冊発行後四五日にして例の音楽会をひらく事、」「成功したら大いに威張ること、僕にはこれでも仲々元気がある。特別号に原稿集る予算あり、若し集らなかったら僕一人でも百頁二百頁は書く。」「とにかく大いに気を吐かむとするなり。計画だけでも痛快に候はずや。」と宮崎郁雨への手紙に書いている。彼は何か事にあたるときには、いつも全身的な熱情をかたむけ、そしてつねに自分が先頭にたち、遠大な理想と計画をもって、積極的に進もうとするのが啄木の性格であった。古い習慣や、既存の秩序に満足できず、権力に屈せず妥協せず、いつも破壊と革新に心を燃やしていた。因襲になずみ、小成に安んじて、ただことなかれ主義で日を暮すというようなことは、啄木はとうていできないのであった。彼は渋民にいたころ友人に送った手紙のなかに「小生の最大の希望は『空虚なき生活』を送らむ事なり。」といっているし、またずっと後に書いた手紙に「私は小さい時から、革命とか暴動とか反抗とかいふことに一種の憧憬をもってゐた。」と告白しているが、このような彼の性格が、「誇大妄想」だとか「野心家」だとか、また「ホラ吹き」だとかいわれて、周囲の人たちと衝突する原因になり、多くの敵をつくったのであった。このことから、彼は一カ所にながくとどまることができず、生涯貧乏に苦しまねばならなかった。だから彼の性格が彼の生涯を不幸にし

た。しかしこのことが、彼をあくまで前進させ、時代の先駆者として、文学史の上にもかがやかしい足跡をのこしたのである。彼はある文章でいっている。「吾人は記憶す。人間は戦のために生れたるを。戦ふは戦ふために戦ふにあらずして、戦ふべきものあるがために戦ふものなるを。」と。彼の生涯はまさにたたかいの生涯であった。それゆえに彼の生活は「空虚なき生活」、すなわち充実した生活の連続であった。

八月にはいって、母も函館に呼びよせることができた。彼は野辺地まで来ている母を迎えにゆき、ここで久しぶりで家出以来の父にもあうことができたのである。母をつれて函館に戻ると、小樽の姉のところにいた妹の光子も脚気のため函館にきたので、また一家五人いっしょに住むことになったが、「十二円で親子五人は軽業の如く候。」というありさまであった。そこで啄木は函館日々新聞の遊軍記者となり、これで十五円の収入をえることになった。「八月十八日より予は函館日々新聞社の編輯局に入れり。予は直ちに月曜文壇を起し日々歌壇を起せり。編輯局に於ける予の地位は遊軍なりき、汚なき室も初めての経験なれば物珍らしくて面白かりき、第一回の月曜文壇は入社の日編輯したり、予は辻講釈なる題を設けて評論を初めたり」と日記に書いているように、彼はまた異常な熱心さで働きだしたのであったが、不幸にも八月二十五日夜の大火災で弥生小学校も、函館日々新聞社も焼けてしまった。また特別号として編集してあった「紅苜蓿」

の原稿も、函館毎日新聞社にいっていた彼の処女小説「面影」の原稿も焼けてしまった。彼はこの日の日記につぎのように記している。

市中は惨状を極めたり。町々に猶所々火の残れるを見、黄煙全市の天を掩ふて天日を仰ぐ能はず。人の死骸あり、犬の死骸あり、猫の死骸あり、皆黒くして南瓜の焼けたると相伍せり。焼失戸数一万五千に上る。(四十九ケ町の内三十三ケ町、戸数一万二千百九十戸)

狂へる雲、狂へる風、狂へる火、狂へる人、狂へる巡査……狂へる雲の上には、狂へる神が狂へる下界の物音に浮き立ちて狂へる舞踏をやなしにけむ。大火の夜の光景は余りに我が頭に明かにして、予は遂に何の語を以て之を記すべきかを知らず、火は大洪水の如く街々を流れ、火の子は夕立の雨の如く、幾億万の赤き糸を束ねたるが如く降れりき、全市は火なりき、否狂へる一つの物音なりき、高きより之を見たる時、予は手を打ちて快哉を叫べりき、予の見たるは幾万人の家をやく残忍の火にあらずして、悲壮極まる革命の旗を飜へし、長さ一里の火の壁の上より函館を掩へる真黒の手なりき。(中略)

大火は函館にとりて根本的の革命なりき、函館は千百の過去の罪業と共に焼尽して今や新らしき建設を要する新時代となりぬ、予は寧ろこれを以て函館のために祝盃をあげむとす。(中略)

此日札幌より向井君来り、議一決、同人は漸次札幌に移るべく、而して更に同所にありて一

旗を飜さんとす。

この火災で、青柳町の啄木の家は焼けなかったが、さっそく彼をおそったのは生活難であった。彼は友人への手紙に「目下一番困り候は、米屋も焼け炭屋も焼け、通帳ドレモコレモ用をなさず、立秋に入りて既に二旬、懐中秋風にて物価騰貴、スキな煙草もロクにのめぬ一事に候。」と書いている。しかし啄木は毎夜のように「紅苜蓿」の友人たちと集って詩を論じ、恋を語って夜を徹することが多かった。そのころの日記をみると「九月七日、この日の夜、吉野宮崎並木三君と会して徹夜す。三君は歌を作れり。予は横になりて『明らかなる事実』を思ひぬ。」「九月九日、夜、吉野君宅にて宮崎君と三人して大に飲みぬ。飲みて酔ひぬ。酔ひて語りぬ。予は衷心よりこの二友を得たるを皇天に謝す。例の如く神を語り詩を語り恋――わが恋を語れり。」「九月十日、四時頃より快男子大塚信吾君来り、並木君来り、吉野君来り、宮崎君来り、松坂君来り、札幌なる向井君よりハヤクコイといふ電報来れり。予は二三日に愈々札幌に向はむとす。此夜大に飲めり。麦酒十本。酒なるかな、酔ふては世に何の遺憾があらむ。我ら皆大に酔ひて大に語り大に笑ひ、大に歌へり。吉野君の所謂天下太平也。並木君のヴァヰオリンに合せて我らは子供の如く稚き唱歌をうたへり。」などと記している。

函館の青柳町こそかなしけれ

友の恋歌
矢ぐるまの花

×

しらなみの寄せて騒げる
函館の大森浜に
思ひしことども

×

こころざし得ぬ人々の
あつまりて酒のむ場所が
我が家なりしかな

これらの歌は、のちに函館時代を思いだして詠んだものである。
火災後しばらく弥生小学校の焼あと整理や残務に従ったが、札幌の北門新報の校正係に職があるという友人の知らせがあったので、九月十一日弥生小学校に退職願を出し、九月十三日夜、札幌に向って出発した。十二日の日記に、「この函館に来て百二十余日、知る人一人もなかりし我は、新しき友を多く得ぬ。我友は予と殆んど骨肉の如く、又或友は予を恋せんとす。而して今予

はこの記念多き函館の地を去らむとするなり。別離といふ云ひ難き哀感は予が胸の底に泉の如く湧き、今迄さほど心にとめざりし事物俄かに新しき色彩を帯びて予を留めむとす。然れども予は将に去らむとする也。これ自然の力のみ、予は予自身を客観して一種の楽しみを覚ゆ。」と記している。

わがあとを追ひ来て
知れる人もなき
辺土に住みし母と妻かな

と歌った母や妻子は、小樽の姉のところに預けて、彼は単身札幌にきたのであった。そして北門新報の校正係として、月給十五円をもらうことになった。こうしてわずか四カ月しかいなかった函館ではあったが、啄木にとってはかずかずのなつかしい思い出があった。宮崎郁雨はじめ「苜蓿社」同人の、あつい友情も忘れられないものであったが、弥生小学校の同僚であった橘智恵子という美しい女性が、いつまでも啄木の記憶から消えなかった。この人のことをうたった歌が歌集『一握の砂』のなかの「忘れがたき人々」のなかに二十首あまり収録されている。

世の中の明るさのみを吸ふごとき
黒き瞳の

今も目にあり

×

かの時に言ひそびれたる
大切の言葉は今も
胸にのこれど

×

馬鈴薯の花咲く頃と
なれりけり
君もこの花を好きたまふらむ

×

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

×

病むと聞き

凍えしと聞きて
四百里のこなたに我はうつつなかりし

×

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを
あはれと思へ

×

死ぬまでに一度会はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか

これらの歌は『一握の砂』のなかでもすぐれた一連であり、明治時代に数多くある恋愛の歌のなかでもすぐれている。この歌をよむと何よりも清純な啄木の魂にふれる思いがするのである。

北門新報社に入った啄木は、さっそく同紙上に北門歌壇を設け、また随筆「秋風記」を書いた。そのなかに

札幌は寔に美しき北の都なり、初めて見たる我が喜びは何にか譬へむ。アカシヤの並木を騒

がせポプラの葉を裏返して吹く風の冷たさ。札幌は秋風の国なり、木立の市なり。おほらかに静かにして人の香よりは樹の香こそ勝りたれ。大いなる田舎町なり、しめやかなる恋のありさうなる郷なり。詩人の住むべき都会なり。此処に住むべくなりし身の幸を思ひて、予は喜び且つ感謝したり。あはれ万人の命運を司どれる自然の力は、流石に此哀れなる詩人をも捨てざりけらし。

と書いているように、彼は札幌が大いに気にいっていた。「安全に暮すことさへ出来れば五六年は札幌に居たい」と友人への手紙にも書いているほどであったが、しかし彼は札幌で心が少しおちつくと、創作への欲望がはげしく心をうごかすようになった。生活のために、新聞の校正というつまらない仕事に時間をうばわれていることが残念でたまらなかった。彼は九月十九日の日記につぎのように書いている。

朝窓前の蓬生に雨しとしとと降り濺ぎて心うら寂しく堪え難し、小樽なるせつ子及山本の兄京なる与謝野氏、旭川の砲兵聯隊なる宮崎大四郎君へ手紙認めぬ。書して曰く、我が目下の問題は如何にして生活を安固にすべきかなり、又他なし。哀れ漂泊の児、家する知らぬ悲しさは今粋々とこの胸に迫る、と。書し了つて一人身を横たへ、瞑目して思ふ事久し。あゝ我誤てるかな、予が天職は遂に文学なりき。

何をか惑ひ又何をか悩める。喰ふの路さへあらば我に安んじて文芸の事に励むべきのみ。この道を外にして予が生存の意義なし、目的なし、奮励なし。予は過去に於て余りに生活のために心を痛むること繁くして時に此一大天職を忘れたる事なきにあらざりき。誤れるかな、予はただ予の全力を挙げて筆をとるべきのみ。貧しき校正子可なり、米なくして馬鈴薯を喰ふも可なり。予は直ちにこの旨を記して小樽なる妻にかき送りぬ。

啄木のこの反省と告白はまことにいたましい。かつて渋民の代用教員時代にも、「小生は意を安んじて筆を取らむがためには、先づ生活を安固にせざるべからず」と友人に書き送り、そして多分に執着をもった代用教員をやめて北海道にわたったのであったが、一家の生活を背負わねばならぬ啄木にとっては、「余りにも生活のために心を痛むること繁くして」、彼が天職として自覚している文学を、かえりみるいとまがなかったのである。ただ喰うためにだけ働くということは、彼にとっては生存の意義と目的を失うことであった。このような理想と現実との矛盾を体験することによって、彼の思想もしだいに変化してゆくのである。

九月二十一日の日記に「夜小国君来り、向井君の室にて大に論ず。小国の社会主義に関してなり。所謂社会主義は予の常に冷笑する所、然も小国君のいふ所見識あり、雅量あり、或意味に於て賛同し得ざるにあらず、社会主義は要するに低き問題なり、然も必然の要求によって起れるも

のなりとは此の夜の議論の相一致せる所なりき。小国君は我党の士なり、此夜はいとも楽しかりき。」と書いている。

啄木が社会主義について書いているのは、この前年（三十九年）の三月二十日の日記に「この頃東京では、近来結社した社会党員の発起で、電車賃引上反対市民大会が二度開かれた。一千有余の群集が、決議文を朗読してから、市役所に推しかけ、街鉄の本社に石を投じ、昨年九月の騒擾を再現すまじき勢であつた。」云々という文章につづけて、「余は社会主義者となるには、余りに個人の権威を重じて居る。されぱといって、専制的な利己主義者となるためには、余りに同情と涙に富んで居る。所詮余は余一人の特別なる意味に於ける個人主義者である。」と書いているのが最初であろう。その翌年一月十五日の日記には、幼時の友人で、いまは海軍一等兵曹になっている某が啄木を渋民小学校に訪ねてきたとき、日露戦争のことをいろいろ話しあったなかで、「又、海軍部内に社会主義者多しとは事実なりや、との余の問に答へて曰く、然り、甚だ多し、ただ日常しかく考ふる者多きのみならず、坐臥之を口にする者も亦甚だ多し。これ畢竟ずるに、圧制の厳なると、平時昇級の希望少なきとに依る。されぱまた、這般社会主義者にして、一旦得意の境遇に立つに至れば、昨を忘るゝ事恰もよべの夢を忘るゝが如し。あゝ然るかく。これ唯に海軍部内社会主義の現況にあらずして、或は社会主義その者の性質を最も露骨に表白する者に

あらざるか。文明世界は惟然として太平なるべし！」

これらの文章で、当時啄木の社会主義にたいする理解の程度がおよそわかるのである。小国との議論のときも「所謂社会主義は余の常に冷笑する所」であり、「社会主義は要するに低き問題なり」としている。ところがその翌四十一年の一月四日に、小樽で西川光二郎らの社会主義講演会があって、啄木はそれをききにゆき、講演会のあとの茶話会にも出席して、西川と社会主義について話しあっている。そしてその帰り道で友人に「自分は、社会主義は自分の思想の一部分だと話した。」といっている。この日の日記に、彼は社会主義について以前よりもはるかに進んだ理解を示している。すなわち

要するに社会主義は、予の所謂長き解放運動のなかの一齣である。最後の大解放に到達する迄の一つの準備運動である。そして最も眼前の急に迫れる緊急問題である。此運動は、前代の種々な解放運動の後を享けて、労働者乃ち最下級の人民を資本家から解放して、本来の自由を与へむとする運動で、今では其論理上の立脚点は充分に研究され、且つ種々なる迫害あるに不拘、余程深く凡ての人の心に浸み込んで来た。今は社会主義を研究すべき時代は既に過ぎて、其を実現すべき手段方法を研究すべき時代になって居る。尤も此運動は、単に哀れなる労働者を資本家から解放すると云ふでなく、一切の人間を生活の不条理なる苦痛から解放することを

理想とせねばならぬ。今日の会に出た人々の考へが其処まで達して居らぬのを、自分は遺憾に思ふた。

と書いているのである。啄木はこのあとにも、友人と社会主義について話しあったことをたびたび日記に書いているが、とにかく社会主義についての彼の関心はしだいに高まり、その理解もふかまってきている。そしてやがて四十三年の大逆事件に大きな衝撃をうけ、彼の思想の転換が決定的なものとなるのである。

啄木は札幌にも二週間しか足をとどめることができなかった。九月二十七日小樽にいって、山県勇三郎の『小樽日報』創刊の相談をうけ、三面記者として入社することになった。札幌の北門新報から小樽日報にうつったのは、「住心地よき札幌に別れ候ふは、小生に於て決して楽しき事に無之候ひき。然し十五円の校正子より二十円の記者の方が、貧乏に捲み果てたる小生には好もしかりしに候。且つ小樽には家内共も居ることとなり」というわけであった。それともう一つの理由は、「又、予想外に気の合ひたる野口雨情君も共にといふ訳故」でもあり、また一つは「此度の社が創業時代——万事自由にして然も無限の活動を予期しうべき時代たる事に候。」という点がむしろ啄木の心を動かした第一の理由であったかも知れない。

十月二日、小樽市花園町十四番地の西沢というせんべい屋の二階二室を借り、ここでまた母と

妻子との生活を営むことができるようになった。そして創刊早々の小樽日報で、十分手腕を振うことができるという希望をもって、入社すると間もなく、野口雨情とともに主筆の岩泉江東排斥の運動をはじめ、その他社内の大改革を断行しようと計画した。彼は日記に「予等は早晩彼を追ひて以て社内を共和政治の下に置かむ」と書いているし、また野口雨情を「時代が生める危険の児なれども其趣味を同じうし社会に反逆するが故にまた我党の士なり」と書いている。ここでもまた彼のもちまえの謀叛気が頭をもちあげたのであったが、その陰謀がもれて雨情はついに社を去った。「あとは小生唯一人にて奮闘又奮闘、十一月末までに最初八人なりし記者中主筆以下六人迄遂に断頭台にのせ、新人物を入れ候ひしが、寝食を忘れて毎日十五時間位も社のために働き候事、日報社最初の三面主任が功労亦多大なるものと申すべきか」と金田一京助への手紙に書いている。しかしこのような後の気負ったやり方が社内の混乱をまねき、事務長との喧嘩になり、ついに彼は退社せざるをえなくなった。こうして大きな野心やら抱負やらをもって入った小樽日報社も、彼のあまりに急激な革新的方針のために、けっきょく八十日あまりでまた失職することになった。それは四十年もおしつまった十二月二十日のことであった。十二月三十日の日記に

日報社は未だ予にこの月の給料を支払はざりき。この日終日待てども来らず、夜自ら社を訪へり。俸給日割二十日分十六円六十銭、慰労金十円、内前借金十六円を引いて剰すところ僅か

に十円六十銭。帰途ハガキ百十枚を買ひ煙草を買ふ。巻煙草は今日より二銭宛高くなれり。刻みも亦値上げとなれり。懐中剩す所僅かに八円余、噫これだけで年を越せといふのかと云ひて予は哄笑せり。老母の顔見るに忍びず。云々

と書いている。彼はまた「小樽のかたみ」という文章に序して書いている。「予の日報社編輯局にある、前後僅かに八十日、其日夕筆にしたる所、所謂尋常三面記事に過ぎず、然も其為に殆んど自己みずからの時間を有する能はず、一冊の書を読まず、一通の書信をも静かに書く能はざりしと雖も、追想一番し来れば這間に得たる所実に多きに驚かずんばあらず、予は此活知識が他日必ず予を益する事あるべきを思へり。」と。

渋民村の代用教員をふりだしに、函館、札幌、小樽と、職をもとめて転々しながら、苦しい実生活上の経験をつんだ。ことに新聞記者という職業から、彼は政治、経済、社会の実際問題について多く学ぶことができた。「予は此活知識が他日必ず予を益する事あるべきを思へり。」といっている通り、彼の社会政治上の実際の知識が、やがてするどい現実批判に目をむけさせ、ついに社会主義者にまで発展させたのである。しかし彼の社会、政治への関心は、決して新聞記者になってからのことではなく、それ以前の日記や書簡のなかでしばしば社会、政治の問題に触れて書いている。たとえば三十九年三月五日の日記にも、鉄道国有問題、戦時税継続案などの問題に

ついて論じ、そして「利に傾く多数の党人を籠蓋して、前内閣と同じ狂暴を逞しうして居る。」と時の西園寺内閣を批判し、さらに国際問題などにも言及している。当時はまだ代用教員になる前の無収入の時代でありながら、この日の日記によると、東京の読売と毎日と万朝報と、地方新聞の岩手日報と、四つの新聞を購読しているのであって、彼がいかに知識をひろく求め、政治、社会の問題にも興味と関心とをもっていたかが想像できる。

それはともかくとして、「予が天職は遂に文学なりき」という自覚と抱負をもちながら、その文学に専心することができず、ただ一家の生活のために函館から札幌へ、札幌から小樽へと職を追って歩き、そして小樽では「殆んど自己みづからの時間を有する能はず」というほど働きながら、ここでもまた職を失ったのである。しかし彼の才能を惜んだ小樽日報の白石社長が、やはり自分の経営する釧路新聞へ啄木の入社をすすめたのである。啄木も社長の恩義を感じ、ついに「さいはて」の釧路にゆく決心をした。明治四十一（一九〇八）年、啄木二十三歳の一月十九日の朝、白石社長と同道して釧路にむかって出発した。

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

×

敵として憎みし友と
やや長く手をば握りき
わかれといふに

×

ゆるぎ出づる汽車の窓より
人先に顔を引きしも
負けざらむため

×

わかれ来てふと瞬けば
ゆくりなく
つめたきものの頬をつたへり

×

いたく汽車に疲れて猶も
きれぎれに思ふは

われのいとしさなりき

小樽ではようやくたのしい一家の暮しができると思ったのもつかの間で、またもや妻子とわかれて、あわただしい旅にでることになった啄木は、どんなにやるせない思いであったことか。途中岩見沢と旭川で一泊し、「名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の、宿屋安けし、我が家のごと」「今夜こそ思ふ存分泣いてみむと、泊りし宿屋の、茶のぬるさかな」というようなさびしい旅をつづけ、そして一月二十一日夜釧路に着いた。

さいはての駅に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき

釧路について間もなくの一月三十日、金田一京助に宛た手紙に、「零度以下の寒さの国に居て東京の事を思ふは、失意の児が好運の人を思ふと相似たるべきか」といい、そして「北へ北へと参り候ふ小生は、取も直さず生活の敗将、否、敗兵にて、青雲の上に居る人の露だに知らぬ夢を夜毎に見る事に御座候。」とかなしい心を訴えている。

釧路新聞では、第一に白石社長と気があった。白石という人は、啄木の言葉によると「度量海の如き篤実の老紳士に候が、嘗て国事犯を犯して河野広中氏らと共に獄につながれたる事もあり

また『真理実行論』といふ急激なる自由主義の世界統一論を著したる事などもあり候ふ人なれば胸の奥にはまだ若々しい革命思想を抱き居り、小生とは所謂支那人の『肝胆相照す』底の点ありて、」というわけで、啄木とは大いに意気投合した。社長も啄木を愛し、さっそく彼を編集長格にあつかい、新聞拡張のために彼を重く用いた。「小生着任と共にまず編輯長といった様な役にて、早速編輯の体裁を全部改め、毎日自分で一頁以上書くといふ奮発をやり居り候所、読者より続々感謝の手紙まゐり」というようなことで、彼はまたこの新聞に全情熱をかたむけて努力した。

彼は毎日の新聞に政治、経済、外交のことまで書き、また愛国婦人会支部の会合で「新時代の婦人」という講演をやり、さらにある会の余興に、釧路、北東両新聞記者合同で「無冠の帝王」という芝居をやり、彼は劇中の新聞記者をやって好評を博するなど、なかなか得意であった。そのうえ社長も彼に目をかけ、時計を買ってくれたり、やがて彼のために社で家を借りてやろうという話もでた。それで「釧路は案外気持よく候。都合によったら三月小樽に帰らずに、二三年当地に居ることにし、家族も三月頃呼寄せんかとも考え候。これは社の要求に候が、七分通りは小生の同意なり。」「二三年居れば、きっと今迄の借金をすまし、且つ自費出版やる位の金はたまるべしと存候。呵々」と友人への手紙にも書いているように、彼は釧路がだんだん気にいるように

なった。

こうして啄木は、釧路にしばらくとどまる決心をし、やがて家族をも呼びよせる考えで、新聞拡張のために熱心に働いた。そしてその成績は着々としてあがった。そのあいだに彼は、職業上のつきあいから、料理屋などにも出入りし、なじみの芸者なども何人かできた。そのなかでも小奴という芸者が気にいり、「おれの妹になれ」「なります」というようなことで、よくいっしょに遊んだ。歌集『一握の砂』のなかに、この小奴のことを詠んだ歌が何首かある。啄木は、一つには流浪の身のさびしさ、失意のかなしさを忘れるために、いつかおぼえた酒だった。しかし「その膝に枕しつつも、我がこころ思ひしはみな我のことなり」で、酔うて正体なく小奴の膝を枕にしても、心のすみには自愛の念を消すことができなかった。自分を忘れて陶酔することはできなかった。それは「あはれかの国のはてにて酒のみき、かなしみの滓を啜るごとくに」であった。彼の自尊心と、また彼の文学にたいするたちがたい熱望とは、いつまでも田舎新聞記者として酒色に耽溺せしめてはおかなかった。彼は二月二十九日の日記につぎのように書いている。

釧路へ来て玆に四十日、新聞の為には随分尽して居るものの、本を手にしたことは一度もない。この月の雑誌など、来た儘でまだ手も触れぬ。生れて初めて、酒に親むことだけは覚えた。盃二つで赤くなった自分が、僅か四十日の間に一人前飲める程になった。芸者という者に

近づて見たのも生れて以来釧路が初めてだ。之を思うと、何といふ事なく心に淋しい影がさす。

彼のこの淋しい心の影が、けっきょく啄木をながく釧路にとどまらせなかった。彼は釧路に来る少しまえの日記に、「正宗白鳥君の短篇小説集『紅塵』を読み深更にいたる。感慨深し、我が心泣かむとす。予は何の日に到らば心静かに筆を執るを得む。天抑々予を殺さむとするか。然らば何故に予に筆を与へたる乎。」と書いている。この彼に「本を手にしたことは一度もない。この月の雑誌など、来た儘で手も触れぬ。」という新聞記者生活は堪えがたいものであったのである。かくて啄木は三月末にはもう釧路を去る決心をしている。

啄木が釧路にきて注目すべき論文を書いている。それは四十一年二月釧路新聞に掲載した「卓上一枝」である。この文章で啄木は、当時勃興していた自然主義文学についての正しい理解と、そして同時にその弱点をもするどく批判しているのである。

自然主義の発達は、青春の人に歓ばれ、中年以上の人に嫌はる。此現象を見て直ちに自然主義が若き情慾の赤裸々なる描写を敢てするに帰するは非なり。人は生れて真なり。漸く老いて漸く虚偽を知る。既に其心的活動の静止するに至って、兹に社会的経験によって得たる生活概念を固定し、此概念より組織せる虚偽の法則を作って人生自然の真を掩ふ。技巧過重の文芸を

革めんとして生れたる自然主義が、若き人に歓ばれて老いたる人に嫌はるゝ、蓋し故あるなり。

個性の独創力は吾人も亦之を是認す。然も之を渾然たる大自然の創造に比較し来れば、広狭自らにして明らかなり。殊に況んや作家が技巧を過重して彫琢之事とするに至っては、浅小なる自家概念に束縛せらるゝ事益々甚だしくして、人生自然の真と相去る事遂に千里万里の遠きに到る。玆に於てか自然主義あり、一切の法則と虚偽と誤れる概念とを破壊して、在るが儘なる自然の真を提げ来る。

以上の文章で、技巧偏重の浪漫主義にかわって登場してきた自然主義の意義とその必然性を正しくとらえている。啄木はすでにその年一月三日の日記に「自然派と云はるゝ傾向は決して徒爾に生れ来たものでないのだ。新詩社には、恐らく自然派の意味の解った人は一人も居るまいと自分は信ずる。」と書いているし、また一月三十日に金田一京助に宛た手紙のなかに「今日以後の日本は、明星がモハヤ時勢に先んずる事ができなくなったと思ふが如何、自然主義反対なんか駄目々々」と書いていることからも、啄木はすでに浪漫主義の時代が去ったことをはっきり見抜いているのである。（明治三十四年四月創刊して、はなやかな存在であった雑誌『明星』は四十一年十一月ついに廃刊になっている。）

上記「卓上一枝」の文章で、啄木は自然主義文学の意義を正しくみとめているが、しかし同時

に彼は「吾人は自然派の小説を読む毎に一種の不安を禁ずる能はず、此不安は乃ち現実曝露の悲哀なり。自然主義は自意識の発達せる結果として生れたり。而して其吾人に教訓する所は唯一つあるのみ。曰く、『どうにか成る。成る様に成る。』」といって日本の自然主義文学の底の浅さを指摘し、そしてつぎのようにいっている。

目を上げて社会を見るの時、我目殆んど眦裂けんとす。目を落して静かに社会を思ふの時、我が心忸怩として黯然たり。不知、此社会を奈何。一念茲に到る毎に、我が耳革命の声を聞き我が目革命の血を見る。人は自然に叛逆す。我等は人に叛逆を企つべきのみ。自然に背く者は真と美に背く者なり。見よ、一羽の鳥だに天空を翔るの翼あるに非ずや。

啄木のこの思想は後の「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」や「時代閉塞の現状」において、さらに具体的に発展している。窪川鶴次郎はその「詩人啄木の文学的形成」という文章のなかで「この釧路での生活こそ啄木の文学的分水嶺をなすものであった。」といっていることは首肯できることである。それは啄木が浪漫主義者から現実主義者へ転換してゆく岐路にたっていたといえるのであろう。

しかし啄木は当時まだ必ずしも統一した思想に到達していたわけではない。たとえば「卓上一枝」を書いたあと、すでに釧路を去ってからの四月二十二日に大島経男に宛た手紙のなかに「一

切を無意義なりとする怖るべき思想、時として電光の如く私の心を過ぎる事あり。疲れ果てたる心は、かくて一瞬時の安逸を貪らむとす。此境には、責任もあることなし、義務もあることなし又向上もなく、努力もなし、既にして絶対の『孤独』とふ云ふべからざる苦痛面相接して到る。」とか、また「一切の理想といひ希望といふもの、畢竟不確実極まるイリュージョン――換言すれば人生の虚偽に過ぎざらむとするを覚悟いたし居候ふては、」とか、「自暴自棄に疲れたる心は、やがて又『一切虚無』の怖ろしき思想に一瞬安逸を貪らんとし、やがて又、再び孤独の寂莫に涙もなく泣かむとするにて候。」ともいっている。

このように混沌とした心で啄木は、四月二日、酒田川丸で釧路を出発し、小樽に立寄って家族をまとめて函館にゆき、宮崎郁雨に家族を預け、二十四日夜九時、ただ一人三河丸という汽船に乗って上京の途についたのである。

六、最後の上京と思想の転換

いまみた大島経男宛の四月二十二日の手紙に、啄木はさらにつぎのように書いている。

釧路に於ける七十日間の生活は、殆んど生死の大権を提げて私の心に威迫を試み候。大兄より私釧路に入りて、生れて初めて酒といふものを飲み習ひ候ひぬ。時として日夜旗亭に沈酔して、また天日の明きを見ず。酔うて帰りて寝ね、覚めて社に行き、黙々筆を走らして編輯を締切れば、足また旗亭に向ふ。吉井君の所謂「おけおけと頭を乱すもろもろのみだらの曲をおもしろと聞く」てふ悲しき事もまた私の自ら経験したる所、時としては、酔快く発して、白眼世を視、豪語四囲を空しうし、盃を啣んで快を呼び、絃歌を聞いて天上の楽としたる事なきに非ず。然し乍ら、噫然し乍ら、いかに酔ひ候ふとも、我を忘るゝ事なきこそ痛ましくは候ひけれ。時としては、飲めども〱酔はざる事あり、眼華を盃底に落して、腕を拱き、悚惕として独り心臓の鼓舞を聞く。云ふべからざる孤独の感、酒と共に苦く候ひき。

銚子を控へて我をして乱酔するを許さざりし一妓の情に、辛くも慰められたる事あり。又夢なき眠りを唯一の望みとしたる夜あり。然して遂に、「感情の満足なき生活」には到底堪へ得べからざる事を、極度まで経験いたし候ひぬ。(中略)

人は感情の満足を、若き女に求め、家庭に求め、趣味に求めむとす。然れども小生は遂に天が下の浮浪漢なり。之を若き女に求めむには我心老いたり。之を家庭に求めむには我が性あまりに我儘に過ぐ。而して之を趣味に求めむには、我が趣味あまりに自発的なり。所詮は之を自

己自らに求むる外に途なきを悟り候ひぬ。「創作的生活」（専念創作）に従ふ生活はかくて現在の私の最大なる希望、唯一つの希望に候ひき。

この手紙の一節は、釧路における生活をかえりみての悲痛な告白である。かくして啄木は「創作的生活」に専念するために、最後の上京を決意したのである。

明治四十一（一九〇八）年四月二十八日東京に着いた啄木は、翌日本郷菊坂町の赤心館という下宿に金田一京助をたずね、この下宿の一室におちつくことになった。そして五月に入ると「泣くよりも」と題した八篇の詩を書き、それから小説を書きはじめた。まず「菊池君」というのを起稿したが、六七十枚書いて、あまり長くなりそうなのでやめ、つぎに「病院の窓」九十一枚を書きそれから「母」「天鵞絨」「二筋の血」と、やつぎばやに数篇の小説を書き、これを『中央公論』『新小説』『太陽』などの諸雑誌に先輩の紹介で送った。「生田（長江）君に頼んでおいた『母』まだ便りなし。森（鴎外）先生より先刻手紙まゐりあの原稿二つ（「天鵞絨」と「病院の窓」）とも春陽堂へやったが、後藤宙外の出京次第何とかきまるべく、何れ後便にと云ってまゐり候。十五日までに決ってくれゝば可いと存居候。そしたら先月分の下宿料も払へるし、少しは余計に原稿用紙も買へる事と存じ候。うまい物も少し食ってみたく相成候。」と六月八日、宮崎郁雨へ手紙をかいている。しかしこの希望はことごとくはずれ、金になるものは一つもなかった。彼はそのころ

不眠症にかかり、あけがた、人が起きるころになってやっと眠りについた。それで二食主義を実行し、夜はランプの石油がつきるまで原稿を書きつづけた。そして一カ月ほどの間に三百枚位も書いたのである。

書いた小説が金にならず、そのために下宿料も払えず、函館にいる母や妻子のこと、また友人への不義理を考えると、彼はいらだたしさを感じるばかりであった。そして悶々の日を送っているうちに、ある夜にわかに感興がわいて、一気に百首あまりの短歌をつくった。彼にとっては久しぶりのことであった。六月二十四日の日記に、「昨夜枕についてから歌を作り初めたが、興が刻一刻に熾んになって来て、遂に徹夜、夜があけて、本妙寺の墓地を散歩してきた。たとへるもののなく心地すがすがしい。興はまだつづいて、午前十一時頃までに作ったもの、昨夜百二十首の余、」とあり、また翌二十五日の日記にも「頭がすっかり歌になっている。何を見ても何を聞いても皆歌だ。この日夜の二時までに百四十一首作った。父母のことを歌ふの歌約四十首、泣きながら」と書いている。

燈影なき室に我あり
父と母
壁のなかより杖つきて出づ

×

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず

×

己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへる術なし

歌集『一握の砂』にあるこれらの歌は、そのときに作られたものである。そして『一握の砂』はこのときの作以後のものを集めたもので、それ以前のものは全部オミットされているのである。(『一握の砂』については節を改めて述べる。)

啄木は四十一年六月から、また短歌をつくりはじめ、『明星』の会合や、森鷗外の観潮楼歌会などにも出席して、歌人としてもみとめられるようになったが、一方ではいくつもの小説や戯曲の構想をたて、散文詩なども書いている。小説「札幌」「刑余の叔父」などもそのころ書いている。しかし収入は全くなく、生活の苦しさはますます加わるばかりであった。家族を呼びよせる

どころか、自分一人の生きることさえおびやかされる実状であった。かくて彼は人生に絶望し、しばしば自殺さえ考えたのである。彼はその苦しさを、しばしば友人への手紙に書いている。

時として死ぬることを考へる。平気で、何の恐怖もなく考へる。日記にも書いてあるよ。一週間前に、丁度一週間前に、僕は辞世の歌、自殺の方法まで考へた。然し矢張り死ねなかった。あんな時、誰か一緒に死なうといふ見知らぬ人——たとへば筑紫の芳子の様な——が来たら、屹度死んだに違ひない。親！　子！　あゝ、俺一人なら死ぬ筈はないかと考へる。然し、実際は俺一人でならこそ死にたくもなるのかも知れぬ。痛ましい訳だ、かなしい訳だ。

兎に角人生は苦痛だ。神など無論ない。霊魂もない。あるのは永劫不変の性格のみだ。それが何よりの苦しみだ。そして君、人間も遂に動物だ。上等下等の階級はあるが、矢張動物だよ。無いと信ずる「神」といふものに、祈って見たい様な心地さへする。泣かず笑はざる「真面目」の苦痛！（7月7日岩崎正宛）

死にたいと思ふ考が執念く起る。然し死ぬ方法に着手しようともせぬ。自分でそれを怪しんでいる。

母の顔が目に浮ぶと、ただもう涙が流れる。実際流れるよ。昨夜は妻が恋しくて恋しくてた

まらなかった。（7月18日、吉野白村宛）

とにかく僕は遂に死にかねた。猛烈に戦って遂に生存慾に敗けた。僕をこの怖ろしき思想から脱せしめむと全力を尽してくれた金田一君に感謝する。一昨日下宿屋から追放令が下って、僕は半日九十三度の炎天の下、知らぬ町をさまよったりしたが、それも金田一君が中に立ってともかく追放令だけは解除さした。蒼茫たる宇宙の間に僅かの時間を与へられて生きてゐるのが人間だ。価値もなにもあったものでない。人生に定義がないから、真とは何ぞ、美とは何ぞ皆不可解だ。芸術にも定義なく、従って価値なく、自己にも定義なく、価値がない。考へると死ぬ外はない。虚無だ。

盲動あるのみ。これが僕の得た目下の結論だ。君、遂に盲動あるのみだ。真面目に考へると死ぬ外ない。遂に遂に盲動あるのみだ！（7月28日、宮崎郁雨宛）

これらの手紙によって、当時の啄木の悲痛な心持を知ることができる。もはや人生に希望をもち得ない虚無と絶望、死ぬよりほかに救いのないような暗澹たる気持であった。

森の奥より銃声きこゆ
あはれあはれ

自ら死ぬる音のよろしさ

×

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

×

高きより飛びおりるごとき心もて
この一生を
終るすべなきか

×

死ぬことを
持薬をのむがごとくにも我はおもへり
心いためば

×

尋常のおどけならむや

ナイフ持ち死ぬまねをする
その顔その顔

このような生活との悪戦苦闘のあいだにも、ツルゲーネフやゴーリキーの小説をよんで感動し蕪村句集をよみ、杜甫や陶淵明や白楽天の詩をよみ、さらに万葉集や古今集をよみ、源氏物語をよんでいる。そのころの日記にツルゲーネフの小説をよんで「予は巻を擲って頭をかきむしった。」と書き、また「万葉集を読む。あるかなきかの才を弄ばむとする自分の歌がかなしくなった。」と書き、「古今集を読み了へた。悪技巧に囚へられた歌が多くて、呀と思ふ様なのが少ない。よいと思ふのは、大てい万葉古今の過渡時代の作だ。」といい、「杜甫を少し読む。字々皆躍ってる様で言々皆深味がある。無論楽天など同日に論ずべきものではない。これに比べると、白は第三流だ。」などと、すぐれた見識を示している。

九月になって啄木は金田一とともに本郷森川町の高台の、蓋平館という下宿の別荘（昭和二十九年十二月十四日火災で焼失した。）にうつった。そして彼は三階の三畳半という部屋におさまり、その眺望のいいのに喜んだ。街の屋根々々をこえて、富士山のうつくしい姿もながめられた。夜になると、しばらく忘れていた虫の音が、下から湧くようにきこえてきた。啄木は何かしら新しい希望が胸にみちてくるのを覚えた。そして同郷の金田一と、涙をながしながら故郷の思い出を語り、望郷の歌を

たくさん作った。

ふるさとの空遠みかも
高き屋にひとりのぼりて
愁ひて下る

×

秋立つは水にかも似る
洗はれて
思ひことごと新しくなる

×

秋の空廓寥（かくれう）として影もなし
あまりにさびし
烏など飛べ

×

あめつちに
わが悲しみと月光と

あまねき秋の夜となれりけり

これらの歌は歌集『一握の砂』のなかの「秋風のこころよさに」の一連のなかのものである。しかし生活の苦しさは少しも変らなかった。函館の家族への送金はもとより、もはやインキや原稿用紙も買えないありさまであった。十月一日の日記に「いざ書かうと思ふと、ペンがダメになってゐる。原稿紙も少ない。これで折角の思立も、心が索然となって水の泡。財布には五厘銅貨二枚と電車の切符が一枚。」と書いてある。そしてつぎの日の十月二日の日記には、

目をさますと節子と妹からの手紙、老いたる母上は二十九日の晩に函館を去って、一人、岩見沢の姉が許へ行ったといふ。それを見送って帰ったのは夜の一時であったさうな。残ったのは妻に妹に京子。あゝその夜の二人の心！　そして又北海道の秋の夜汽車の老いたる母が心！

妻は是非東京で奮闘してくれと云って、人数も少なくなったことなれば、アト一月や二月、郁雨君の厄介になることも少し心の荷が軽くなったと云ってきた。予は泣きたかった。然し涙が出なかった！

起きたがペンがない。平野を訪ねたが留守。一枚あった電車切符を利用して早稲田に藤篠君を訪ね、歓待された。「血笑記」と一円借りて二時過ぎに帰った。原稿紙とインキとペンを買つてきた。

と記している。さらに十月二十四日の日記には、「此朝せつ子から葉書、宝小学校の方十六日付で辞令が下って、十九日から出勤してゐると。三給上俸といふと、予が弥生にゐた時と同じ十二円だ。せつ子にこんなことをさせる！　それはそれとして、予はホッと一息ついた。家族は先づ以て来春まではあまり郁雨君の補助も仰がずに喰ってゆける。そして光子も来月から何とかいふ外国人の家庭教師になることに話がきまったので、京子を守するために、月末までに岩見沢へ行ってゐる母を呼ぶ。」と書いてある。

十月の末ころ、栗原古城の世話で、東京毎日新聞に連載小説を書くことになった。これは「鳥影」という小説で、啄木にとっては唯一の長篇である。これが十一月一日から新聞に掲載されはじめて、十一月三十日、一カ月分の稿料三十円を手にすることができた。この日の日記に「スラスラと鳥影（七）の二をかき、それをもって俥で午後三時毎日社へ行った。そして三十円――最初の原稿料、上京以来初めての収入――を受取り、編輯長に逢ひ、また牛込の北原君をとひ、かりた三円五十銭のうち一円五十銭払ひ、快談して帰った。宿へ二十円、女中共へ二円。」と書いている。

「鳥影」はやはり渋民村が舞台で、この地方の地主小川家の長男である大学生の信吾と、それをめぐる何人かの女性、信吾の妹静子、弟の志郎、この兄弟の若い叔父昌作、また小川家当主の

信之、その妻の芸者上りのお柳、昌作の友人の洋画家吉野（これに作者啄木らしい投影がある。）、その恋人の小学校教員日向智恵子（橘智恵子を思わせる。）など、その他登場人物が多数あって、それらの人物が、複雑な関係のなかで、それぞれ巧みに描かれていて、作家啄木の手腕をみせている小説である。

窪川鶴次郎はこの小説について、「作者が人生に対してきわめて積極的であること、作品の世界が社会的に広く開かれた視野に立ち、卑近な日常生活や些末性が少しもないこと、テーマが力強く明瞭であること、作中人物の性格が人間関係に対する作者の尽きぬ関心と相俟つてタイプとしてあざやかにとらえられていること、これらの点において啄木の特色をもつとも成功的に鋭く発揮した代表作である。」と高く評価している。

啄木は毎日「鳥影」の執筆をつづけながら、一方でさかんに小説をよんでいる。十一月三日に藤村の「春」をよんで「小説の上の一切の旧き技巧を捨てて、新意ある描写に努力した作者の熱心は、予を驚かしめた。」と書き、五日には秋声の「多数者」、虚子の「鶏頭」をよんでいる。こうして自然主義の作品に親しみながら、十三日の日記で「何の事はなく、予は近頃吉井（勇―渡辺註）が憐れでならぬ。それは吉井現在の欠点――何の思想も確信もなく、漫然たる自惚と空想とだけあって、そして時々現実暴露の痛手が疼く――それを自分自身に偽らうとして、所謂口先の思想を出鱈目に言って快をとる――それが嘗て自分にもあったからでもあるかも知れぬ。」と書

いていることは、（これより少し前に北原白秋について「北原君などは、朝から晩まで詩に耽っている人だ。故郷から来る金で、家を借りて婆やを雇って、勝手気まゝに専心詩に耽ってゐる男だ。詩以外の何事をも、見も聞きもしない人だ。乃ち詩が彼の生活だ。」と書いている。）彼の思想、文学観が、着実に変化しつつあることを示している。すなわちロマンチストからリアリストへの脱皮である。

この月二十二日から小説「赤痢」を書きはじめ、これが翌年一月の「昴（スバル）」創刊号にのった。この小説は「病院の窓」「天鵞絨」などと共に彼の代表的な小説の一つである。「赤痢」も渋民らしい東北農村の貧しく暗い一断面を印象的に描いたもので、天理教布教師をめぐる、無智で迷信深い農民の男女が生々とリアルに描かれている。

明治四十二（一九〇九）年、啄木二十四歳の春を迎えた。この前年の十一月に雑誌『明星』が廃刊になり、その後継誌としての『スバル』が一月創刊された。吉井勇、平野万里、木下杢太郎（太田正雄）、平出修などが中心で、啄木も編集メンバーの一人に加わった。この第二号を啄木が編集し、そして短歌を全部六号活字で組んだ。「歌を六号にしたのは、単に枚数の如何に不拘あゝやる積りだった。上田敏さんと太田君、平出君がこれを賛成した。（外の人にはだまっておった）、これは僕の文芸上の主張が、歌の様な遊戯分子の多いものを排撃する結果だ。」と宮崎郁雨への

手紙に書いている通り、彼は短歌を文学としてあまり重くみていなかったことを示している。この気持はずっとあとまでつづいていて、「歌は悲しい玩具である」という言葉にもつながっているのである。

『スバル』第二号に啄木は小説「足跡」を発表した。これは自伝的な小説で、渋民の代用教員から書き起し、かなりの長篇になる予定で筆をすすめ、その第一回を発表したものであった。ところがその翌月の雑誌『早稲田文学』で、「誇大妄想狂式の主人公を書くのは好い、作者まで一緒になってはたまらない。」という批評が出たので、出鼻をくじかれた啄木は、あとをつづける勇気をうしなってしまった。こうして小説では到底食えないと悟った啄木は、いろいろ考えなやんだあげく、東京朝日新聞の編集長をしていた同郷の佐藤真一(北江)という人に、「生活のために月三十円必要なのだが、それで使っていただけませんか」という手紙に履歴書を添えて送った。そしたら「とにかく会ってみよう」という返事があったので、二月七日の午後出かけていった。その日の日記に「約の如く朝日新聞社に佐藤氏をとひ、初対面、中背の、色の白い、肥ったビール色の髯をはやした武骨な人だった。三分許りで、三十円で使ってもらう約束、そのつもりで一つ運動してみるといふ確言をえて夕方ニコニコし乍らかへる。此方さへきまれば生活の心配は大分なくなるのだ。」と書いている。

この朝日新聞社の就職がきまって、三月一日から出勤することになった。仕事は校正係で、夜勤料を入れて三十円ほどになるのであった。これでどうやら生活の安定がえられそうになったので、啄木はまた元気をとりもどした。三月三日、宮崎郁雨への手紙に「八ケ月かゝってオクレを取返した僕は、この二ケ月の間、思想的に武装して過した。そして今こそ一個人としても、作家としても立派な自信を得た。君、これからだ。これからこそ始めて僕はすべてと戦ふ勇気と自信がある。かうなったのも君のおかげだ。多謝する。僕は今始めて僕の思想を統一し、アラユル物に対して直視することが出来る様になった。」と書いている。また同六日、森鷗外に宛てつぎのような手紙を送っている。

此度「東京朝日」に長く編輯長を勤め居候同県出の佐藤と申す人の世話にて去る一日より月給二十五円、夜勤手当一夜一円との事にて同社にて使って貰ふ事と相成、当分校正の役をふりあてられ異様なる新しき気持を持て毎日出勤罷在候。これにてまづく最低程度の生活の基礎出来候訳なれば旅費その他の苦面のつき次第函館なる家族を呼び寄せ東京に永住の方針をとりたくと存じ目下は愈々その事にのみ焦慮仕居候。社より解雇さるる時ありとすれば、別問題に候へども、出来ることならば小生は一生朝日社に奉公しても宜敷と、否、致度と存居候。(中略)かくて、現在に於て、小生は何かしらうちに頼むところ出来候様にて、前申上候生活の決心の

みならず、私交上のこと、創作上のこと、男女の問題のこと……すべてに或る決心が出来た様な気がいたし候。長く失ひ居候ひし自信が、その一部分か、或は幻影の如きものかも知れず候へども、再び小生に帰り来り候様にて、うれしく存居候。

このように、啄木が朝日新聞社に勤めることになって、生活の基礎もどうやらできたということをきいて、函館にいる母や妻から、早く東京に出たいといってくるし、郁雨からも手紙がきた。それにたいして啄木は、つぎのような苦しい言いわけの手紙を書いている。

何といってよいか解らぬ。皆が死んでくれるか、僕が死ぬか、二つに一つの様な気がする。母のいふ事、妻のいふ事、君のいってくれる事、皆無理は少しもないと知っているので苦しい。悲しい。ヒョットすると、(例へば母でも突然やってくれば)僕が短気を起してどんな事をするか知れぬ様に君も妻も思ってくれるが、僕は悲しい。今迄も僕はよくそんな事を云ったり、したりして家族をおどした。おどしたのだ。母などのいふ事に少しも無理はないと思ふけれど、三畳半にゐる所へ来られたりしてはどうすることも出来ないから、さうしておどしておくより外はないのだ。僕だって何んでそんな事したいものか。

先月末に呼ぶ様に云ってやったのもウソでないのだ。ところが「鳥影」は大学館にも遂に売れなかった。察してくれ。それから家を持つだけの金を貸してくれる筈だった北原は、「邪宗

門」の方が意外に金がかゝったので、矢張駄目だつた。

今迄の滞りで下宿屋がイヂメル。先月は入社早々前借して入れた。今月もあまりイヂメられるので、モウ十五円だけ前借して入れた。そして僕は毎日の電車賃を工夫して社に通っているといふ有様だ。が、二十五円といふ基本さへあれば、家族が来てもどうにか暮せる。ただ、家を持つ金、旅費、それから下宿屋に納得させる金、それだけが問題だ。それさえあれば僕はこんな――実情はこの通り、何の秘密もない。ただ苦しい。花は咲いたが、僕にはなんのことわりなしに散ってしまった。

とにかく基本だけはできたのだから、モ少し待つ様に母に云ってくれ玉へ、頼む。何とかいたら可いか解らぬので手紙もやらずにゐた。何日の間、やらうくと思ひつつ、手紙をかくのがおそろしさに、そのままにして置いた。一円ある。別封、どうか母へやってくれ玉へ。

(4月16日、宮崎郁雨宛書簡)

この手紙以来、彼の書簡集には誰への手紙もなく、六月二日になって、橘智恵子へハガキ(しかも四月七日に来た退院の返事)を出しているだけである。彼のように、精力的にたくさん手紙を書いたものが、一カ月半ほどの間、手紙を書いていない。そして彼の日記は、四月に入ってからローマ字になっている。そして四月七日の日記に「『春が来た。四月になった。春! 春!

花も咲く！　東京へ来てもう一年だ！……が予は予のまだ家族を呼びよせて養う準備が出来ぬ！』近頃、日に何回となく、予の心の中をあちらへ行き、こちらへ行きさしてる問題はこれだ……。そんなら何故この日記をローマ字で書くことにしたか？　何故だ？　予は妻を愛してる。愛してるからこそこの日記を読ませたくないのだ。——然しこれはうそだ！　愛してるのも事実、読ませたくないのも事実だが、この二つは必ずしも関係していない。そんなら予は弱者か？　否、つまりこれは夫婦関係といふ間違った制度があるために起るのだ。夫婦！　何と云ふバカな制度だらう！　悲しいことだ！」と書いている。

このローマ字の日記をよむと、この期間（四月―五月）に、彼がいかに煩悶と苦悩をつづけていたかがわかる。そしていつか浅草十二階下の淫売窟や吉原の遊廓へ足を運んだ。小説を書こうとしてペンを持ってみるが一行も書けず、社に出るのもいやになって、本を売ったり、着物を質に入れたりして、足はまたいつか浅草に向うのである。「いくらかの金のある時、予は何のためろうことなく、かのみだらな声に満ちた、狭いきたない町に行った。予は去年の秋から今迄に、凡そ十三、四回も行った。そして十人ばかりの淫売婦を買った。ミツ、マサ、キヨ、ミネ、ツユ、ハナ、アキ……名を忘れたのもある。予の求めたのは暖かい、柔かい、真白なからだだ。からだも心もとろけるような楽しみだ。」しかしこれらからは「からだも心もとろけるようなたのしみ

は薬にしたくもない。強き刺激を求めるイライラした心は、その刺激を受けつつあるときでも予の心を去らなかった。」という焦躁の毎日がつづいている。
この日記にはまたつぎのような悲痛な言葉が書かれている。「あゝ！安心――何の不安もないと云う心持は、どんな味のするものだったろう！永いこと――物心ついて以来、予はそれを忘れてきた。」「何も知らずに、農夫の様に生きたい。予はあまり賢こすぎた。発狂する人が羨しい。」「予は今疲れている。そして安心を求めている。その安心とはどんなものか？どこにあるのか？苦痛を知らぬ昔の白い心には百年たっても帰ることができぬ。安心はどこにある？」（以上4月10日）「現在の夫婦制度――総ての社会制度は間違いだらけだ。予は何故親や妻や子のために束縛されねばならぬか？親や妻や子は何故予の犠牲にならねばならぬか？然しそれは、予が親や節子や京子を愛している事実とは自ら別問題だ。」（4月15日）「予はその部屋の電灯を消した。そして戸袋の中のナイフを振り上げて立っていた！――予は自殺ということは決してこわいことでないと思った。」（4月16日）「いっそ田舎の新聞へでも行こうか？然し行ったとて矢張り家族を呼ぶ金は容易に出来そうもない。そんなら予の第一の問題は家族のことか？とにかく問題は一つだ。如何にして生活の責任の重さを感じないようになろうか。――これだ。」（同17日）「妹よ！妹よ！我等の一家がうち揃って、たのしく淡民の昔話をする日が果してある

たろうか。」(同18日)「あゝ……今朝ほど予の心に死と云う問題が直接に迫ったことがなかつた。今日社に行こうか行くまいか……いやいや、それよりも先ず、死のうか死ぬまいか？」「予は今予の心に何の自信なく、何の目的もなく、朝から晩まで動揺と不安に追い立てられていることを知っている。何のきまった所がない。この先どうなるのか？」このようなローマ字の日記は、六月十六日「まだ日の昇らぬうちに予と金田一君と岩本と三人は上野のステーションのプラットホームにあった。汽車は一時間おくれて着いた。友、母、妻、子……車で新らしい家に着いた。」というところで終っている。この新しい家というのは、本郷弓町二丁目十八番地の喜之床という理髪屋の二階の二間で、金田一京助の保証で下宿屋の借金は月賦でかえすことで話がついて、家族を迎えるために借りたのである。

　上記のローマ字日記の四月十日のところに彼の文学思想の上で注目すべきところがある。それはつぎのようなものである。

　近頃の短篇小説が一種の新らしい写生文に過ぎぬようなものとなってしまったのは、否、我々が読んでもそうとしか思わなくなって来た――つまり不満足に思うのは、人生観として自然主義哲学の権威が段々となくなったことを示すものだ。

時代の推し移りだ！　自然主義は初め我等の最も熱心に求めた哲学であったことは争われな

い。が、いつしか我等はその理論上の矛盾を見出した。そして、その矛盾を突っ越して、我等の進んだ時、我等の手にある剣ではなくなっていた。――少くとも予一人は、最早傍観的態度なるものに満足することが出来なくなって来た。作家の人生に対する態度は、傍観ではいけぬ。作家は批評家でなければならぬ。でなければ、人生の企画者でなければならぬ。又……

予の到達した積極的自然主義は即ち又新理想主義である。理想という言葉を我等は永い間侮辱して来た。実際又嘗て我等の抱いていたような理想は、我等の発見した如く、憐れな空想に過ぎなかつた。「ライフ・イリュージョン」に過ぎなかった。然し、我等は生きている。又、生きねばならぬ。あらゆるものを破壊しつくして新たに我等の手ずから樹てたこの理想は、最早憐れな空想ではない。

これはかつて釧路で書いた「卓上一枝」のなかで、「吾人は自然派の小説を読む毎に、一種の不安を禁ずる能はず。此不安は乃ち現実暴露の悲哀なり。」といい、そして「どうにか成る。」「成る様に成る」という結論に不安をもっていた啄木が、この日記ではもっと明確にそれを人生にたいする傍観的態度として批判し、「作家は批評家でなくてはならぬ。」といい、そして「積極的自然義主は即ち新理想主義である。」といっている。これは後に書いている「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」や「時代閉塞の現状」で到達している思想が、すでにここで形づくられてい

たことを示すものである。

このローマ字日記を書いた少し前の一月十二日の日記に、上田敏を訪ねて話しあったことを書き、そして「氏は自然主義と社会主義との関係、――から、日本に起って来た、或は起りつつあるデモクラット的思想についておもしろい観察を下していた。そして今の小説――自然派の小説は、今のままで進めば勢ひ社会、道徳等の問題に触れた、所謂傾向文学となると言った。」と書いている。この上田敏の「おもしろい観察」について彼自身の意見はここでは述べられていないが、彼は上田敏の観察を肯定的にきいてきたことは疑いえない。そしてここからやがて彼自身の意見として、「最早傍観的態度なるものに満足できなくなった。」といわしめているのである。

この年十一月になって、彼の文学思想の上に重要な意義をもつ論文が書かれている。それは「食ふべき詩」と「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」である。「きれぎれに心に浮んだ」の方は四十二年十二月号の『スバル』に掲載されたものだし、「食ふべき詩」の方は十一月三十日から十二月七日まで東京毎日新聞に「弓町だより」として連載したもので、ほとんど同時に発表されたものである。しかし内容からみると、「きれぎれに心に浮んだ」の方が、「食ふべき詩」よりも一歩前進したものとみてよいと思う。

この「食ふべき詩」という文章は、啄木自身のこれまでの詩にたいする考え方、つまり空想的

でロマンチックな傾向の詩にたいするきびしい批判と、今後の詩はいかにあるべきかを主張したもので、その主張は、明らかに自然主義の立場にたったものである。この文章で彼は「以前私も詩を作ってゐた事がある。十七八の頃から二三年の間である。其頃私には詩の外に何物もなかった。朝から晩まで何とも知れぬものにあこがれてゐる心持は、唯詩を作るといふ事によって幾分発表の路を得てゐた。さうして其心持の外に何ももってゐなかった。——其頃の詩といふものは唯も知るように、空想と幼稚な音楽と、それから微弱な宗教的要素(乃至はそれに類した要素)の外には、因襲的な感情のあるばかりであった。」と過去を回想し、そして「詩を書いてゐた時分に対する回想は、未練から哀傷となり、哀傷から自嘲となった。人の詩を読む興味も全く失はれた。」と告白している。こうして浪漫主義から脱出し、新しい文学潮流として勃興しつつあった自然主義に接近してゆく過程をつぎのように書いている。

思想と文学との両分野に跨って起った著名な新しい運動の声は、食を求めて北へ北へ走って行く私の耳にも響かずにはゐなかった。空想文学に対する倦厭の情と、実生活から得た多少の経験とは、やがて私にも其の新しい運動の精神を享入れる事を得しめた。遠くから眺めてゐると、自分の脱出して来た家に火事が起って、見る見る燃え上がるのを、暗い山の上から瞰下すやうな心持であった。今思ってもその心持が忘れられない。

そのころ「卓上一枝」などが書かれていたのであろう。啄木は早くから実生活上の苦労を経験し、それに加えて、新聞記者生活からえた社会、政治などについての知識から、彼の考えかたが現実的にならざるをえなかったのである。『明星』や『スバル』派の空想的な詩人や歌人に「倦厭の情」をもつようになり、現実を直視するという精神をもって、詩の問題を考えるようになったのである。

さうして現在の心持は、新しい詩の真の精神を、始めて私に味はせた。「食ふべき詩」とは、電車の車内広告でよく見た「食ふべきビール」といふ言葉から思ひついて仮に名づけたままである。

謂ふ心は、両足を地面に喰っ付けてゐて歌ふ詩といふ事である。実人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩といふ事である。珍味乃至御馳走ではなく、我々の日常の香の物の如く、然く我々に「必要」な詩といふ事である。——斯ういふ事は詩を既定のある地位から引下す事であるかも知れないが、私から云へば、我々の生活にあっても無くても何の増減もなかった詩を、必要な物の一つにする所以である。詩の存在の理由を肯定する唯一の途である。

啄木はここで、従来の単に装飾的な、また遊戯的な意味しかもたなかった詩を、現実の生活に「必要」な詩にしなければならぬと主張している。つまり詩を現実生活にむすびつけることであ

る。そして彼は、詩人とはいかなるものでなければならぬかについて、「詩人たる資格は三つある。詩人は先づ第一に『人』でなければならぬ。第二に『人』でなければならぬ。第三に『人』でなければならぬ。さうして実に普通の人のもってゐる凡ての物をもってゐるところの人でなければならぬ」といっている。啄木は、いわゆる詩人という特別の存在を否定する。詩人とは何か特別に尊いもの、普通人のもたない神経や感覚をもっていて、それを誇張して詩人の存在を特殊あつかいにすることに反対している。そして詩人といえども、健全な常識をもった、あくまで普通の人間であるべきだといっている。

言ひ方が大分混乱したが、一括すれば、今迄の詩人のやうに、直接詩と関係のない事物に対しては、興味も熱心も希望ももってゐない——餓ゑたる犬の食を求むる如くに、唯々詩を求め探してゐる詩人は極力排斥すべきである。意志薄弱なる空想家、自己及び自己の生活を厳粛なる理性の判断から回避してゐる卑怯者、劣敗者の心を筆にし口にして僅かに慰めてゐる臆病者、暇のある時に玩具を弄ぶやうな心をもって詩を書き且つ読む所謂愛詩家、及び自己の神経組織の不健全な事を心に誇る偽患者、乃至は其等の模倣者等すべて詩のために詩を書く種類の詩人は極力排斥すべきである。(中略)

即ち真の詩人とは、自己を改善し、自己の哲学を実行せんとするに政治家の如き勇気を有し

自己の生活を統一するに実業家の如き熱心を有し、さうして常に科学者の如き明敏なる判断と野蛮人の如き率直なる態度をもって、自己の心に起り来る時々刻々の変化を、飾らず偽らず、極めて平気に正直に記載し報告するところの人でなければならぬ。（中略）一切の文芸は、他の一切のものと同じく、ある意味において自己及び自己の生活の手段であり方法である。詩を尊貴なものとするのは一種の偶像崇拝である。（中略）我々の要求する詩は、現在の日本に生活し、現在の日本語を用ひ、現在の日本を了解してゐるところの、日本人に依って歌はれた詩でなければならぬといふ事である。

自然主義文学の主張の一つは、すべて既成の権威と偶像を破壊し、平凡な生活を赤裸々に描くということであった。そしてそこから、芸術のための芸術（芸術至上主義）という考えから、人生のための芸術という考えかたに変ってきた。啄木の「食ふべき詩」もこのような主張のうえにたっている。そのころの詩壇は、「スバル」などを中心にしていわゆる象徴主義の詩が流行していた。またいわゆるデカダンの詩も流行していた。それらは現実の生活とは何のかかわりもないもので、啄木のいう「自己の神経組織の不健全を心に誇る偽患者」の詩であった。「食ふべき詩」はそのような詩にたいするきびしい批判であり、攻撃であったのである。

啄木はこの文章を書いたころから彼自身の詩も変ってきていることは、前にあげた「心の姿の

研究」一連の詩で明らかである。それは全く自然主義的な詩である。ところで「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」では、当時の日本の自然主義にたいしてするどい批判の目をむけているのである。すなわち

長谷川天渓氏は、嘗てその自然主義の立場から「国家」といふ問題を取扱つた時——一見無雑作に見える苦しい胡魔化しを試みた。（と私は信ずる。）謂ふが如く、自然主義者は何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も国家の存在と抵触する事がないのならば、其所謂旧道徳の虚偽に対して戦った勇敢な戦も、遂に同じ理由から名の無い戦になりはしないか。従来及び現在の世界を観察するに当つて、道徳の性質及び発達を国家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である。——寧ろ、日本人に最も特有なる卑怯である。

田山（花袋）氏も亦嘗て「自然主義を単に文学上の問題として考へて見たい。」といふ意味のことを何かで述べられた。氏の立場にすれば諒とすべき言葉であるが、一方から見れば、其処に「或物」を回避した態度がないとは云へない。（中略）

普通「人」は実行し且つ観照しつつあるものであるが、氏には余りに其観照——隔一線の態度が多過ぎはしまいか。私は田山氏と人生との間に、常に一定の距離が保たれてゐるやうな感

じを不満に思ふ。田山氏は文学を人生に近づかしめた。さうして遠ざからしめた。（中略）
国家！　国家！
国家といふ問題は、今の一部の人達の考へてゐるやうに、そんなに軽い問題であらうか？
（啻に国家といふ問題ばかりではない。）昨日迄私もその人達と同じやうな考へ方をしてゐた。
今私にとつては、国家について考へることは、同時に「日本に居るべきか、去るべきか」といふ事になつて来た。
凡ての人はもつと突込んで考へなければならぬ。今日国家に服従してゐる人は、其服従してゐる理由についてもつと突込まなければならぬ。又従来の国家思想に不満足な人も、其不満足な理由について、もつと突込まなければならぬ。
啄木はこの文章で、文学と政治の問題、思想と実行（理論と実践）の問題を、それは統一して考えるべきだと主張しているのである。そして当時の自然主義文学が、人生を観照する、傍観するだけで、人生をいかに生きるかといふ実行の問題ときりはなして考えている態度を「日本人に最も特有なる卑怯」として批判しているのである。現実をありのまゝに描くという自然主義が、「現実暴露の悲哀」に直面し、そしてけっきよくは「なるようになる」という虚無的なところに落ちこんでいった不徹底さを、彼は不満としたのである。ここから彼は国家という問題を考えざ

るをえなかった。

では啄木は「国家」という問題を、なぜこのように重大に、痛切な問題として考えざるをえなかったのであろうか?

前にもいつたように、日露戦争のとき起った反戦運動は、そののち社会主義運動として発展していった。労働者の運動や、思想団体の活動も活潑になった。三十九年一月「日本社会党」が結成され、三月堺利彦によって『社会主義研究』という雑誌も出た。翌四十年三月、足尾銅山にストライキがあって、それが暴動化して軍隊が出動した。このとき西川光二郎が投獄された。四月『平民新聞』が発行禁止となり、「日本社会党」も解散を命ぜられた。北海道幌内炭坑、別子銅山などにもストライキが起り、これも軍隊が出て鎮圧した。十二月片山潜が「平民協会」を組織したが、これも禁止された。四十一年六月には有名な赤旗事件が起り、堺利彦、荒畑寒村、大杉栄などが投獄された。このころから言論、出版、集会などの自由が極端に弾圧されるようになった。そしてこれらの弾圧は、すべて国家の秩序をまもるという名で行われた。

日本の国家、それは封建的絶対専制の権力であった。日本の明治維新は、民主主義革命としてははなはだ不徹底にしか行われなかった。それは天皇制絶対権力のもとでの民主主義であった。そして国家の名によって、人民に真の自由がなく、半奴隷的な服従を強制されてきた。従ってまた

大多数のはたらく人民の生活は、ひどい窮乏のなかにあり、新しい文化の花を咲かす地盤としてあまりにも貧弱であった。そのことから当然に、自然主義文学といわれるものの根も弱く、現実の追求といいながら、それは単なる愛慾生活の告白や、じめじめした生活愚痴に終っていた。そこには人間の社会的生活の問題や、個人を不幸にしたり、みじめにしたりしている根本の社会的条件の追求が、まるでかえりみられなかった。そんなことは文学に関係のない問題として、避けて通ったのであった。啄木はそれを「卑怯」といった。啄木は、あらゆる意味で個人の生活を支配している国家の問題を「凡ての人はもっと突込んで考へなければならぬ。」といっている。

啄木が明治四十一（一九〇八）年四月、最後の上京をしてからこの四十二年の秋まで、文字通り血のにじむような内外のたたかいを経験しながら、ついに真にたたかうべき根本のものを「国家」という組織的権力に見出したのである。それは後に書いた「時代閉塞の現状」において明瞭に示されている。

七、大逆事件と啄木

明治四十三（一九一〇）年、啄木二十五歳である。この年に入って、彼の思想はますます現実的、具体的になってきた。このごろ彼の書いている文章は、以前のように「誇大妄想」といわれるような大言壮語や気負ったところがなくなり、地味に、着実になってきていることが感じられる。一月九日、大島経男に宛た手紙に「人生——狭くいって現実といふものは、決して固定したものではない。随って人間の理想といふものも固定したものではない。我々は時々刻々自分の生活（内外の）を豊富にし拡張し、然して常にそれを統一し徹底し、改善してゆくべきではないでしょうか。あらゆる議論の最後は、然して最良の結論は唯一つあります。乃ち実行的、具体的といふことです。（と私は思ひます）」といい、また「現在の日本には不満足だらけです。然し私も日本人です。そして私自身も現在不満足だらけです。乃ち私は、自分及び自分の生活といふものを改善すると同時に、日本及び日本人の生活を改善する事に努力すべきではありますまいか。」といって、あくまで個人生活と社会生活とをむすびつけて考え、そしてそのための「実行」ということを重要に考えているのである。さらにこの手紙の最後に、「それから一つ喜んでいただきたいことがあります。それは、以前から悪縁のつながってゐたスバルと、今度全く内部の縁をきりました。編輯兼発行の名も変へました。——かうして私は、すべての古い自分といふものを新らしくして行きたいと思ひます。」と書いているが、ここで彼は、過去の浪漫主義から完全にぬけだし

ていることを示している。

前年十一月に「食ふべき詩」と「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」を書いた啄木は、この年に入ってさらに注目すべき文章を書いている。それはたとえば「性急な思想」（43年6月、『東京毎日新聞』）、「硝子窓」（43年6月、『新小説』）などである。「性急な思想」では「自己を軽蔑する心、足を地から離した心、時代の弱所を共有することを誇りとする心、さういふ性急な心を若しも『近代的』といふのであったならば、否、所謂『近代人』はさういふ心を持ってゐるものならば、我々は寧ろ退いて、自分がそれ等の人々より多く『非近代的』である事を恃み、且つ誇るべきである。さうして、最も性急ならざる心を以て、出来るだけ早く自己の生活その物を改善し、統一し徹底すべきところの努力に従ふべきである。」といっている。

この文章は当時の頽廃的な傾向の文学を非難したもので、いま引用した前のところに、「不健全を恃み、且つ誇り、更に其不健全な状態を昂進すべき色々の手段をとって得意になるとしたらどうであらう。其結果はいふまでもない。若し又、さうしなければ所謂『新しい詩』『新しい文学』は生れぬものとすれば、さういう詩、さういふ文学は（中略）全然不必要なものでなければならぬ。」といっていることで明らかである。また「硝子窓」では「実社会と文学的生活との間に置かれた間隔」、「観照と実行」という問題について考察し、そしてその際における文学の限界に

ついて述べている。

このようにして啄木は、文学と人生、文学と社会、また思想と実行などの問題についていよいよ現実的、具体的に考察をすすめながら、ついに彼の最後の到達といわれる「時代閉塞の現状」を書くことになるのである。

啄木は朝日新聞社につとめながら『二葉亭全集』の校正をひきうけていた。これは生活費の補助のためでもあったが、一つには、二葉亭四迷にたいする尊敬の念もあって、この仕事には熱意をもってあたっていた。金田一京助の年譜に「貴重な夜の時間を上野図書館に費し、一々原本にあたって忠実・厳正にやってゐた。後には自分で五円を投じて、自宅へ借り出して原本にあたってゐた。こんなに迄してゐることは誰にもわかることでもなし、それだけ骨折りばえのある事か疑問な位だが、さうせずには居られない程、故人に傾倒し、その一字・一句の使ひ方にも敬虔な注意を払ってゐたのである。」と書かれているようなありさまであった。

何事によらず全身をうちこむ熱誠さ、これが啄木の性格でもあった。一月九日の大島経男への手紙に「私は私の全時間をあげて（殆んど）この一家の生活を先づ何より先きにモット安易にするだけの金をとるために働いてゐます。そのためには社で出す二葉亭全集の校正もやってゐます。田舎の新聞へ下らぬ通信も書きます。それでも私にはまだ不識不知空想にふけるだけの頭に

スキがあります。目がさめて一秒の躊躇なく家を出て、そして枕についてすぐ眠れるまで、一瞬の間断なく働くことが出来たらどんなに愉快でせう。そして全身を以て働いてゐるときに、願はくはコロリと死にたい、――かう思ふのは、兎角自分の弱い心が、昔の空想にかくれたくなる其疲労を憎み且つ恐れるからです。」と書いている。

この年五月から彼の最後の小説である「我等の一団と彼」を書きだしている。この小説は、新聞社内の人々に取材し、そこから時代思潮といったようなものを描こうとしたもので、「これは僕が今迄に於て最も自信ある作だ。」と彼もいっているが、彼の小説では最もリアリスチックな手法のもので、そしてこの一、二年間の啄木のはげしく変りつつあった人生観や、思想上の問題が扱われているのである。しかしこれは未完のままで、彼の生前にはついに発表されることがなかった。

この五月末から六月にかけて、いわゆる大逆事件というのが発覚して、全国に大きな衝撃をあたえた。そして啄木もまた、最も大きな衝撃をうけた一人であった。彼はこの衝撃によって、にわかに社会主義や無政府主義に関する本を探しだしては読んだ。さらに彼はこの事件の特別弁護人であり、かつて『スバル』の仲間であった平出修を通じて、この事件の内容をきき、一件書類を熱心によみ、またそれを写したりしている。当時の日記をみると、いかに彼がこの事件に深い

関心をもっていたかがわかる。

平出君の処で無政府主義者の特別裁判に関する内容を聞いた。若し自分が裁判長だったら、管野スガ、宮下太吉、新村忠雄、古河力作の四人を死刑に、幸徳、大石の二人を無期に、内山愚堂を不敬罪で五年位に、そしてあとは無罪にすると平出君が言った。またこの事件に関する自分の感想録を書いておくと言った。幸徳が獄中から弁護士に送った陳弁書なるものを借りてきた(44年1月3日)。夜、幸徳の陳弁書を写す(1月4日)。幸徳の陳弁書を写し了る。火のない室で指先が凍って、三度筆を取落したと書いてある。無政府主義に対する誤解の弁駁と検事の調べの不法とが陳べてある。幸徳は決して自ら今度のやうな無謀を敢てする男でない(11月11日)。借りてきた書類を郵便で平出君に返した。予の写したのは社の杉村氏に借した。……夕飯の時は父と社会主義について語つた(1月6日)。この日市俄古の万国労働者の代表から社に送ってきた幸徳事件の抗議書――それは社では新聞に出さないといふので予が持って来た(11月11日)。今日は幸徳らの特別裁判宣告の日であった。……今日程予の頭の昂奮してゐた日はなかった。二時半過ぎた頃でもあったらうか。「二人だけ生きる〳〵」「あとは皆死刑だ」「あゝ二十四人!」さういふ声が耳に入った。「判決が下ってから万歳を叫んだ者があります。」松崎君が渋川氏へ報告してゐた。予はそのまゝ何も考へなかった。たゞすぐ家へ帰って寝たいと思った。それでも定刻に

帰った。帰って話をしたら母の眼に涙があった。「日本はダメダ。」そんな事を漠然と考へ乍ら丸谷君を訪ねて十時頃まで話した。夕刊の一新聞には幸徳が法廷で微笑した顔を「悪魔の顔」と書いてあった(1月18日)。朝枕の上で国民新聞を読んでゐたら俄かに涙が出た。「畜生！ 駄目だ！」さういふ言葉も我知らず口に出た。社会主義は到底駄目である。人類の幸福は独り強大なる国家の社会政策によってのみ得られる。さうして日本は代々社会政策を行ってゐる国である。と御用記者は書いてゐた(1月19日)。昨夜大命によって二十四名の死刑囚中十二名だけ無期懲役に減刑されたさうである(1月20日)。幸徳事件関係記録の整理に一日を費す(1月23日)。社へ行ってすぐ「今朝から死刑をやってゐる」と聞いた。幸徳以下十一名のことである。あゝ、何といふ早いことだらう。さう皆が語り合った。この夜、幸徳事件の経過を書き記すために十二時まで働いた。これは後々への記念のためである(1月24日)。昨日の死刑囚死骸引渡し、それから落合火葬場の事が新聞に載った。内山愚堂の弟が火葬場で金槌を以て棺を叩き割った——そのことが劇しく心を衝いた。……かへり平出君へよって幸徳、管野、大石等の獄中の手紙を借りた。平出君は民権圧迫について大に憤慨してゐた。明日裁判所へかへすといふ一件書類を一日延して、明晩行って見る約束にして帰った(1月25日)。社からかへるとすぐ、前夜の約を履んで平出君宅に行き、特別裁判一件書類をよんだ。七枚十七冊、一冊の厚さ約二寸乃至三寸づつ。

十二時までかゝって漸く初二冊とそれから管野すがの分だけ方々拾ひよみした。頭の中を底から掻き乱されたやうな気持で帰った（1月26日）。

ざっと以上のようである。この日記のなかで「幸徳事件の経過を書き記すために十二時まで働いた。これは後々への記念のためである。」といっているこの記録は、彼が「日本無政府主義者陰謀事件経過報告及び附帯現象」と題して、この事件に関する当時の新聞記事その他の記録、幸徳の「陳弁書」、そのほか「EDITOR'S NOTES」と題する彼の見聞したさまざまのこと、それにクロポトキンの「自叙伝」の一部を英文で書き、それについて彼の意見など述べたもので、かなりの量にのぼるものである。これは戦後はじめて公表されたものであるが、これによっても、彼がこの事件に、いかに異常な興味と関心をもっていたかがわかり、そしてこの事件によって、彼の思想が決定的な影響をうけたことも理解できるのである。

ところで彼の日記は四十三年四月二十六日以後書かれて おらず、（この期間六月十九日以後九月八日まで、彼の書簡集も空白になっている。これは何を意味するのか？）そして四十四年の当用日記補遺欄に、「四十三年一ケ年の回顧」として一まとめに書かれている。それを見ると、「六月——幸徳秋水事件陰謀発覚し、予の思想に一大変革ありたり。これよりポツポツ社会主義に関する書籍雑誌類を聚む。」「思想上に於ては重大なる年なりき。予はこの年に於て予の性格、趣味

傾向を統一すべき一鎖鑰を発見したり。社会主義問題これなり。予は特にこの問題について思考し、読書し、談話すること多かりき。たゞ為政者の抑圧非理を極め、予をしてこれを発表する能はざらしめたり。」「また予はこの年に於て、嘗て小樽に於て一度逢ひたる社会主義者西川光次郎君と旧交を温め、同主義者藤田四郎君より社会主義関係書類の貸付を受けたり。」などと書いている。これらをみると、彼が日記を書かなかった期間の、およその動向が想像できるのである。

「時代閉塞の現状」は生前未発表の論文であるが、大体四十三年八月末から九月にかかれたものと推定される。この論文は「卓上一枝」「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」「性急な思想」などを経て、しだいに統一され、到達しつつあった思想上、文学上の結論といってもよく、そして当然大逆事件によって甚大な影響をうけてからの執筆であることが注目される。この文章には「強権、純粋自然主義の最後及び明日の考察」というサブタイトルのついているもので、その冒頭に「数日前本欄（東京朝日新聞の文芸欄――渡辺）に出た『自己主張の思想としての自然主義』と題する魚住氏の論文は」といっているように（この魚住氏の論文が出たのは八月二十二日）、魚住という人の論文にたいする反駁として書かれたものである。そのなかで彼はつぎのように書いている。すなわち

「我々青年を囲繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなった。」といって、資本主義社会が、もはや隅々まで腐敗しつくしていることを指摘し、そして、

斯くの如き時代閉塞の現状に於て、我々の中最も急進的な人達が、如何なる方面にその「自己」を主張してゐるかは既に読者の知る如くである。実に彼等は、抑へても〳〵抑へきれぬ自己其物の圧迫に堪へかねて、彼等の入れられてゐる箱の最も板の薄い処、若くは空隙（現代社会組織の欠陥）に向って全く盲目的に突進してゐる。今日の小説や詩や歌の殆どすべてが女郎買、淫売買、乃至野合、姦通の記録であるのは決して偶然ではない。（中略）さうして又我々の一部には、「未来」を奪はれたる現状に対して、不思議な方法によつて其敬意と服従を表してゐる。元禄時代に対する回顧がそれである。見よ、彼等の亡国的感情が、其祖先が一度遭遇した時代閉塞の状態に対する同感と思慕とによって、如何に遺憾なく其美しさを発揮してゐるかを。

斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない。実に必至である。我々は一斉に起って先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷めて全精神を明日の考察――我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。（中略）

即ち我々の理想は最早「善」や「美」に対する空想である訳はない。一切の空想を峻拒して

其処に残る唯一つの真実——「必要」！　これ実に我々が未来に向って求むべき一切である。我々は今最も厳密に、自由に「今日」を研究して、其処に我々自身にとっての「明日」の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である。（中略）

文学——彼の自然主義運動の前半、彼等の「真実」の発見と承認とが、「批評」として刺戟を有ってゐた時代が過ぎて以来、漸くただの記述、ただの説話に傾いて来てゐる文学も、斯くて復た其眠れる神精が目を覚して来るのではあるまいか。何故なれば、我々全青年の心が「明日」を占領した時、其時「今日」の一切が初めて最も適切なる批評を享くるからである。時代に没頭してゐては時代を批評することができない。私の文学に求むる所は批評である。

われわれはいまこの文章をよんでむしろ驚嘆せざるをえない。当時啄木以外の何人がこれだけの思想的内容の高い、透徹した批評を書きえたであろうか。窪川鶴次郎はいっている。「日本における自然主義文学の真の批判者としての見地、すなわち自然主義文学の否定的リアリズムの方法を批判的リアリズムの方法にまで発展せしめていった彼の見地は、実にその芽をここに（「卓上一枝」のこと、——渡辺註）発しているのである。そして、これより二年後の、明治四十三年八月に書かれた「時代閉塞の現状」においては、その批判的リアリズムは真に自然主義を克服することによって社会主義的方向を力強く指し示すにいたった。今日私たちは、日本における民主主義文学の本質と性

格とが、啄木によって最初の規定を与えられたことを知ることができる。ここに日本の近代文学における発展の基本的モメントを見出すことができる。」（「詩人啄木の文学的形成」）と。

啄木が死んでから数年たって、すなわち大正六、七年頃から、日本にはじめて労働者文学というものがあらわれている。それは労働者階級の立場から書かれた文学で、従って当然「時代を批評」する文学であった。また啄木の日記にあった上田敏との対談のなかの、「自然主義文学が、それが正しく進めば傾向文学になる。」という、その傾向文学であった。そしてこれは、「我々自身にとっての『明日』の必要を発見」するために生れた文学であった。さらにそれはまた当然「時代閉塞の現状に宣戦」した文学であった。これは社会の発展と、文学の歴史にとって実に「必至」のことであった。この意味で啄木の「時代閉塞の現状」が「日本の近代文学における発展の基本的モメント」を示していたということができるのである。

啄木が「時代閉塞の現状」といったのは何か？　それは天皇制絶対主義、その国家の「強権」、その強権によって支配される「現代社会組織」なのである。この「現代社会組織」のなかで、「自己」を主張しようとして失敗した過去の経験を啄木はこの文章でいっている。その第一は、高山樗牛の個人主義で（啄木はかつて樗牛に心酔していた）、これは既成のもの、——現在の社会組織をそのままにしておいて、そのなかで自力をもって「自己」を主張しようとしてもそれは不可能だった。そ

こで第二は、「他力によって既成の外に同じ事を成さんとした、すなわち宗教の世界（啄木はここで綱島梁川の名をあげている。この梁川にも一時彼は傾倒していた。）で自己を主張しようとしたが、これも時代閉塞の現状を、現実にいかんともすることができなかった。こうして啄木は「我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬ。」それは科学的、実践的でなければならぬことを主張しているのである。

では大逆事件とは一体どんな事件だったのか？

それは幸徳秋水から直接間接に思想的影響をうけていた宮下太吉、新村忠雄、古河力作、管野スガという四人の青年が、人権の自由にたいする政府の弾圧に堪えられなくなり、その抑圧の根元が、絶対専制の天皇権力にあるのだから、この天皇を倒すことによって、人民の自由を獲得しようと考え、そこで爆裂弾を作って、四十三年の秋、明治天皇の行幸の途中で投げつけようという計画だったのである。前にも書いた赤旗事件や、そのほか政府の不当な人権抑圧が、宮下などの急進的な青年の心をつよく刺戟し、ついに「暴力には暴力をもって」というような、追いつめられた気持になったのである。当時は陸軍大将桂太郎の軍閥内閣で、その前の山県内閣などからひきつづいて、進歩的な思想にたいする弾圧がひどかった。啄木が痛切に「国家」の問題に頭をなやましたのも、このような時代の空気を、身にひしひしと感じていたからである。

宮下らの陰謀は五月末に未然に発覚し、彼ら四人のほかに、全国にわたって多数の人々が検挙

され、その結果二十六人が大逆罪として起訴された。幸徳秋水、奥宮健之、大石誠之助、内山愚堂、森近運平など、そのころの有名な社会主義者たちであった。しかし前記宮下ら四名のほかはその陰謀に何の関係もなかったのだが、政府は宮下らの陰謀を口実にして、彼らのいわゆる危険人物を一網打尽に検挙したのである。そして全くの秘密裁判で、幸徳はじめ十二人を死刑に、十二人を無期懲役に、あとの一人は十年、一人は八年の懲役という極刑を判決（44年1月18日）したのである。この事件は、三鷹事件や松川事件と同じように、支配階級による陰謀であったのである。啄木はこの大逆事件によって国家の強権を「敵」として認識したのである。

四十三年十二月二十一日、啄木は宮崎郁雨に宛てつぎのような手紙を書いている。「君、僕はどうしても僕の思想が時代より一歩進んでゐるといふ自惚を此頃捨てる事が出来ない。若し時間さへあつたら、屹度書きたいと思ふ著述の考案が二つある。一つは『明日』といふのだ。これは歌を論ずるに托して現代の社会組織、教育制度、その他百般の事を抉るように批評し、昨日に帰らんとする旧思想家、今日に没頭しつつある新思想家――それらの人間の前に新たに明日といふ問題を提唱しやうといふものだ。も一つは『第二十七議会』といふのだ。これは毎日議会を傍聴した上で、今の議会政治のダメな事を事実によって論評し、議会改造乃ち普通選挙を主張しやうといふのだ。」と。また翌年一月九日に、瀬川深に送った手紙には、

僕は必ず現在の社会組織、経済組織を破壊しなければならぬと信じてゐる。これ僕の空論ではなくて、過去数年間の実生活から得た結論である。僕は他日僕の所信の上に立って多少の活動をしたいと思ふ。僕は長い間自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない。無論社会主義は最後の理想ではない。人類の社会的理想の結局は無政府主義の外にない（君、日本人はこの主義の何たるかを知らずに唯その名を恐れてゐる。僕はクロポトキンの著書をよんでビックリしたが、これほど大きい、深いそして確実にして且つ必要な哲学は外にない。）無政府主義は決して暴力主義でない。今度の幸徳事件は政府の圧迫の結果だ。そして僕の苦心して調査し、且つその局に当った弁護士から聞いたところによると、アノうち真に大逆を企てたのは四人しかない。アトの二十二人は当然無罪にしなければならぬのだ。然し無政府主義はどこまでも最後の理想だ。実際家は先づ社会主義、若しくは国家社会主義者でなくてはならぬ。僕は僕の全心の熱心を、今この問題に傾けてゐる。「安楽(ウイルビーイング)を要求するは人間の権利である。」僕は今の一切の旧思想、旧制度に不満足だ。

と書いているように、大逆事件によって啄木は、思想上決定的な影響をうけた。そして「長い間自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない。」といっている。彼が四十一年九月「所謂社会主義は予の常に冷笑する所」といってから二カ年半経過した四十四年一

月、彼ははっきり社会主義者であることを宣言するに至ったのである。この二ヵ年半の彼の経験した血のにじむ「心闘」の痛烈さはこれまでに述べてきた通りである。彼をここまで成長させたのは、彼の人生にたいする誠実さ、徹底したヒューマニストとして生きようとしたことによるものである。

大逆事件の判決があってから四日後の一月二十二日、平出修に宛た手紙のなかに「僕は決して宮下やスガの企てに賛成するものではありませんが、然し『次の時代』といふものについての一切の思索を禁じようとする帯剣政治の圧制には、何と思ひかへしても此儘に置くことは出来ないように思ひました。」といい、また二月六日、大島経男への手紙では、大逆事件の判決の不当を訴えたあとで「併しこれも恐らく仕方がないことでせう、私自身も、理想的民主政治の国でなければ決して裁判が独立しうるものでないと信じてゐます。」といい、同十四日、小田島孤舟への手紙には「我々は文学本位の文学から一足踏み出して『人民の中』に行きたいのであります。」といっている。

こうして彼は「文学本位の文学から一足踏み出して『人民の中』に行きたい」という希望を実現するために、新しい雑誌の発行を計画したのであった。それは彼と同じような傾向の歌人で、彼が親しみを感じていた土岐哀果(善麿)と共同で、『樹木と果実』という雑誌を発行しようと計

画し、これに非常な熱意をもつようになったのである。

啄木が土岐哀果とはじめて会ったのは明治四十四年一月十三日である。その前日の日記に「社に帰ると読売の土岐君から電話がかゝった。逢ひたいといふことであった。とうに逢ふべき筈のを今迄逢はずにゐた。その事を両方から電話口で言ひ合った。二人――同じやうな歌を作る――の最初の会見が顔の見えない電話口だったのも面白い。一両日中に予の所へやって来る約束をした。」また翌十三日の日記には、「電話で話し合って、帰りに読売へ寄り、北風の真直に吹く街を初対面の土岐哀果君と帰って来た。さうして一杯のんでソバを食った。こなひだ読売に、予と土岐君と共に僧家の出で共に新聞記者をしてると書いてあったが、二人は酒に弱い事も瘦せてる事も同じだった。ただ予の直ぐ感じたのは、土岐君が予よりも慾の少いこと、単純な性格なことであった。一しょに雑誌を出さうといふ相談をした。『樹木と果実』といふ名にして兎も角も諸新聞の紹介に書かせようぢゃないかといふ事になった。」と書いている。

ちょうどそのころ、啄木は大逆事件の関係書類に異常な興味と関心とをもって調査に没頭しているころであった。そして土岐哀果に会う二三日前、瀬川深に手紙を書いて「僕は必ず現在の社会組織、経済組織を破壊しなければならぬと信じてゐる。これ僕の空論ではなくて、過去数年間の実生活から得た結論である。僕は他日僕の所信の上に立って多少の活動をしたいと思ふ。」と

いっている。このような考えでいたとき、土岐哀果と会うとすぐ雑誌を出す相談をしたのである。啄木はこの雑誌に大きな希望と期待をかけ、「せめて現在の自分のなし得る範囲での革命的な仕事」として、情熱をかたむけて計画したものであった。彼はこの雑誌について友人たちにその抱負を述べ、援助をたのんでいる。たとえば平出修への手紙にはつぎのように書いている。

今の時代の如何なる時代であるかは、僕よりあなたの方がよく御存じです。この前途を閉塞されたやうな時代において、その時代の青年がどういふ状態にあるかも、無論よく御存じの筈です。さうしてこの時代が、然しながら、遠からざる未来に於て必ず或進展を見なければならぬといふ事についても、あなたの如きはよく知ってゐて下さる筈です。既に今の時代が今のやうな時代で、僕自身に欠点だらけな、そのくせ常に何か実際的理想を求めずにゐられぬ男であるとすれば、僕の進むべき路が、君子の生活でないことも、純文学の領域でないことも、ほぼ明白だらうと存じます。(未だいひつくさず)

もうこれだけでお祭しの事と存じますが、つまり僕は、来るべき時代進展(それは少くとも往年の議会運動よりも小さくないと思ふ)に、一髪の力でも添へうれば満足なのです。添へうるか何うかは疑問だとしても、添へようと努力する所に僕の今後の生活の唯一つの意味があるやうに思はれるのです。

僕は長い間、一院主義、普通選挙主義、国際平和主義の雑誌を出したいと空想してゐました。然しそれは現在の僕の学力、財力では遂に空想に過ぎないのです。(言ふまでもなく)且つ又、金があって出せたにしたところで、今のあなたの所謂軍政々治の下では始終発売を禁ぜられる外ないでせう。

かくて今度の雑誌が企てられたのです。時代進展の思想を、今後我々が或は又他の人が唱へる時、それをすぐ受入れる事の出来るやうな頭の青年を、百人でも二百人でも養って置く。これこの雑誌の目的です。我々は発売を禁じられない程度に於て、又文学雑誌といふ名に背かぬ程度に於て、極めて緩漫な方法で、現時の青年の境遇と国民の内部的活動とに関する意識を明かにする事を、読者に要求しようと思ってゐます。さうして若し出来ることなら、我々のこの雑誌を、一年なり二年なりの後には、文壇に表れたる社会運動の曙光といふやうな意味に見て貰ふやうにしたいと思ってゐます。

この手紙によって、啄木が雑誌にかけていた抱負がいかなるものであったかが十分うかがえるのである。さらに大島経男への手紙には、「私の真の意味では、保証金を納めない雑誌としての可能の範囲に於て『次の時代』『新しき社会』といふものに対する青年の思想を煽動しようといふのが目的なのであります。発売禁止の危険のない程度に於て、しよっちゅうマッチを擦っては

青年の燃えやすい心に投げてやらうといふのです。（中略）二年か三年の後には政治雑誌として、一方何らかの実行運動、普通選挙、婦人解放、ローマ字普及、労働組合――も初めたいものと思ってゐます。またさしあたり文壇の酒色主義や曲学阿世の徒に対する攻撃もやりたいと思ひます。」といい、また小田島孤舟へは「雑誌の目的は、単に文芸雑誌たるのみでなく（中略）現代の社会組織、政治組織乃至いろいろの制度に対する根本批評を青年が進んでやるやうな機運を作りたいといふにあります。（中略）我々はかつて我々の好きなロシヤの青年のなした如くに、我々の目を広く社会の上に移し、出来うべくんば、我々の手と足とを、他日その方に延ばしたいと思ふのであります。我々は文学本位から一足踏み出して、『人民の中』に行きたいのであります。」ともいっている。

これらの手紙をよむと、当時の啄木が何を考え、何をしようとしていたかがはっきりわかる。大逆事件を契機として、彼の思想がいよいよ現実的になり、具体的に進んでいたことがわかる。しかし啄木は、その二月四日に慢性腹膜炎で入院し、三月十五日退院したが、それから肋膜炎を併発し、それが不治の病いとなって、その翌年の四月十三日、ついにその短い生涯を終っているのである。かくて『樹木と果実』は実現できなかったが、啄木が死んだ翌年五月、土岐哀果の手によってその遺志をつぐ『生活と芸術』という雑誌が創刊され、啄木を慕う多くの青年によって

支持され、歌壇のいわゆる生活派の出発となったのである。

八、歌集『一握の砂』をめぐる問題

歌集『一握の砂』は明治四十三（一九一〇）年十二月一日の発行である。その扉につぎのように書かれている。

函館なる郁雨宮崎大四郎君
同国の友文学士花明金田一京助君
この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものの如し。従って両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知る人なるを信ずればなり。
また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

この亡児真一というのは十月四日に生れた彼の長男で、わずか二十日あまり生きただけで、同

月二十七日死んだ。

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな

×

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが児のからだ冷えてゆけども

×

かなしくも
夜明くるまでは残りゐぬ
息きれし児の肌のぬくもり

などはそのときの歌で、これが『一握の砂』の最後の作品になっている。
また啄木はこの歌集のはじめに、「明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相遷きをたずねて仮にわかてるのみ。『秋

風のこころよさに』は明治四十一年秋の記念なり。」と書いている。

この「四十一年夏以後」というのは、この年四月釧路から上京して、さかんに小説を書いたが金にならず、悶々としているうちに、(六月二十四日の日記)ある夜にわかに感興がわいて、一気に百あまりの短歌をつくったという、そのとき以後の作品が、この『一握の砂』に収録されているわけである。また「秋風のこころよさに」は「明治四十一年秋の記念なり。」というのは、九月六日に赤心館の三階にうつり、「眼下一望の甍の谷を隔てて、杳かに小石川の高台に相対してゐる。左手に砲兵工廠の大煙突が三本、間断なく吐く黒烟が怎やら勇ましい。晴れた日には富士が真白に見えると女中が語った。西に向いているのだ。天に近いから、一碧廓寥として目に広い。虫の音が遙か下から聞えて来ても、遮るものがないから、秋風がみだりに室に充ちてゐる。」と日記に書いているように、虫の音や秋風のこころよさに、にわかに故郷をなつかしむ心が湧いて作った一連のものである。

啄木が短歌をつくりはじめたのは三十四年十六歳のときからで、それから四十年末までに三百六十余首を作っている。そして翌四十一年には九百五十首位を作っているが、これは啄木にとっていちばん多作の年である。ところが四十二年には非常に少なくなって、九十五首あまりしか作っていない。この四十二年は、例のローマ字日記を書いている年で、(この年は手紙もあまり書い

ていない)彼は極度に心の落付きをうしない、煩悶苦悩した時期である。またこの年六月、家族を東京に迎えて弓町の床屋の二階に、久しぶりで母や妻子と住むようになったが、母と妻との不和から争いがたえず、十月妻のせつ子が家出するというようなこともあった。同時にまた、彼の短歌にたいする考え方もようやく変ってきて、『スバル』と袂別する時期でもあった。こうして四十二年は、彼の作歌は非常に少ない。

この年十一月「食ふべき詩」をかいて過去の浪漫主義を清算している。つづいて「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」「性急な思想」という風に、はっきりリアリストとして自己の思想を統一しつつ四十三年を迎えているのであるが、このころから彼の短歌は、ようやくいわゆる啄木調といわれる独自の歌風を確立してゆくのである。そして四十三年には四百七十首ほども作っているのである。

『一握の砂』には四十一年六月から四十三年十月までの作品千五百余首から五百五十余首選ばれているのであるが、その選んだ標準がどんなところにあったかを知るために、わたしが調べてわかっているだけを、左に表にして示しておく。

『明星』申歳第七号(四一・七)「石破集」一一四首(うち六首採る)
『明星』同第八号(四一・八)「新詩社詞草」四〇首(うち五首採る)

『明星』同第九号（四一・九）「虚白集」一〇二首（うち三一首採る）
『明星』同第十号（四一・一一）「謎」五二首（うち一三首採る）――『明星』終刊――
『スバル』第一巻二号（四二・二）「南枝集」一一首（うち六首採る）
『スバル』同第五号（四二・五）「莫復問」七〇首（うち三四首採る。但し「南枝集」と重複せるもの六首あり。）
『スバル』第二巻十一号（四二・一一）「秋のなかばに歌へる」一一〇首（全部採る）
『スバル』同十二号（四二・一二）「死」一二首（うち九首採る。他に改作して『悲しき玩具』に採る。）
『文章世界』（四二・一一）「路問ふほどの」一六首（全部採る）
『創作』（四三・五）「手を眺めつつ」一六首（全部採る）
『創作』（同・一〇）「九月の夜の不平」三四首（うち二六首採る）
『創作』（同・一一）「孩児の手ざはり」一六首（全部採る）
『学生』創刊号（四三・五）「最低音」一六首（全部採る）
『学生』第二号（同・六）「ベース」五首（全部採る）

だいたい以上のようである。これでみると四十一年の作から『一握の砂』に採録したものは非常に少なく、四十三年のものは、雑誌に発表したものは、ほとんど全部採られている。ここで考えられることは、四十二年を境として、彼の短歌観、ひいては文学思想の上にいちじるしい変化

があったことがわかるのである。その変化は、「食ふべき詩」ではっきりあらわれている。
四十一年七月の『明星』に発表した「石破集」百十四首のうち、わずか六首しか歌集にとっていないが、その「石破集」の作品というのは、たとえばつぎのようなもので、まだ明星調から十分ぬけだしていない、空想的に誇張したものが多いのである。

石ひとつ落ちぬる時におもしろし万山を撼る谷のとどろき
つと来りつと去る誰ぞと問ふ間なし黒き衣著る覆面の人
大海にうかべる白き水鳥の一羽は死なず幾億年も
牛頭馬頭のつどひてのぞく大香炉中より一縷白き煙す
千本の閾の中よりくれなゐの一すぢを引き海中に投ぐ

これらの歌は、明星派の人々が多く用いた象徴とか比喩とかの手法のもので、しかもその象徴比喩の内容は現実感からは遠いものである。ところでこの百十四首のなかから、歌集に採られている六首というのはつぎの歌である。

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

×
頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず
×
燈影なき室に我あり
父と母
壁のなかより杖つきて出づ
×
たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず
×
ふるさとの父の咳する度に斯く
咳の出づるや

病めばはかなし

×

己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへる術なし

これらの歌は、前にあげた採られていない歌にくらべて、ずっと現実感のある歌だといえよう。このように啄木は、この歌集の編集をしたころ（それは四十三年秋であろう。）には、四十一年頃と、短歌にたいする考え方、見方が非常にちがっていたことがわかる。

歌集『一握の砂』についてもう一つ考えられることは、この歌集の作品は全体として感傷的なものが多いということである。また回顧的、追憶的な歌が多いということである。それが一つの特色になっている。その理由として考えられることは、前にもいったように、四十一年六月、小説を書いてもものにならず、失意のどん底にあって、ある夜にわかに感興がわいて歌をつくりだした。それから毎日のように歌をつくっているが、それは当時の失意のどん底にあっての悲しい心から、父母を思い、ふるさとを思う感情が、おのずから感傷的なものとなって歌われているのである。

『一握の砂』の目次をみると「我を愛する歌」（一四八首。四一・四二・四三年にわたった作品）「煙」（(一)四七首。(二)五四首。四三年の作品）「秋風のこころよさに」（五一首。四一年の作品）「忘れがたき人々」（(一)一〇七首。(二)二二首。四二・四三年の作品）「手套を脱ぐ時」（一一一首。四二・四三年の作品）ということになっている。このなかで「煙」の(一)は盛岡中学生時代の思い出、(二)は渋民村の思い出、「秋風のこころよさに」はやはり渋民の思い出の歌が大部分である。また「忘れがたき人々」の(一)は北海道時代の思い出であるし、(二)は橘智恵子を思う歌である。「手套を脱ぐ時」は大部分が四十三年の作で、東京生活の歌である。（「我を愛する歌」は回想的なものや東京生活の歌など、いろいろまじっている。）このようにみると、『一握の砂』は過去の思い出として歌ったものが大半をしめていて、そして悲しい心で回想することによって、おのずから感傷的になっている歌が多いのである。この点で後の歌集『悲しき玩具』と非常にちがうのである。

ここでもう一つ『一握の砂』について触れておきたいことは、『創作』四十三年十月号に発表した「九月の夜の不平」三十四首のうち左の八首が歌集に採られていないことである。

何となく顔がさもしき邦人の首府の大空を秋の風吹く

つね日頃好みて言ひし××の語をつつしみて秋に入れりけり

今思へばげに彼もまた秋水の一味なりしと知るふしもあり

この世よりのがれむと思ふ企てに遊蕩の名を与へられしかな

秋の風我等明治の青年の危機をかなしむ顔撫でて吹く

時代閉塞の現状を奈何にせむ秋に入りてことに斯く思ふかな

地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聴く

明治四十三年の秋わがこころことに真面になりて悲しも

この八首が歌集から除外されたということはどんな意味があるのだろう。これらの歌を啄木が特に拙い歌として除外したものではないように思う。たとえばこのときの三十四首のなかには、「くだらない小説を書きてよろこべる男憐れなり初秋の風」、「秋の風今日よりはかのふやけたる男に口をきかじと思ふ」などがあって、前の八首とくらべても別にすぐれていると思われない歌が歌集に採られている。そこでわたしは、この八首を歌集から除外したのは、当時の厳重な検閲を考慮したのではないかと思うのである。

「九月の夜の不平」の歌はだいたい四十三年九月九日に作られている。そのころはちょうど「時代閉塞の現状」を書いたころである。そしてこの八首のうちの五首は、明らかに大逆事件に際してうごいた彼の心情がうたわれている。また「地図の上朝鮮国にくろぐろと」は、この年八月に行われた日韓合併（八月二十二日日韓合併条約調印。これが日本帝国主義の海外侵略の第一歩である。）のことをうたい、独立と自由を

うしなった朝鮮民族を悲しんだ歌である。啄木が大逆事件の発覚以来、ひそかに記録していた「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」によれば、同年八月四日、文部省は全国の図書館に訓令を発して、社会主義に関する図書の閲覧を禁止し、内務省も九月六日に全国の書店、古本屋、貸本屋に警察の臨検を実施せしめ、そして多数の本が発売禁止になっている。そして啄木は当時の日記に「予は特にこの問題（社会主義の問題――渡辺註）について思考し読書し談話する事多かりき。ただ偽政者の抑圧非理を極め、予をしてこれを発表する能はざらしめたり。」と書いている。

このような事情のなかで、彼は一度雑誌に発表しながら、歌集として出すときに、これに採録することを躊躇したのではないかと想像されるのである。なお、「九月の夜の不平」の一連の作品は、歌集では「我を愛する歌」以下の各章に分散して収録されている。そして、たとえば「やとばばかり　桂首相に手とられし夢みて覚めぬ　秋の夜の二時」という歌が「我を愛する歌」の最後に入っていて、何か突拍子もない妄想の歌のようにいわれていたが、これが大逆事件を背景にして考えるとき、この事件を**でっちあげ**た政府の首相桂太郎であってみれば、この作品のモチーフもはっきり理解できるし、また「ダイナモの　重き唸りのここちよさよ　あはれこのごとく物を言はまし」にしても、やはり宮下らの爆裂弾の陰謀とむすびつけて考えられると思うのである。その他「秋の風今日よりは彼のふやけたる」や「くだらない小説を書きてよろこべる」など

にしても、「時代閉塞の現状」を書いたころの彼として考えれば理解できる歌である。

歌集『一握の砂』の歌はみな三行書きになっているが、雑誌に発表したときはすべて一行であった。それを歌集で三行書きにしたのは、当時、短歌にたいする革新的な意見をもっていたからであろう。この年十一月「一利己主義者と友人との対話」を書き、十二月に「歌のいろいろ」という文章を書いている。この二つの文章は彼の歌論として書かれた最初の、そして最後のものである。そしてこの二つの文章に示されている彼の短歌にたいする見解は、当時としてはもっとも革新的なものである。彼は「歌のいろいろ」のなかで、「我々は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて来た。其処でこれは歌それぞれの調子に依って、或歌は二行に或歌は三行にすればよい。」といっている。

一首の短歌を三行に書くこころみは早くからあった。明治三十六年六月の『中学新誌』に与謝野鉄幹が三行の歌を発表しているし、啄木自身も同三十五年一月頃、盛岡中学時代白羊会詠草に三行書きで発表している。しかしこれらは一時的な思いつき程度のことであって、はっきりした自覚があってのことではなかったと思われる。そして直接的に啄木に影響を与えたと思われるのは、土岐哀果のローマ字の歌で、これが四十三年三月の『創作』創刊号に三行で発表され、同第一巻九号には「書斎と市街」一連の作品が日本文字で三行書きで発表されている。（この号に発表している啄木

の「孩児の手ざはり」は一行である。）これが啄木にはっきりした自覚を与え、『一握の砂』を編集したとき、全部三行書きに改めたものであろう。そしてそれ以後雑誌に発表したものは、「歌のいろいろ」で主張した通り、ある歌は二行に、ある歌は三行にしている。たとえば四十四年一月号の『早稲田文学』（一月号だから前年十二月の作であろう。すなわち『一握の砂』を出した直後）に発表した「手のよごれ」十五首のうち四首が二行で、あとは三行、またこの一月には『創作』に九首、『秀才文壇』に十首発表しているが、『創作』の方は全部三行、『秀才文壇』の方は一首だけ二行である。そしてこれらの作品は『悲しき玩具』に入っているのである。

　だから啄木は意識的に三行書きの歌をつくったのは『悲しき玩具』からの作品で、『一握の砂』の作品は、はじめは一行で発表したものを、歌集にするとき三行に改めたのだから、三行にしなければならぬ必然性はなく、不自然と思われるものも当然ある。しかしこのとき三行に書き改めることによって、行をわけることによる新しいリズムと表現方法を発見して、やがて意識的に三行書きの歌をつくるようになり、その三行のなかの、ある一行を上げたり下げたり、また、（テン）や。（マル）を用い、！や？の符号を用い、——（グラシュ）や（（カッコ）などをつかって、より複雑な、微妙な味わいを出し、従来の短歌の単調さをやぶり、ここに啄木独自の短歌をみることができるようになるのである。そういう意味からも『一握の砂』は啄木短歌の大きな発展のための過渡期的な意味（内容的にも形

式的にも）をもっているものだといってよいであろう。

前にも引用した「歌のいろいろ」で、「或歌は二行に、或歌は三行に書くことにすればよい。」といっていることにつづいて、さらにつぎのようにいっている。

よしそれが歌の調子そのものを破るといはれるにしてからが、その在来の調子それ自身が我々の感情にしっくりそぐはなくなって来たのであれば、何も遠慮をする必要がないのだ。三十一文字という制限が不便な場合には、どしどし字あまりもやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか、歌にならないとかいふ勝手な拘束をやめてしまって、何に限らず歌いたいと思ったことは、自由に歌へばよい。かうしてさえ行けば、忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌というものは滅びない。仮に現在の三十一文字が四十一文字になり、五十一文字になるにしても、兎に角歌といふものは滅びない。さうして我々はそれによって、その刹那々々の生命を愛惜する心を満足させることが出来る。

短歌は自分の生活感情の変化に応じて変ってゆくのが当然だと啄木はいっている。たいせつなのは自分の生活感情であって、固定した短歌の形式ではない。短歌の伝統的な形式を絶対的なものと考え、その固定した形式のなかに、自分の感情をもりこむのが歌人の仕事だと考えている人

々は、けっきよくは歌の職人であって、芸術家ではない。啄木はこの文章のもっと前の方に、「歴史を尊重するのは好い。然しその尊重を、逆に将来に向ってまで維持しようとして、一切の『驚くべき事』に手を以て蓋をする時、其保守的な概念を厳密に究明して来たならば、日本が嘗て議会を開いた事からが先づ国体に抵触する訳になりはしないだらうか。我々の歌の形式は万葉以前からあったものであるが、然し我々の今日の歌はどこまでも我々の今日の歌である。我々の明日の歌も矢張りどこまでも我々の明日の歌でなくてはならぬ。」といっている。ここで啄木が、「一切の『驚くべき事』に手を以て蓋をする時」といっているのは、大逆事件を念頭においていっているのであろう。さらに啄木は「歌のいろいろ」の最後のところでつぎのように書いている。

こんな事を考えて、恰度秒針が一回転する程の間、私は凝然としてゐた。さうして自分の心が次第々々に暗くなって行くことを感じた。——私の不便を感じてゐるのは、歌を一行に書き下す事ばかりではないのである。しかも私自身が現在において意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置と、それから歌ぐらゐなものである。謂はばどうでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の真に私に不便を感じさせ苦痛を感じさせるいろいろの事に対しては、一指をも加へることが出来ないではないか。否、

それに忍従し、それに屈服して、惨ましき二重の生活を続けて行く外に此の世に生きる方法を有たないではないか。自分でも色々自分に弁解しては見るものの、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、智識売買制度の犠牲である。

目を移して、死んだもののやうに畳の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。

ここには彼の悲痛な告白がある。「真に私に不便を感じさせ苦痛を感じさせるいろいろの事に対しては、一指をも加へる事が出来ない。」「否、それに忍従し、それに屈服して、惨ましき二重の生活を続けて行く外に、此の世に生きる方法を有たないではないか。」といっている。彼は現在の社会制度の欠陥とその不合理を身にしみて感じとり、それを変革することなしには、各個人の生活も明るく安定しないと考えながら、さてそれにはどうすればよいか、彼はただいらだたしさを感じるだけで、自分では一指をも加えることができないと思うのであった。これは当時の社会の未成熟から、資本主義社会の矛盾を解決するための、はっきりした科学的な見透しをもつことができなかったのである。そこに啄木のいらだちがあった。そしてすべての天才が多くそうであるように、彼は孤独であった。「僕はどうしても、僕の思想が時代より一歩進んでゐるといふ自惚を此頃捨てることが出来ない。」と、そのころ宮崎郁雨への手紙に書いているのも、そのい

らだちと孤独をうったえているのである。

彼は単なる歌よみになることに満足しなかった。「歌を作る日は不幸な日だ。刹那々々の偽らざる自己を見つけて満足する外に満足のない、全く有耶無耶に暮した日だ。君、僕は現在歌を作つてゐるが、正直に言へば、歌なんか作らなくてもよいような人になりたい。」と四十四年一月、友人瀬川深に手紙を書いている。またそれより少し前に書いた「食ふべき詩」のなかで、「私は小説を書きたかった。否、書くつもりであった。又実際書いても見た。さうして遂に書けなかった。其時恰度夫婦喧嘩をして妻に敗けた夫が、理由もなく子供を叱ったり虐めたりするやうな一種の快感を、私は勝手気儘に短歌といふ一つの詩形を虐使する事に発見した。」と書いている。

啄木は「白日炎々たる自由の王国」としての小説を書きたいと思っていた。自分の思想や人生観を積極的に表現するためには、どうしても小説でなくてはならぬと考えていた。彼はすでに三十九年七月二十二日(渋民代用教員時代)、佐々木理平治に宛た手紙のなかに「君よ、詩人の一切の文字と声とは、少なくとも今の世に於ては、これ直ちに全社会に対する抗戦ならざるべからず、切開手術ならざるべからず、熱火の雨ならざるべからず、而して遂に真の教訓ならざるべからず。……本月三日夕より『小説』の筆を(『雲は天才である』——渡辺註)起せり。蓋し詩人の一切の武器のうち、小説ほど白兵戦の突撃に有効なる武器なければなり。」と書いている。そしてその

小説を書くつもりで最後の上京を決行してから、彼は精力的に数篇の小説を書いたがものにならず、生活は窮乏のどん底におちいり、懊悩と煩悶がつづいた。そのときのやるせない、いらだたしい気持が、おのずから短歌によってはけ口を求めていった。

彼はまた大逆事件を契機として現代社会組織の不合理や欠陥を痛感した。そして彼は、よい生活のないところによい文学はないと信じた。そしてそのよい生活、よい社会を築くために、それをさまたげているさまざまの外的な力とたたかおうとした。当時の他の多くの文学者は、このたたかいを回避し、文学は文学だけの問題として、ほかのことには目をつぶって通ろうとした。啄木はそんな態度を卑怯だといって痛罵した。しかし啄木は自分自身、社会の不合理を改革するために、実際には果して何ができるだろう。貧乏で病弱な自分の無力をなげかざるをえなかった。「自分でも色々自分に弁解しては見るものの、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、智識売買制度の犠牲である。」そして「私自身が現在に於て意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置と、それから歌ぐらゐなものである。」かくして彼は「歌は私の悲しき玩具である。」と嘆息せざるをえなかったのである。

啄木の「歌は私の悲しい玩具である」という言葉は、当時の啄木の生活と心境とから自然に吐きだされた言葉である。これは啄木自身にとってはむろん真実の声である。しかしこれは決して

短歌そのものの問題ではない。それはあくまで啄木自身の、私の問題として理解されなくてはならぬのである。

九、『悲しき玩具』と「呼子と口笛」

歌集『悲しき玩具』は明治四十五（一九一二）年六月二十日発行となっているから、啄木が死んで二カ月あまりたってから出たものである。この歌集には「一握の砂以後」の短歌百九十四首と、「一利己主義者と友人との対話」「歌のいろいろ」という二つの短歌に関する感想文とで一冊になっていて、最後に土岐哀果の文章がある。この文章は、歌集『悲しき玩具』が出版されるに至った事情をくわしく伝えている貴重な文献だと思うので、その全文をここに掲げておく。

石川は遂に死んだ。これは明治四十五年四月十三日の午前九時三十分であった。

その四五日前のことである。金がもう無い、歌集を出すやうにしてくれ、とのことであった。で、すぐさま東雲堂へ行って、やっと話がまとまった。うけとった金を懐にして電車に乗ってゐた時の心もちは、今だに忘れられない。一生忘れられないだらうと思ふ。

石川は非常によろこんだ。氷嚢の下から、どんよりした目を光らせて、いくたびもうなづいた。しばらくして、「それで、原稿はすぐ渡さなくてもいゝのだらうな、訂さなくちやならないところもある、癒ったらおれが整理する」と言った。その声は、かすれて聞きとりにくかった。

「それでもいゝが、東雲堂へはすぐ渡すといっておいた。」といふと、「さうか」としばらく目を閉ぢて、無言でゐた。

やがて、枕もとにゐた夫人の節子さんに、「おい、そこのノートをとつてくれ、――その陰気な、」とすこし上を向いた。ひどく痩せたなアと、その時僕はおもった。

「どのくらゐある？」と石川は節子さんに訊いた。一頁に四首づつで五十頁あるから四五の二百首ばかりだと答へると、「どれ」と、石川は、その灰色のラシャ紙の表紙をつけた中版のノートをうけとって、ところどころ披いたが、「さうか。では、万事よろしくたのむ。」と言って、それを僕に渡した。

それから石川は、全快したら、これこれのことをすると、苦しさうに、しかし、笑ひながら語った。かへりがけに、石川は、襖を閉めかけた僕を「おい」と呼びとめた。立ったまゝ「何だい」と訊くと、「おい、これからも、たのむぞ。」と言った。これが僕の石川に物をいはれた最後であった。石川は死ぬ、さうは思ってゐたが、いよいよ死んで、あとの事を僕がするとなると、実に変な気がする。

石川について言ふとなると、あれもこれも言はなければならない。しかし、まだ、あまり言ひたくない。もっと、じっとだまって、かんがへてゐたい。実際、石川の二十八歳の一生をかんがへるには、僕の今ま

でがあまりに貧弱に思はれてならないのである。しかし、この歌集のことについては、も少し書いておく必要がある。
これに収めたのは、大てい雑誌や新聞に掲げたものである。しかし、ここにはすべて「陰気なノート」に依った。順序、句読、行の立て方、字を下げるところ、すべてノートのまゝである。ただ最初の二首は、その後紙片に書いてあったのを発見したから、それを入れたのである。第九十頁に一首空けてあるが、ノートに、あすこで頁が改めてあるから、それもそのまゝにした。生きてゐたら、訂したいところもあるだらうが、今では何とも仕やうがない。
それから、「一利己主義者と友人との対話」は創作の第九号（四十三年十一月発行）に掲げられたもの、「歌のいろいろ」は朝日歌壇を選んでゐたとき、（四十三年十二月前後）東京朝日新聞に連載したものである。この二つを歌集の後へ附けることは、石川も承諾したことである。
表題は、ノートの第一頁に「一握の砂以後明治四十三年十一月末より」と書いてあるから、それをそのまゝ表題にしたいと思ったが、それだと「一握の砂」とまぎらはしくて困ると東雲堂でいふから、これも止むを得ず、感想の最後に「歌は私の悲しい玩具である」とあるのをとって、それを表題にした。これは節子さんに伝へておいた。あの時、何とするか訊いておけばよかったのであるが、あの寝姿を前にして、全快後の計画を話されては、もう、そんなことを訊けなかった。（四十五年六月九日）
明治四十四（一九一一）年一月十三日、土岐哀果とはじめて会って、その日すぐ共同で新しい雑

誌を出そうと相談し、その雑誌の題名も啄木の木と、哀果の果をとって『樹木と果実』ときめ、そしてこの雑誌に多大の希望と抱負をもっていたことは前にくわしく書いた。
ところが、それから間もなく発病して入院することになった。そのころの日記をみるとつぎのように書いている。
一月二十七日。五六日前から腹が張ってしようがない。飯も食へるし、通じもある。それでゐて腹一帯が堅く張って、坐ったり立ったりする時多少の不自由を感じる。(この前日の一月二十六日の夜、平出修の家で大逆事件の書類を十二時までかゝって読んでいる――渡辺註)
一月三十日。今日は出社した。仕事をしてゐると大分苦しかった。(中略)又木君は近く始めようといふ製版所を共産的組織にするといふ決心を語った。この話は予をして喜ばしめた。「我々はもう決心してもいい。」さういふ言葉が口に出た。
二月一日。午前に又木君が来て、これから腹を診察して貰ひに行かうといふ。大学の三浦内科へ行って、正午から一時までの間に青柳医学士から診て貰った。一回見て「これは大変だ」と言ふ。病名は慢性腹膜炎。一日も早く入院せよとの事だった。
二月三日。午前に太田正雄君が久しぶりでやって来た。診察して貰ふと、矢張り入院しなければならぬが、胸に異状がないと言ってゐた。そのうちに丸谷君が来、土岐君が来た。雑誌のことはすべて予の入院後の経過によって発行日その他を決することになった。夜、若山牧水君が初めて訪ねて来た。予は一種の

シュニックな心を以て予の時世観を話した。声のさびたこの歌人は「今は実際みンなお先真暗でござんすよ。」と癖のある言葉で二度言った。
二月四日。今日以後、病院生活の日記を赤いインキで書いておく。早速入院することにして、一旦家にかへり、手廻りの物をあつめて二時半にこの大学病院青山内科十八号室の人となった。同室の人二人。夕方有間学士の診察。夕食は普通の飯。
こうして入院した啄木は、二月七日手術して腹の水をとった。その日の日記に「下腹に穴をあけて水をとるのである。ゴムの管を伝って落つるウヰスキイ色の液体が一升五合許りにもなった時、予は一時に非常な空腹に襲はれたやうに感じて、冗談をいひながら気を遠くした。」と書いているが、その後経過がよく、元気も出た。そしてまたドイツ語の勉強をはじめ、クロポトキンの自叙伝なども読んでいる。その間につぎのような注目すべき日記がある。
二月十七日。南北朝事件で昨日質問演説をする筈だった藤沢元造といふ代議士が、突然辞表を出し、不得要領な告別演説をして行方不明になった。新聞の記事は政府の憎むべき迫害の殆ど何処まで及ぶかを想像するに難からしめた。予の精神は不愉快に昂奮した。そのためか少し発熱した。
三月二十四日。新聞には昨日の議院で、国民党の大逆事件及び教科書事件問責案が秘密会として葬り去られたことを書いてあった。

そしてこのころから彼の発熱がはじまり、四〇度を前後する日がつづいた。診察の結果、右の肋膜に水がたまっていることがわかって、手術して水をとったが、やはり熱の高い日がつづいた。しかし、そういつまでも病院にいることができず、三月十五日に退院した。そして家に帰って、寝たり起きたりの日を送った。熱もさがらず、不眠になやまされる夜が多かった。

四月十七日の日記に「朝から疳癪が起ってしやうがない。雑誌をやめてしまはうと思って夜に丸谷君に来て貰って話した。理由の第一は雑誌が今や最初の目的をはなれて全く一個の小さい歌の雑誌にすぎぬことになったといふ事——」と書いているように、せっかく期待をかけた雑誌も彼の期待にそむくものになりそうなので、ついにやめる決心をした。そして毎日高い熱に苦しみながら、「丸谷君と無政府主義の事に関して議論した。」（4月20日）「毎日平民新聞やその後のあの派の出版物をしらべてゐる。」（4月22日）、「平民新聞にあった卜翁の日露戦争論を写し出す。」（4月24日）、「北輝次郎の『純正社会主義の哲学』を読んだ。」（6月5日）、そして七月十二日の日記には「発熱四十度三分、この日以後約一週間、全く氷嚢のお蔭にていのちをつなぐ。食慾全くなし。」と書いているようなありさまであった。

氷嚢の下より

まなこ光らせて、

寝られぬ夜は人をにくめる。

×

子を叱る、あはれこの心よ。
熱高き日の癖とのみ
妻よ、思ふな。

×

運命の来て乗れるかと
うたがひぬ——
蒲団の重き夜半の寝覚めに。

×

たえがたき渇き覚ゆれど、
手をのべて
林檎とるだにものうき日かな。

×

堅く握るだけの力も無くなりし

やせし我が手の
いとほしさかな。

×

やまひ癒えず、
死なず、
日毎にこころのみ険しくなれる七八月かな。

歌集『一握の砂』には回想や追憶の歌が多く、それがこの歌集の大きな特色といえるのであるが、『悲しき玩具』は大半が病気の歌であることが特色になっている。しかし『一握の砂』に見られたような感傷はよほど稀薄になり、病苦と貧乏になやむ現実生活を、実感に即してリアルに表現しているのである。そしてこの歌集にいたって、いわゆる啄木短歌の独自性がはっきりみられるようになるのである。

『悲しき玩具』に入っている作品のほとんど全部が一度雑誌に発表されたものであるが、『一握の砂』の例にしたがって、ここにその雑誌名と、発表された歌数と、それが形式の上でどんな風に変ってきているかを示しておこう。

『秀才文壇』四四年一月号「十二月」一〇首（うち七首採る。一首だけ二行、あとは三行。、。などなし。）

『早稲田文学』四四年一月号「手のよごれ」一五首。（全部採る。二行、三行の行分けで、、。などなし。）
『精神修養』四四年一月号「今年も」一〇首（うち七首採る。一首だけ二行、あと三行、、。などなし。）
『創作』四四年一月号「方角」九首。（全部採る。。、などなし。この号に土岐哀果の「人の事と自分の事」十八首が掲載されていて、これには、や。がついている。）
『創作』仝二月号「都合わるき性格」二〇首（全部採る。このときから、や。を使っている。）
『創作』仝三月号「寝台の上より」一八首。（全部採る。全部三行、、や。や！などがついている。）
『文章世界』仝三月号「病院の夜」一〇首。（全部採る。みな三行で、や。や各種の符号がついている。）
『早稲田文学』仝三月号「机の位置」一二首。（全部採る。仝上。）
『精神修養』仝四月号「病中十首」一〇首。（全部採る。仝上。）
『文章世界』仝七月号「五歳の子」一〇首。（全部採る。仝上。この中に「「労働者」「革命」などといふ言葉を聞きおぼえたる五歳の子かな」という歌があつて、この「労働者」「革命」が××になっている。）
『層雲』仝七月号「或る日の歌」一一首。（全部採る。仝上。）
『新日本』仝七月号「やまひの後」二六首。（全部採る。仝上。）
『詩歌』仝九月号「猫を飼はば」一七首。（全部採る。これが最後の作品である。）

これで見ると、短歌に、や。や！や？などを用いはじめたのは土岐哀果がはじめで（行を分けたのもそうであった）、それを学んで啄木もその翌月から実行していることがわかる。そして雑

誌に発表したのを、前にあげた土岐哀果の文章にある「陰気なノート」に啄木が写しとっていたものらしく、このノートでは、全部、や。がついているのである。なおノートに写しとるとき、直している歌も数首ある。

この「陰気なノート」を見ると、欄外に「八月」と書いて、「解けがたき　不和のあいだに身を処して、ひとりかなしく今日も怒れり。」「猫を飼はば、その猫がまた争ひの種となるらむ。かなしきわが家。」など十七首あるが、これが『詩歌』九月号に発表した「猫を飼はば」十七首であって、啄木の作った短歌の最後になっている。ところがこのノートは、はじめからずっと啄木自身がペンで書いていたのに、いまいった「八月」のところから筆蹟が変って、女らしい文字になっている。これは、当時啄木はもう自分で書く気力がなくなり、妻のせつ子に書かせたのではないかと想像される。そしてこのノートの最後の歌が「庭のそとを白き犬ゆけり。ふりむきて、犬を飼はむと妻にはかれる。」であるが、そのあとに啄木の筆蹟で、「大跨に縁側を歩けば」という一行だけが書いてあって、あとの二行がなく、それで終っている。

『悲しき玩具』の作品は、明治四十三年十一月末から、四十四年八月までの、約八カ月という短い期間の作品である。しかもその大部分が病床での生活であり、高い熱と、生活難に苦しめられていた時期である。その上七月中旬から妻のせつ子も発病して病院通いをはじめている。その

ころの日記を見ると、「せつ子も健康を害し、咳す。血色悪し。下平の診察にて気管及び胃腸悪しといふことなり。服薬す。」（7月14日）、「せつ子容態漸く悪し。本日大学病院にて見てもらひ、左の肺少し悪しとの診断をうけ来る。」（7月27日）、「せつ子青山内科の有馬学士の診察をうけ肺尖加答児と診察さる。」（7月28日）、「この頃せつ子は寝たり起たり故、炊事万端老母の役目なり。老体にて二階の上り下り気の毒なり。」（8月2日）というようなありさまである。そこで八月七日、小石川区久堅町七十四番地に小さな借家を探して引越した。二畳の玄関と、八畳に六畳の家で、庭もある手頃な家であった。

　陰気なノートの「八月」として書かれている十七首の作品は、この久堅町に移って間もなくの作であろうと思われる。とにかく『悲しき玩具』の作品は、前にもいったように、わずか八カ月ほどの間の、しかも病床生活の作品であるから、その取材の範囲は、おのずから彼の身辺の日常生活にかぎられているのである。福田恒存は「かれの眼は未来に向ってゐた――が、実生活は一点に停止してゐた。その矛盾は『悲しき玩具』に如実に示されてゐる。そこには焦燥感あり、歌の調子はとにかく乱れがちである。のみならず、そのトゥヴィアリズムはおほべくもない欠陥を露呈してゐる。生活に素材を失った啄木は、自然と鎖末な茶飯事にすがらざるをえなかったのだ。」（河出書房版、啄木全集「悲しき玩具」解説）といっている通り、鎖末な日常茶飯事を平凡に歌っているつまらな

い歌もあるが、しかしこの歌集の特色は、いっさいの虚飾を去って、あくまで生活の実感に即し自分という人間の姿を、冷静にみつめて歌っているところにある。そしてその人間の姿は、常に眼を未来に向け、新しい明日の社会を期待しながら、現実にはどうすることもできぬ焦燥感と不満に身もだえする人間の姿である。そこには自己憐憫と自嘲とが色濃くでているが、しかし従来の短歌につきものの諦観的な逃避への傾向はみられず、前向きの姿勢はくずしていない。

大逆事件以後の暗い時代のなかで、あくまで自己を主張して生きようとすれば、そこには現代社会組織の厚い壁が目の前にたちはだかっている。当時の多くの文学者——詩人・歌人は、この厚い壁の前でたじろぎ、足踏みから後退への道をたどりはじめたとき、（ここに近代の停滞と分裂とがあった。）啄木はこの厚い壁をうちやぶることによって自己主張と自我の拡大を期待したのである。しかし当時の未成熟な社会的条件のなかで、現代社会組織を、本質的な階級関係として理解することができず、「人民の中へ」といいながら、それは正しく労働者階級として理解できなかった。従って彼の考えた社会主義の内容も多分にあいまいであり、それは科学的な確信ではなく、空想的な願望にすぎなかった。だから彼の思想がラジカルであればあるほど、現実的にはどうすることもできない焦燥感に身もだえせざるをえなかったのである。この焦燥感は、彼の最後の詩「呼子と口笛」にもよくあらわれている。

啄は木四十二年の十二月から翌四十三年の一月にかけて「心の姿の研究」と題した六篇の詩を書いているが、それ以後は詩を書いていない。ところが四十四年六月久しぶりに詩を書いて雑誌『創作』（四四年七月号）に発表した。これはこの雑誌の巻頭に掲載されていて、「はてしなき議論の後」㈠㈡㈢の番号をつけた六篇のものであった。ところが彼の死後残されてあったノートには「呼子と口笛」という表題で、「はてしなき議論の後」「ココアの一匙」「書斎の午後」「激論」「墓碑銘」「古びたる鞄をあけて」「家」「飛行機」と、それぞれ題をつけて八篇の詩が書かれてあった。その後さらに「はてしなき議論の後㈠」「呼子の笛」「明るき午後」の三篇が発見されて、ここに合計十一篇が四十四年六月に作られていたことがわかったのである。ここには後に発見された「はてしなき議論の後」をあげておく。

はてしなき議論の後

一

暗き、暗き曠野にも似たる
わが頭脳の中に、
時として、電のほとばしる如く、
革命の思想はひらめけども――

あはれ、あはれ、
かの壮快なる雷鳴は遂に聞え来らず。

我は知る、
その電に照し出さるる
新しき世界の姿を。
其処にては、物みなそのところを得べし。

されど、そは常に一瞬にして消え去るなり、
しかして、かの壮快なる雷鳴は遂に聞え来らず。

暗き、暗き曠野にも似たる
わが頭脳の中に、

時として、雷のほとばしる如く、
革命の思想はひらめけども——

（一九一一・六・一五夜）

「革命の思想はひらめけども」「かの壮快なる雷鳴は遂に聞え来らず」というところに彼の焦燥感があったのである。もう一つの方の「はてしなき議論の後」は、各聯の終りの二行が「されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、"V NAROD" と叫び出づるものなし。」で繰り返されているが、ここにも彼のいらだちともどかしさが感じられるのである。「呼子と口笛」全体を通じて、はげしい焦燥感と一脈の感傷が底を流れているのであるが、これは前にもいったように、当時の社会的未成熟のためであって、当面している諸矛盾の解決が、まだ科学的、合理的に把握されなかったところからくる、いらだちともどかしさであったのである。

しかし啄木のこれらの詩は、時代の最も切実な感情をうちだし、時代の苦悩と焦燥とを真正面からうたい上げた詩として、当時の日本文学全体の上から考えても、正に最高の水準を示すものの一つであるといいうるであろう。壺井繁治は「呼子と口笛」について、「これらの詩が、彼の代表的作品として、日本近代詩のなかで独特なものとなったわけは、当時のラディカルなインテリゲンチャが、時代の動きと密着して多かれ少なかれなめねばならなかった悲しみ、悩み、いら

だたしさにふれているからであり、このように自己の感情を、時代の動向と切実にふれあわせた作品は『呼子と口笛』がはじめてであり、それは彼の晩年の短歌や評論とともに、現代文学の発展にたいしても、示唆的な多くの問題を提出しており、またずっとおくれてあらわれてきたプロレタリア文学の前触れでもあったのである。」（河出書房版啄木全集「呼子と口笛」解説）といっているが、すでに重い病にかかり、しかも、もはや最後に近いころの作品に、このようなたくましい、健康な意欲（それは特に「墓碑銘」において）をみることができるのを、われわれはむしろ驚かざるをえないのである。

一〇、啄木の死

何となく、
今年はよい事ある如し。
元日の朝晴れて風無し。

四十四年の一月、啄木はこういう歌をつくっている。しかし「何となく、今年はよい事ある如

し」と思ったこの年は、啄木にとってやはり暗いみじめな一年であった。この年十一月「平信」という文章を書いている。この文章は「親愛なる岡山儀七君。――」という書き出しで手紙の形式になっているが、そのなかにつぎのようなところがある。

或晩、やっぱり同じ事を考へてゐながら、何時しか神経が昂ってきて、いくら眠らうと思っても眠れない気持になった。真暗な室の中に三時間もさうして眼を開いていた末に、とう／＼僕は一人で起きて電灯の捻子をひねった。恰度一時だった。火鉢には火が絶えて、鉄瓶にもう少しの余温もなかった。間もなく妻も目を覚して起きて来た。

「おい、俺はやっぱり駄目だよ。」叱りつけるような調子で出し抜けにかう言った。「俺はもう書く事なんか止さう。俺の頭にある考へは、みんな書く事の出来ない考へばかりだ。書いて書けない事はないが、書いたって発表する事が出来ない。」

「さうですねえ。」妻はかう答へた。さうして適当な言葉を見出さない時に何時もする通り、眼を急がしくパチ／＼さしてゐた。

「しかし俺の考へは間違ってゐない。」

二人は火のない火鉢を中にして、稍しばし無言のまゝ相対してゐた。

大逆事件の発覚から、言論の自由はいよいよ圧迫された。「社会」という文字を使うことさえ

危険だとされた。そして思想取締りのための特高警察というものができたのもこのころからであった。それは文字通りの暗い谷間の時代だったのである。こういう時代的圧迫のなかで、啄木は「俺の頭にある考へは、みんな書く事の出来ない考へばかりだ。」と嘆息したのである。

こうして希望をもってむかえた四十四年も、暗澹とした気持のなかで暮れてゆくのである。四十四年最終の日記をみると、「十二月一日。妻が社に行って二十七円前借して来た。」「十二月二日。払ひは滅茶苦茶、家賃ものばしたが、それでも丸谷君へ返すのが足らなくなって、五円手紙に封じて送った。」「十二月三日。咳が出、喉がいたみ、さうして気分がわるくて寝てゐた。」「十二月四日。小樽の佐田庸則から集金郵便で旧債六円の取立てが来た。手紙をかいた。三月まで延期。」「十二月二十六日。賞与二十円、前借二十七円、せつ子行って受取って来る。」「十二月三十一日。残金一円十三銭五厘、今日は面倒なかけとりに私が出て申訳をした。夕方が八度二分。百八の鐘をきいて寝る。」とあって、十二月の日記はこの六日間だけしか書かれていない。

明治四十五（一九一二）年、啄木二十七歳で、啄木の生涯を終る年である。ここにもう少し日記の一部を引用しておく。

一月一日。今年ほど新年らしい気持のしない新年を迎へたことはない。といふよりは寧ろ、新年らしい気持になるだけの気力さへない新年だったといふ方が当ってゐるかも知れない。からだの有様と暮しのみ

じめさを考へると、それも無理はないのだが、あまり可い気持のものではなかった。朝にまだ寝てゐるうちに十何通かの年賀状が来たけれども、いそ〳〵と手を出して見る気にもなれなかった。
いつも敷いておく蒲団は新年だといふので久し振りに押入にしまはれたが、暮の三十日から三十八度に上る熱は、今日も同様だった。二日だけは気の張りでどうかかうか持ちこたへてゐたが、今日はとう〳〵まゐってしまった。

一月二日。新聞によると、三十一日に始めた市内電車の車掌、運転手のストライキが昨日まで続いて、元日の車中はまるで電車の影を見なかったといふ事である。明治四十五年がストライキの中に来たといふ事は、私の興味を惹かないわけには行かなかった。何だかそれが、保守主義者の好かない事の、どん〳〵日本に起って来る前兆のやうで、私の頭は久し振りに一しきり急がしかった。

一月三日。たとへやうもない不愉快な日であった。熱がやっぱり三十八度の上にのぼった。ピラミドンを服んだ。(中略)

市内の電車は二日から復旧した。万朝報によると、市民は皆交通の不便を忍んで罷業者に同情してゐる。それが徳富の国民新聞では、市民が皆罷業者の暴状に憤慨してゐる事になってゐる。小さい事ながら私は面白いと思った。国民が、団結すれば勝つといふ事、多数は力なりといふ事を知って来るのは、オオルド、ニッポンの眼からは無論危険極まる事と見えるに違ひない。

一月七日。昨日も今日も言ひがたき不愉快のうちに暮らさねばならなかった不幸を私は此処に嘆かずに

は居られない。妻はこの頃また少し容態が悪い。髪も梳らず、古袷の上に寝巻を不恰好に着て、全く意地も張りもないやうな顔をしてゐて、さうして時々烈しく咳をする。私はその醜悪な姿を見る毎に何とも言へない暗い怒りと自棄の念に捉へられずに済まされない。

このような状態のなかで、母も一月中旬ころから発病した。熱が三十八度二分もあり、咳といっしょに血をだすようになった。しかし金がないので医者にもかかれず、売薬で一時ごまかしていた。「十三日か十四日の晩から、せつ子と京子を隣室へ母と一緒に寝せることにした。せつ子はやっぱり咳がはげしいので、炊事向は万事また母一人でやってゐたが、その母が二三日前から時々咳と一しょに血を吐くやうになった。それでもせつ子は、自分は薬を怠けて飲まずにゐたりする癖に、水まで母にくませてゐた。あまり顔色がよくないので、今夜熱を計ったところが、三十八度二分、脈搏百〇二あった。医者に見せたくても金がない。兎も角二三日は寝てゐて貰ふことにした。『明日から私がします』とせつ子が言った。」(1月19日日記)

困りはてた啄木は、森田草平に金の無心をした。そしたら森田は、夏目漱石の奥さんからの見舞として十円持ってきてくれ、知人の医者を紹介してくれるという手紙もきた。一月二十六日の日記につぎのように書いている。

待ちに待ったが、その手紙の中の医者はとう〳〵日が暮れても来てくれなかった。そこで思ひ切って近

所の三浦といふ医者に使ひをやったところが、三十位の丁寧な代診が来た。診察の結果は、母はもう何年前よりとも知れない痼疾の肺患を持ってゐて、老体の事だから病勢は緩漫に進行したにちがひないが、もう左の肺は殆ど用をなさない位になってゐるといふ事だった。

喀血したからこそ「或は……」と思ってゐたものゝ、これは私にとって全く初耳だった。しかし不幸にして私は、医者の言葉を証拠立てる色々の事実を知ってゐた。母がまだ十五六の頃に労症乃ち今の肺病をわづらったといふ話も母の口から聞いた事があったし、それぱかりか数年前から、母は左を下にして寝れば咳が出て眠れないと言ってゐた。さうして去年私の入院中にも母は多少喀血したことがあるさうである。……私はまた長姉の死因についても考へなければならなかった。（中略）

母の病気が分ったと同時に、現在私の家を包んでゐる不幸の原因も分ったやうなものである。私は今日といふ今日こそ自分が全く絶望の境にゐることを承認せざるを得なかった。私には母をなるべく長く生かしたいといふ希望と、長く生きられては困るといふ心とが、同時に働いてゐる……

母の喀血によって、啄木は自分の病気の原因も、妻の病気の原因もはっきり思い知らせれたのであった。

わが病の
その因るところ深く且つ遠きを思ふ。

目をとぢて思ふ。

一月二十九日に、朝日新聞社の有志十七人から集った見舞金三十四円四十銭が届けられた。これで質屋に入っていた着物を出したり、子供に玩具を買ってやったりした。そして啄木は「非常な冒険を犯すやうな心で、俥にのって神楽坂の相馬屋まで原稿紙を買ひに出かけた。帰りがけに或本屋からクロポトキンの『ロシャ文学』を二円五十銭で買った。」（1月30日日記）といくらか元気をとりもどしている。しかし熱は毎日三十八度を越えていた。

啄木の日記は二月二十日で終っている。その後は日記を書く気力さえ失っていたのであろう。その最後の日記はつぎのようなものである。

二月二十日、日記をつけなかったこと十二日に及んだ。その間私は毎日毎日熱のために苦しめられてゐた。三十九度まで上ったことさへあった。さうして薬をのむと汗が出るために、からだはひどく疲れてしまって、立って歩くと膝がフラ〳〵する。

さうしてゐる間にも金はドン〳〵なくなった。母の薬代や私の薬代が一日約四十銭弱の割合でかゝった。質屋から出して仕立直さした袷と下着とは、たった一晩家においただけでまた質屋へやられた。その金も尽きて、妻の帯も同じ運命に逢った。医者は薬代の月末払を承諾してくれなかった。

母の容態は少しい可いやうに見える。然し食慾は減じた。

この最後の日記を書いた少し前の一月二十七日に土岐哀果へあてた手紙に「善い事がどっさり来る筈の四十五年が、一月早々からこの通りぢゃ、僕も少々がっかりだ。一体誰がかう僕をいぢめるのかな。いくらいぢめたって仲々降参する僕ぢゃないのに」と書いている。しかし三月七日、母はついに死んだ。啄木はこの打撃ですっかり元気をなくした。そして彼の病状も悪化するばかりだった。父はその前の年の九月、二度目の家出をして室蘭の山本方(啄木の次姉の嫁ぎ先)に厄介になっていたので、母の死んだときには家にいなかったのだが、母の死をきいて、急いで上京した。

俺も母の死ぬよほど前から毎日三十九度以上の熱が出て床についてゐたために、同じ家にゐながらろくに慰めてやることも出来なかった。お前の手紙は死ぬ前の晩についた。とてもあれを読んでやっても、終ひまで聞いて居れる様な容態でないので、節子が大略を話しすると、お前から金が来たといふ事だけがわかったらしかった。それからその晩何時頃だったかはよく記憶しないが「みい、みい」と二度呼んだ。「みいが居ない」と言ふと、それ切り音がなくなったけが、この外に母はお前について何も言はなかった。翌る朝、節子が起きて見た時にはもう手や足が冷たくなって、息はしていたが、いくら呼んでも返事がない。そこで俺も床から這ひ出して呼んで見たがやっぱり同じ事だ。すぐ医者を迎へたが、その医者の居るうちにすっかり息が切れてしまった。お前の送った金は薬代にならずに、お香料になった。

これは妹の光子へ送った手紙で「自分ではかけないからお友達に代筆して貰ふ」と書いてある。そして啄木の書簡として残っている、これが最後のものである。

四月になって、彼は急に古い友人である金田一京助に会いたくなって、手紙をだした。金田一はすぐやってきた。啄木は金田一の顔を見ると、「ひよっとすると今度は駄目だ。」といった。「医者は?」と金田一がきくと、「薬代が滞るものだから、来てもくれない。」といい、「いくら自分で生きたいと思っても、こんなだもの」といって、布団をあげて見せた。そこにはまるで肉のなくなった骸骨のような腰骨が見えた。金田一はおどろいて、「これぢやいけない。何よりも、ともかく何かすきな滋養物を食べなければ」というと、啄木は「すきなものどころか、米もない。」といって顔をゆがめて笑った。

金田一はさっそく家へ帰って、月給の残りの十円をもって引返してきた。その十円を啄木の前にだすと、啄木は目をふさいだまゝ、「片手を出しておがむやうな手真似をした。」と金田一は書いている。

それから数日たって、若山牧水が啄木をたずねた。そして啄木の病気が意外にひどいのにおどろき、「助かる命も金がないために自ら殺すのだ」といってなげいた。牧水はこのありさまを土岐哀果につたえた。そこで哀果は歌集の出版を東雲堂に交渉し、例の「陰気なノート」を啄木か

花うけとって、その稿料の二十円を屆けた。しかしこの稿料で買った強壮剤も少しばかり手をつけただけだったし、歌集も生前ついに見ることができなかった。啄木はこの年四月十三日の朝、永久の眠りについたのである。臨終の床のかたわらには、若山牧水と一禎と、妻のせつ子三人だけという淋しさであった。当時六歳だった京子は、父の死も知らず、折から盛りであった桜のらびらを拾って無心に遊んでいたと牧水が後に書いている。

中野重治は『啄木詩集』（月曜書房版）の解説のなかに、つぎのように書いている。

啄木の最後の批判の的が天皇制国家でさへなかったならば、この国はこれほど悲惨な死を啄木に与へなかったかも知れない。あるひは却って保護をさへ与へようとしたかも知れない。しかし啄木の的は啄木がほしいまゝにえらんだものではなかった。それは天皇制国家そのものが、その帝国主義的躍進の力で、そこから来る国民生活の実相そのもので啄木の前にかかげたものであった。さうして啄木は、それを彼の的とした。天皇制国家はそれ自身の力で、この病気の、貧乏な、からだの小さな詩人を、うす緑色をした何かの幼虫ほどにあしらって、指さきでこすり殺してしまった。

啄木は土岐哀果への手紙に、「一体誰がから僕をいぢめるのかな。」と書いた。彼は自分をいぢめるものの正体を、おぼろげながらつかんではいた。しかしまだほんとうに、帝国主義日本の階級的本質としてはっきりつかんでいたとはいえぬかも知れぬ。そこに彼のあせりといらだちがあ

った。それはしかし、時代の未成熟としてやむをえないことであって、啄木はそのために、暗闇のなかに物をさぐるように、足ずりし、手さぐりしながら、明るい明日の時代に向って一歩一歩前進したのであった。

啄木の文学が、浪漫主義から自然主義へ、そして自然主義から社会主義へと、短期間のうちに発展していったのは、何より彼の人生にたいする誠実さからである。「人生いかに生くべきか」を誠実に追求することに自分の文学をむすびつけて考えたからである。ここから自己の苦悩を時代の苦悩として痛切に感じとり、「時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。」といい、「私の文学に求むる所は批評である。」と、当時としては最も高い立場から文学の新しい方向を示唆しているのである。

啄木が「どうしてもそのまゝにしておけぬ」といった現代社会組織、経済制度、家族制度等々は現在のわれわれにとっても当面する切実な問題として残されている。それは啄木の時代よりももっと深刻に解決を迫られている問題である。これらの解決は、啄木の時代にはまだ多分に空想的願望としてしか考えられなかったのであるが、われわれの時代にはすでに現実的、具体的に解決の方向が明らかにされている。啄木がいった「明日の必要」はすでにソ同盟や新中国その他において実現されつつあるのである。啄木のおぼろげに描いていた理想はついに地上の現実のものに

なっている。

啄木の短い生涯は、文字通り血のにじむような悪戦苦闘であって、そして彼は孤独のうちに、いたましく傷つき倒れた。しかしそれは先駆者の名にふさわしい輝かしいものである。啄木は永久にわれら民衆の友である。

（おわり）

石川啄木研究文献

石川啄木全集（全十六巻）　岩波書店

中野重治著「啄木」（アテネ文庫）　弘文堂

岩城之徳著「啄木歌集研究ノート」　第二書房

石母田正著「続歴史と民族の発見」　東大出版会

杉浦明平著「石川啄木」　福村書店

窪川鶴次郎著「石川啄木」　要書房

斉藤三郎著「文献石川啄木」（正続二冊）　青磁社

日本文学アルバム「石川啄木」　筑摩書房

「石川啄木読本」雑誌「文芸」臨時増刊　河出書房

御殿場

◆◆ 読 者 え お 願 ◆◆

読後の感想を小社宛にお送りいたゞけましたらありがたく存じます(編集部)

渡辺順三(わたなべじゅんぞう)(歌人) 明治27年富山県に生る 富山県立中学中退 現在新日本歌人協会常任委員 新日本文学会幹事
主なる著書《唯物弁証法読本》《第二弁証法読本》《近代短歌史》《短歌と俳句》
歌集《貧乏の歌》《烈風の街》《日本の地図》 その他
現住所 東京都世田谷区北沢3ノ953

評伝石川啄木 1955年5月1日 印刷 1955年5月5日 発行 定価 130円 地方価 135円

著 者 渡 辺 順 三
発行者 山 田 松 太 郎
印刷所 光陽印刷株式会社
東京都文京区林町43
発行所 新 興 出 版 社
出版团體 木曜会々員
電話大塚(94)1258番 5543番
振替東京116627番